タビのキ

じろちょう 著

タビのキ

旅に出る
そこにはいろんなモノが待っている
美しいモノ
温かいモノ……

旅に出会う
そこではいろんな人が待っている
美しい人
温かい人……

そこは
木がそびえ
記録をもち
気持があり
紀行を経て
記憶になる

すべてを感じたい……
すべてを伝えたい……

── タビのキ　目次 ──

チャリダー日記

・紀伊半島編①……6
・紀伊半島編②……24
・北海道編……38
・春野編……66

ライダー日記

・春野編……80
・長野編……94
・西国訪問編……104

放浪日記

・メキシコ編……118
・モンゴル編……142

あとがき

チャリダー日記

紀伊半島編①

工具はドブに吸い込まれていった……。

僕は四年間ほど、京都に住んでいました。そこで、ふと考えるわけです。紀伊半島を走らなければならない！……。まぁ、手頃な距離で手頃な場所だったのでチョロリチョロリとチャリダー発進です。

走り始めてから四時間ほど経ったときだったと思います。ベキョベキョ……と音がしてペダルを漕ぐのがものすごく大変になりました。そう、パンクです。こりゃイカン、ということで早速修理です。

パンク修理ほど面倒くさくて嫌なことはないですねぇ。だいたい三〇分もあれば修理はできるんですが、三〇分あれば一〇キロくらい走れるわけですよ。その修理時間の苦痛なことといったら、もう……。で、まだ、これは昼間だからマシなんです。もしもこれが夜だったら……、そう考えるだけで泣きたくなります。どこに穴が空いているのか探すだけでむやみやたらと時間がかかりますからね。

さて、このときは調子よくパンク修理をしていました。が、突然、工具の一つが消えました。ドブの隙間に落ちてしまったのです。かなりのショックでしたね。なんとかして修理はできましたが、あまりにくやしくて、思わずそこの写真を撮ってしまいました。

何ていう名前の川だったっけ？

いつものことですが、僕がテントを張る場所として好むのは橋の下なんです。何となく懐かしい感じがするから、というわけではありません。橋の下だったら雨が降ってもテントがぬれることはないし、スムーズに身支度ができるからなんです。なので橋の下は最高です。

そして、橋の下で考えるのです。「僕は、なんでチャリンコに乗っているのか」と……。自転車に乗っていると、当然ですが疲れます。疲れてくると頭の中は澄んできます。自転車で走っていると頭の中の世界がすごく広がっていくのです。

広がっていく世界の中でも一番たくさん流れていく世界は「自分」という世界です。自分について深く考えている時間がたくさんあるんです。これは僕にとってとても貴重なことでした。他との比較ではない「自分」というものをじっくりと見つめることができたのです。

周りには、他者のことを考えられない人がたくさんいます。それは、まず、自分のことを考えられないからなのかもしれません。自分のことをしっかり見つめて、自分のことを深く考えられる人は、きっと他の人のことにもじっくり思いをめぐらせることができるんじゃないかと思います。

「自分」も「周り」も、みんな大事なものです。

これはたぶん志摩半島のどこか……。

チャリンコで走ることの良さは、景色を充分に楽しめることです。まず、スピードがゆっくりしているので、周りを見ることができますよね。おまけに道ばたにチャリンコを止めればいくらでも眺めていられます。やっぱりチャリダーはやめられません。

で、この時も海の美しさに目を奪われ、チャリンコを止めて写真を撮っていました。リアス式の海岸線にキラキラと輝く水面。きれいに晴れた空。南紀の穏やかな空気。日本の美しさを心で感じる喜びです。チャリダーのスピードでなければ味わえない、ぜいたくなひとときなんです。

道端には、車では見過ごしてしまうような、ほんの小さな発見がたくさんあります。路面を見ていると、何やらいろいろ落ちているんです。「おっ！」と思って拾い上げ、今でも便利に使っているのが、革製の軍手です。たぶん、トラックが落としていったと思うんですが、丈夫で、しかも使いやすいんです。これはお得でした。ラッキー！

チャリダーのスピードには限界があります。僕は軟弱ですから、一日平均一〇〇キロ走れば上出来です。それでも、のんびりのんびりいろんな発見、いろんな出会いを楽しみながら日本各地を訪れていくのです。

昔は汽車でも走っていたのかねぇ……。

旅をしていると、時々道をまちがえます。この時もまちがえました。何だかわからん五知峠というところを必死に上っていたみたいです。ちょうどこの辺で気づいて下り坂をシューっと引き返すことにしたんですが、坂を上る苦労をした分、ものすごく損した気分になりました。

例えば、車で一〇分迷ってしまうのと、チャリンコで五分迷うのと、どっちがつらいでしょう。これが山道だとその差はとても大きなものに感じられます。チャリンコは体力勝負で、その上に精神的なダメージが大きいとやってられません。

でも、本当は道に迷うってことはいいことなのかもしれませんね。不思議な出会いや発見が待っているかもしれないし……。当たり前の道を走っていたら、その世界とは縁がなかったはずですから……。

この時の発見は、レールのない線路。枕木だけが残されてたたずんでいました。かつてはここにレールが光り、その上を旅人を乗せた列車がここを走っていたんですよね。列車の中では旅人がその旅路を思い、風景を眺め、人生に思いをはせていたことでしょう。

「月日は百代の過客にして行き交う年もまた旅人なり……。」となりの道を車が通り過ぎていくとき、何となく寂しそうに見える枕木でした。

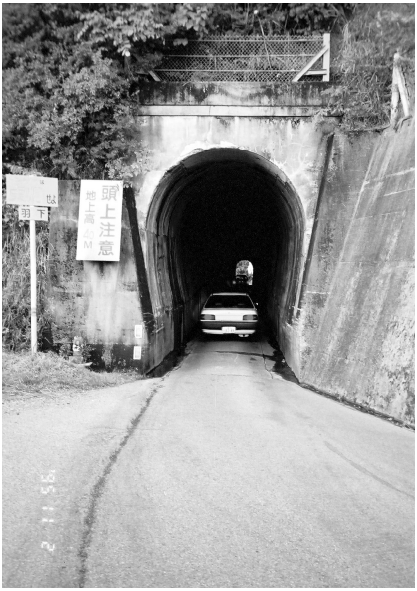
橋の下は風通しがいいのかなぁ……。

橋の下に何かがぶら下がっていました。んん…?…何だろうとよく見て、よく考えてみました。「あの構造は空気を通しやすい構造だ、乾燥しているぞ。そうだ、干物を干しているんだ!」と、自分勝手な結論に至りました。

なんで、そんな発想になってしまうのか……。僕の実家が焼津であることにも原因があるかもしれません。うちの近所の魚屋さんでは、よく干物が干されていました。細かい網の上にアジなどの魚の開きが並べられていて、その周りにはハエが獲物を狙っていたりして……。

それにしても橋の下にこんな風に物を吊しておくなんて、のどかなモンですねぇ。誰かが持っていってしまったり、来た人が何か変な目で見たりしないんでしょうか。そんなことよりも干物の出来の方が重要な問題なんですね。そうです!魚を食べると頭が良くなる〜♪し、魚を食べると体にいいのさ♪……なのです。

いや、決して干物だと断定できるわけじゃないんですけど、いろんなことを連想させる構図です。頭の中の世界はどんどん広がるし、広がった分だけ自分が大きくなれるような気がします。柔軟なものの考え方ができる人間……いつまでもそんな人間でありたいと思っています。



車一台でいっぱいになってしまうとは……。

「むむ！これはトンネルではござらぬか！だが、妙に狭くて小さいトンネルでござるなぁ……。もし、拙者がチャリンコで中を走っていたら、ひかれているではないか！」などと、くだらないことを考えていた僕でした。

けど、この小ささはお茶目でしょ。ドラえもんの道具にガリバートンネルという物があったように記憶しているのですが、そんなイメージが重なります。ガリバートンネルはそれをくぐると、そのトンネルが小さくなるにつれて自分の体も小さくなるという物だったと思います。小さくなった体で、ミニチュアとして作り出した自分の街を自由に満喫するのです。

別にミニチュアの世界を期待しているわけではないですが、トンネルの向こう側には何があるんだろうというワクワクした気持ちがうずいてきます。特にこのトンネル、中には電球一つついていません。未知の世界に飛び込むんです。

設備が整って車には都合のいいトンネルが、世の中にたくさんあります。でも、不器用に、何とか車一台をやっと通してあげられるようなトンネルもあるんです。そんな、トンネルの肌に触れられるような、暗闇と優しさと暖かさが同居した場所がここにはありました。

このトンネルの向こうに、また別の世界が現れます……。

自動撮影でこんなことする僕って、お茶目！

倉庫の跡でしょうか、骨組みだけです。その横には僕のテントが張られています。そして、実はそのテントから顔を出している男がいるんですが、気づいたでしょうか。もちろん、僕です。ど～も。

橋の下でのテント生活も紹介しましたが、紀伊半島は山っぽいところが多くて寝る場所には苦労しました。大きな川がなくて……、ということは橋がないんです。そうなると、空き地みたいな所でもテントを張らなければいけなくなるんです。

しかも、紀伊半島の中に僕の知り合いはいないという悪条件。「国内チャリダー生活、宿泊費ゼロ」の記録が維持できるかどうかの瀬戸際でした。まぁ、どうにかなるモンなんですけどね。

でも、知り合いがいるかいないか、というのは大きな違いなんです。僕は日本全国に知り合いがいます。焼津出身であちこちに散らばったヤツもいるし、大学時代の友達もいる、また、その場で知り合ったという人もいます。様々な人との出会いが僕のチャリダー生活を支えてくれていました。

人との出会いは貴重です。もしかすると出会いたくなかったと思ってしまう場合もあるかもしれません。でも、いい出会いを作るのは自分。僕はこれからも多くの出会いを求めているし、それがいいものになることを思ってワクワクしています。

紀伊半島のどこか……。

美しい！自転車で走っていて何気なく景色を見ると、ものすごい美しさでした。目の前に写真集か絵はがきの世界がドカ～ンと広がっているんだから、こりゃすごいモンです。そこで、朝日に光る愛車「ふぇにっくす号」をメインに記念写真です。

でも、これがどこなのか正確にわかりません。「アホか！」と言われればそれまでなんですけど、写真を撮ってそれが何なのかわからないことがよくあるんです。僕の旅の写真を他の人に見せると、「なに？これ？」とよく言われます。なんでそんなモノが写っているのか理解できないのです。それで、普通、僕は自分の写真の横には短いコメントを書いておきます。

僕は写真家ではないので、美術的な傑作を生み出そうとは全く思っていません。ただ単に自分の旅の記録をしたいと思っているだけです。自分にしか撮れない思いのこもった写真を撮ろうと思っています。その時々で気になったモノを写真に収めています。だから、僕は写真一枚ずつに言葉を添えることができます。僕の思いです。

ただ、時間が経ってからその写真を現像したりすると、その時の思いを忘れているなどという情けない事態が起こるんですけどね……。

今どき、木造の校舎って、無いよねぇ……。

ここは尾鷲市です。年間の降水量がものすごく多い所ですよね。んで、曽根というところがあったんですが、そこの学校です。瓦屋根で、ウィ～ンとなっているのがものすごくかっこいい建物だと思います。

小さい頃、宿泊訓練みたいのがあって、この学校のような雰囲気の廃校に泊まったことがあります。校庭のすみの方に二宮金次郎の像が立っていました。それはいいんだけど、教室の一番奥の所にその像と同じ形のシミがついていたんです。そっくりそのままでした。二度とその教室へは行けませんでしたねぇ。

さて、僕が小学校に通っていたとき（ほんの一〇年ほど前？）、校舎はすでにコンクリートの物だったので、僕は実際に木造校舎で勉強したことはありません。ただ、窓枠がアルミサッシではなくて木の枠だったような気がします。ピンク色の怪しげな窓枠の色がくすんだ校舎のコンクリートの色と手をつないでいました。

誰にでも自分が学び・過ごす時間というものがあります。後からその時間が、いいものとして浮かび上がるか、いやなものとして迫ってくるのか……。カギを握るのは自分だと思います。僕自身、これから湧き出てくる「校舎」が懐かしくて暖かいものであってほしいと思っています。

……思いっきり山の中。

よっしゃ〜！行くぞ〜！……と勢いづいて進む僕の前に現れたのはすごい山道。「あれ？こんなはずじゃないのに……もう少し行けば、ちゃんとした道になるんだよなきっと……」と思いつつ、結局山道が続き、あえなく退却し、他の道を使うことにしました。

よくあることです……、自分はここにいる！と思って地図を眺めていても、実はちがっているということ……。本質は方向音痴だというだけかもしれません。でも、僕が持っていた地図は山岳地図でもないし、細かい物でもなかったのです。騙されたような気分でした。

どこまで行って、どこから引き返すのか、その見極めはすごく難しいと思います。もしかしたらこの道は正しかったのかもしれません。でも、僕は自分の地図を読む力に自信がなかったし、この道を続けて進んでいく勇気はありませんでした。ただ単に進むのがつらくて引き返したというのも理由のひとつですけどね……。

この「見極め」という話、地図のことだけじゃないと思います。自分が正しいと思って行動していても、実は間違えていることもあります。本当に正しいこともあります。何が正しいのか、見つめる眼を鍛えたいものです。

紀伊半島一周完成！

太地。こんな地名を知っているでしょうか。鯨で有名な所です。実は「紀伊半島を一周する」というときに僕は二回に分けて一周しました。この時より以前に反時計回りで太地まで来ていたんです。だから、太地まで来たら紀伊半島一周完成なんです。

で、鯨の町ですから、町のあちこちに鯨の雰囲気を感じられるものがありました。その雰囲気だけでとても幸せな気分になりました。僕は、なぜだか鯨が好きでなんです。あの大きな体とそこから出てくるおおらかなイメージが僕を癒してくれるのかもしれません。でも、食べちゃいました、鯨。……うまかったです。

さて、紀伊半島一周の話ですが、結構しんどいものがありました。前半・一回目は冬の終わりごろで、雪とか舞っていました。メチャクチャ寒くて、テントの中で凍えていた記憶があります。後半・二回目は秋の終わりごろで、やっぱり朝晩は冷えました。でも、一周を完成させました。

もし、僕がいっぺんに完成させようとしていたら、二度と「チャリダー変身」なんて思っていなかったかもしれません。目標を持つことの大切さと、それを達成させる方法の大切さの両方を感じたように思います。

ごっそり削ってます。

さあ、紀伊半島の中心部へ向かってチャリンコを進めましょう。えらいこっちゃ、えらいこっちゃ……。思いっきり山ん中で、体力がもたん状態です。でも、走ってしまうんですねぇ。坂道は嫌いじゃないんです、実は。だって、上りがあれば必ず下りがあるんですから……。

きらいなのは向かい風です。風は、いつ、どのように変わるか全くわかりません。運が悪ければ一日中向かい風との戦いのこともあります。ペダルをこいでもこいでも前に進んでいかない向かい風は、雨と同じくらいにきらいです。かなり、つらいですよ……。

ところが、向かい風が急に追い風になってスイスイ走れるようになることもあります。そんなときは「風の神様ありがとう」と心にもないことを口走ったりしてしまいます。それくらい、風ってすごいんです。

さて、坂道のことですが、これもまた、人生みたいなものです。上り坂でなかなか前に進めない時もあれば、下り坂で何も考えずに進める時もあります。でも、確実に上りがあれば下りがあります。坂の頂上の向こう側に何があるのか期待をしつつ、下り坂を転がり落ちてしまわないように注意しながらじっくり前に進んでいきたいものです。

自転車専用道。

山を走っていましたら、目の前から道が無くなっていました。すごいことです。雨の時に崩れてしまったんでしょうが、見事に道が無いですよね。車であったら、あきらめてここで引き返すしかない所ですよ、こりゃ……。

しかし、こちらはチャリダーです。こんな道に負けてはいられません。崖っぷちのほんの少し残った道を恐る恐る進みます。かなりの恐怖感でした。こんな所で落ちてしまったら、誰も見つけだしてくれません。何週間も誰からも発見されずに死んでしまったりするのかと思うとゾッとします。

僕の目の前に、いつもは、まぁ普通の道が伸びています。でも突然道がなくなることもあるわけです。大学四年生の時、僕の将来への道がなくなってしまったかのように見えたことがあります。採用試験に落ちました。大学を卒業しても、働く場所がありませんでした。

僕に残されていた細い道は勉強をすることでした。そこを通り抜けなければ前に進めないのです。いつそれが崩れ落ちてしまうのかドキドキしながら、毎日約一〇時間の受験勉強を続けました。本当につらい道でした。ま、おかげさまで仕事を得ることができて、しあわせな時を過ごすことができるんですけどね……。

尾根すじに色が変わっている……。

ものすごい坂道を上っていくと、ふっと視界がひらけることがあります。そんな景色を見たとき、「チャリダー最高！」と叫びたくなるんです。苦労しただけにその喜びも倍増するというものです。

紀伊半島も海岸線を走っているぶんにはまだいいんです。ところが中の方へ入っていくと、ホントに山ばっかりでえらいことなんです。そのころ住んでいたのが京都で、そこまでたどり着くにはかなりの体力が必要になります。山は山でもそこら辺にある山のレベルじゃないですからね……。

京都の鞍馬にもありますが、天狗が住んでいたというような伝説……。このあたりにもいそうです。うっそうと茂った木々の間から「何か」が出てきそうな雰囲気なんです。剣道二段じゃ天狗にはかないません。

それが、山のてっぺんに近づくとだんだん周りが明るくなってきます。光も差してきて明るいし、下り坂を夢見て気分も明るいしいい感じです。……と、そこに、ぱっと視界がひらける所が出てくるんです。尾根すじに色の変わった木が立ち並んで、僕を迎えてくれました。

美しいものに迎えてもらったとき、僕らは幸せです。僕は美しいものを美しいと感じられる心を持ち続けたいと思います。

何といっても「行者還」。思いっきり山ん中。

日本にはいろんな地名があります。理解不可能意味不明摩訶不思議訳ワカメ……といった名前もいっぱいあるんですが、ここは「行者還」、厳しそうな名前です。修行僧もこのあたりで還っていったんでしょうね。そこをチャリンコで行くのはとても大変でした。

熊野あたりでは昔から修験道の修行がよくされているようです。あのホラ貝をプォ～ンとか鳴らしている人たちですよね。滝に打たれたり岩登りをしたり、自分を険しい所に立ち向かわせてそれこそ天狗のような活動をするみたいです。あれって、職業なんでしょうかねぇ……。

修行といえば、インドにもサドゥと呼ばれる修行僧がいて、聖なる川・ガンジス川のほとりなどで過ごしている人がたくさんいます。僕は見たことがないんですが、土の中に埋まる修行をしている人や、体にクギを刺すという修行をしている人もいるそうです。それで、彼らは人々から厚い尊敬を集めているのです。

がんばる姿は美しい、と思います。修行者は自分を鍛えることについて、本当に真剣になっているように見えます。僕らがそんな修行をできるかって、できません。でも、日々の生活の中で、自分を鍛えてレベルアップしていきたいですよね。

天之水分神社のたたずまい。

ここは天川。しばらく前、「天川伝説殺人事件」とかいう映画があったことを思い出しますが、だから何だという程のことではありません。実はこの神社を訪れたのは二度目。この後、すぐに京都の我が部屋へと帰りました。一度目はこの社の中で寝ました。雨がひどかったしねぇ……。神様ありがとう。

さて、一度訪れた所をもう一度訪ねるということ、僕はあまりしたことがありません。同じ所へ行くくらいなら他の行ったことのない所へ行った方が得した気分になるからです。世界の果てまで行ってみたい、行ってないところはどこへでも行ってみたいと思っているからです。

でも、今まで行った場所がきらいになっている訳じゃないんです。本当はとっても行きたいんです。ということで、この天川へ二度目に現れた僕は、妙な感動を味わっていました。前に見たはずなのに違うように見える様々なモノたち……。確かに前も同じようにあったというのは覚えているんですが……。

時が経ったとき、変わっていくのは物ではないんです。一番変わっているのは自分……、自分の心、ともいえると思います。今、僕らが見えている物が、将来どのように見えるのか想像もできません。今、働いているこの場所が、遠い未来のいつの日か懐かしく暖かく思い出されるような生き方をしたいです。

チャリダー日記

紀伊半島編②

スタート・ゴール。

終わりは始まり、そして、始まりがあれば必ず終わりがやってきます。チャリダー生活にも始めがあり、終わりがあります。

紀伊半島一周を目指す始まりの場所、それは京都の下宿先でした。でかい門がそびえていて、何度見ても立派だと感じてしまいます。さすがは僕の下宿先です。……いやいや、どうせ、僕がいるのは敷地内にある蔵ですから、門がどれだけでかくても全然関係ありませんけど……。

僕は下宿先であるこの蔵の天井に地図をはりつけていました。そして、チャリダーとして移動した道を赤ペンで書き込んでいました。そしたら、だんだんに京都近辺が真っ赤になってしまったんです。当たり前のことなんだけど、スタート地点でありゴール地点でもあるからそこが中心的に書き込まれていくんです。いつのチャリダー移動だったのか、どの赤線が行きでどの赤線が帰りなのかさえも分からなくなってきていました。

僕にとって京都という所は特別な場所です。時間的に、自分自身が生きる時間の内で何パーセントを占めているのかは分かりません。でも、中味の濃さはものすごいもののように感じられます。地図が真っ赤になることに象徴されていますが、僕の心の拠り所になっていったんです。

紀伊半島一周のスタート、そして、ゴール地点です。

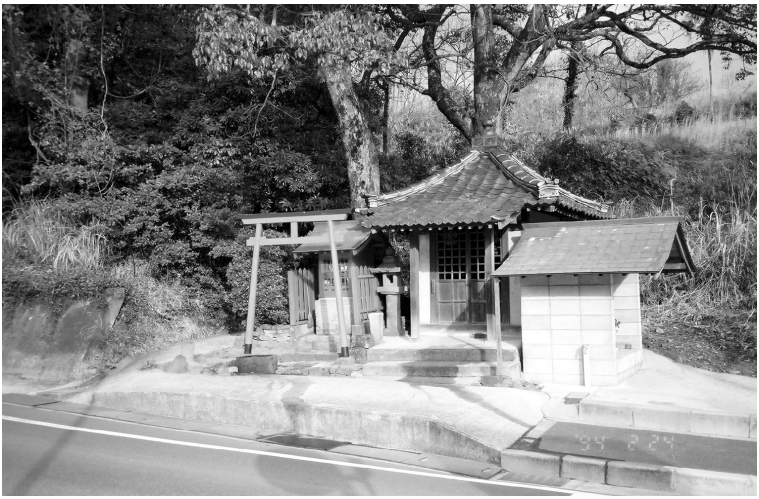
冬です。

チャリダーにとって非常につらい季節、それは冬です。タイヤは二個しかありませんから、もしも雪なんかが降っていたら、つるつる滑り、コロンと地球と仲良しになってしまいます。

紀伊半島を目指そうという僕、その僕の目の中に一週間ほど前に飛び込んできた光景は……冬景色でした。やたらと降りしきる雪、雪、雪……めげてしまいます。軟弱者なので、少しのことですぐシュルシュルとしぼんでしまうんです。そう、別に誰から強制されたわけでもない、自分の行動です。行きたくなければ行かなきゃいい、ただそれだけのことでした。むしろ、出発できなかった、という言い訳ができて好都合ともいえます。

これが、たとえば何か公共交通機関を予約していたなら、キャンセル料を払って取り消しにすることはないと思います。さすがにそこまで逃げ腰だったら旅に出ようと思うことさえないでしょうからね。実際、僕がヒコーキで飛び立とうとした前の日に雪が降り、ドキドキしたこともあります。僕は、嵐を呼ぶ男としてデビューすべきかもしれません……。

出発さえしてしまえば前へ進むしかないから、大丈夫、いくら軟弱者でも走ってしまいます。きっと南へ向かえば少しでも暖かい場所に着けるはずです。春を先取りです。寒い冬なんて、さようなら～……、自分を奮い立たせます……。



困ったときの神頼み。

チャリダー生活をしていると、夕暮れ時に心が落ち着かなくなっていきます。というのも、その夜をどこで過ごそうかと考えるからです。僕は橋の下が大好きなんですが、そうそう都合良く橋の下でばかりは寝られません。地図を見ながらあ〜でもない、こ〜でもない、と考えを巡らせます。それでも、結局いい場所が見つけられなかったりするんです。

ど〜の、こ〜のと悩んだ末に、小さな祠を見つけてその裏側にテントをぶら下げました。神サンの影に隠れるかのように夜の居場所を確定しました。旅人が困っていたらきっと神サンは助けてくれるはずです。そいつがどんなに汚いヤツだったとしても、チャリダーだったとしても差別はしないはずです。内面を見て「よかろう!」とか何とか許してくれるはずです。そのはず、そのはず……と、言い聞かせるようにつぶやきながら寝る準備です。

神サンは僕らの内面を見ていてくれますよねぇ……。外見の美しさ、醜さに目を奪われてしまう僕のような愚か者だと、どうしてもそのあたりに不安を感じてしまいます。普段から神サンを信じている人間ではないので、よけいに後ろめたい感じがするんです。神サンが見ていようが、いまいが、関係なく、物事の本質を見極められる眼を育てたいと思ってるんですけどね……。

ナタデココ in おしるこ……。

あのプニプニ感はいいです。さらっとした甘さもいいです。でも、たしてニで割ればそれがそのまま良しということには異を唱えたいと思います。

最初に食べたときには「おおっ、変な食いモン」という印象でした。まずは一口……プシッって感じで何かが押しつぶされたような食感、そしてそれが噛み切られるでもなくそのまま残るでもない得体の知れなさを感じたんです。恐るべしナタデココでした。

おしるこを冷やして食べたら……意外にオイシィ……はい、おいしいんです。ドロドロ感を抑えたおしるこがのどをさらっと通っていく冷たさは、爽快です。

坂道を上っていました。たぶん、時速五キロくらいの超低スピードで走っていたと思います。人間が歩く速さが平均時速四キロというので、さすがに歩くよりは速いチャリダーです。そのスピードだと、普段だったら見えない何かが見えることがあります。旅をするのに一つの大切な要素が移動速度だと思います。そもそも「移動こそが旅」という考え方さえあるくらいなので、そこでの発見は大きいわけです。ゆっくりだったらゆっくりなだけ、いろんなモノが目に飛び込んでくるんです。

この時は「ナタデココ in おしるこ」の空き缶でした。

修理中のお屋敷。

紀州の殿様もここで時間を過ごしたんでしょうか。養翠亭という所です。実は、その存在をまったく知りませんでした。ごめんなさい。知り合いの一人に宮大工がいて、その人がここの修理にも携わったと聞いたので立ち寄ってみました。

大工というのは僕にとっては「尊敬すべき仕事ランキング」上位に入るレベルのものです。その大工の中でも、よりすごさを感じる人々である宮大工……ちょっと憧れてしまいます。その人の話はとても興味深いものでした。

かなり笑えた話……、仕事仲間とお寺などへ観光旅行へ行ったりすると、職業病が出てしまうそうです。怪しい人々になってしまうんだ、とのことでした。柱の立ち方から梁の組み合わせ具合、床板の張りに至るまで気になってしまい、縁側の下までもぐり込んで見てしまうほどだといいます。そりゃ、怪しいです。

ためになった話……、塔の良し悪しの見分け方の講座を受けました。たとえば五重塔を見上げたときに、屋根の角の部分がまっすぐそろっている塔は良し、ウェーブしている塔は悪し、ということでした。おお、なるほど……、と納得です。

怪しい人と思われてもいいです。宮大工とあちこちの建物を見て回りたいと感じてしまいました。

この木なんの木？

松葉が落ちています。でも、幹はまっすぐに伸びています。変な木が立っていました。その名も「栴檀の松」……でした。

生き物とはすごいものです。自分の命をいかにして燃やし続けていくのかに全精力を注いでいることを感じます。もともと、栴檀の木が立っていたんだと思います。でも、どうしても松の木がそこに生えたかったんでしょうかね。「おじゃまします」ってな感じで生えてしまったわけです。この木は平和です。

ときどき、最初の木を征服してしまったかのように生えてしまう木もあります。そんな木を見たときには怖いと感じます。お互いの木がケンカをしてどっちかが勝って、どっちかが負けたとか、何か悲しい思いが残ります。お互いに足を引っ張り合うような関係だったりしたら最悪です。

違う種類の木が、同じ場所で同じようにすくすくと伸びている姿はほほえましくも思えるんです。人間でもそうだけど、それぞれちがう人たちが同じところで暮らしていたら、いろんな楽しさがあります。いろんな良さを見つけてお互いが高め合えるような関係でありたいものです。

それにしても「栴檀の松」って、ムチャクチャな木ですよね。「個性的な」とかいいますけど、それを通り越して「変な」と形容した方がよさそうな存在です。えっ、人のこといえない？

「今何時？」「そうね、大体ね……」午後七時前です。それではここへは入ることができません。……残念無念……。

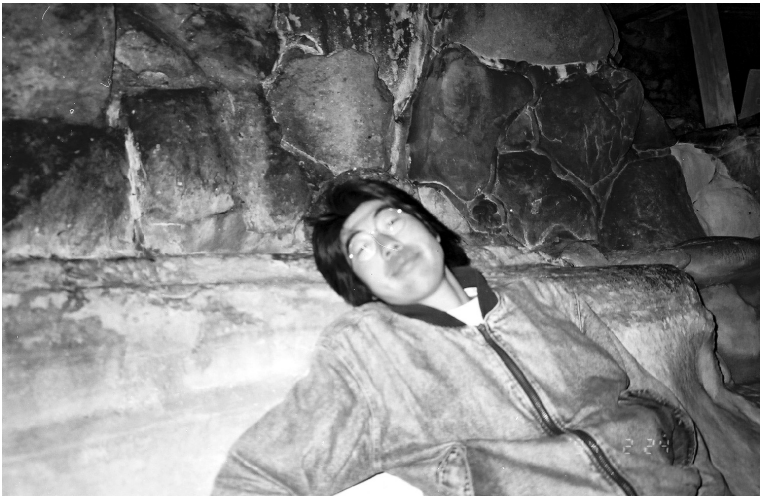
タダの温泉がある、ということは以前から知っていました。タダ→つまり無料→お金を払わなくてもよい……、さらに温泉につかって幸せになれる、こんないいことはありません。エッサホイサとチャリンコのペダルをこぎ、その温泉を探しました。

発見しました！ところがどっこい、そこに立ちはだかったのは冷たいお言葉の書かれた看板でした。この時期は午後五時までとのことです。一日の疲れを取ろうと思って一生懸命走ったのにぃ……。いくつも書いてあるから余計に腹が立つんです。ま、いくら看板に文句を言ってもどうにもなりません。

この看板……というか、たくさんの看板だけど、いろいろ書いてあるんです。時間についてのお知らせがいくつかあって、入るときの注意書きがあって、温泉の歴史が記されており、怪しげな家系図まで立っていました。結局、好きなんですよね、こういう情報。どうも言葉に操られているような気がします。

世の中には「活字中毒」という人もいるみたいですが、言葉というモノ、恐ろしいモノです。いつも言葉の上で踊らされているばかりじゃいけないんだとしみじみ思うわけです。

何はともあれ、時間厳守……です。



いい湯だな……。

湯のない温泉なんて、これほど情けないモノはありません。かなり期待していただけに、力の抜け方も大きなモンでした。

何といっても僕はチャリダーです。チャリダーは体力を使います。チャリダーは汗をかきます。結果的にチャリダーは汚くなります。ついでに自動車の排気ガスなんかも体いっぱいに浴びて、真っ黒かったりもします。チャリンコにはたくさん荷物をくっつけてあります。その中には石鹸なんかも準備してあります。タオルだってあります。でも、お金はたくさんありません。貧乏チャリダーの宿命です。

だからこそ、無料の温泉の価値は大きなものでした。疲れた体を癒し、汚れを落とし、金も使わないという一石三鳥のゴールデンプランだと言えます。それが、なぜ……。

あまりにくやしかったので、お湯はなかったけど、湯船に入ってきました。もし、お湯があったらものすごくいい気持ちだったんだろうなぁ、と想像力を総動員して、温泉気分に浸って帰ることにしたんです。さすがにお湯がないのに服を脱いだら変態なので服は着たままですが、気分は味わえるんじゃないかな、と……。どれだけの困難が目の前に立ちはだかっても、それを前向きに受け止めるのが大切なことです。

あまりに虚しすぎますか……。

海が見える家……。

三角テントは自立しません。ドーム型テントは自立します。世間の常識です……と、僕は思っていました。が、僕のテントは自立しませんでした。独り立ちできない甘えん坊さんだったんです。

ポールが一本しかないのが明らかに不自然です。先輩からもらったテントなので、文句は言えません。とにかく使うしかないんです。とにかく、そのポールを通すと形としてはドーム型テントっぽくなります。手で押さえてさえいればテントとして成立します。夜も手で押さえて眠れば問題解決です。……ん?ちょっと無理のような気がします。

ここならいける……という場所でしかテントが張れません。そして、ここならいける……という場所を探しました。海岸には松林があり、松には枝があり、僕にはひもという小道具がありました。屋根の上にひもを通し、松にくくりつければ完成です。

たったそれだけで、僕の宿が確保されます。でも、もし松がなかったら、僕は快適なテントで寝ることはできず、名実ともに野宿をするか倒れたテントで寝るか二つに一つの選択になるわけです。必要なのは装備か、環境か……、僕はテント生活をしながらも居住環境問題に直面するのでした。

What's this?

潮岬で記念写真を撮りました。そう、確かに撮るのは撮ったんです。「撮った」という事実はあるものの、証拠写真が残らないという怪奇現象が起きました。そこに写っているのは浮遊した何かの姿だけなんです。

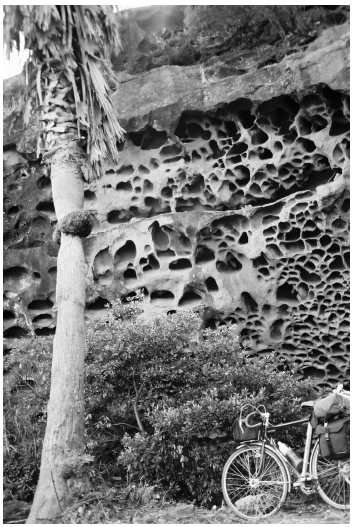
この謎を解く鍵は必ずあるはずです。

潮岬はそんなにすごい施設がたくさんある場所ではないということ……一つの鍵になるでしょう。ちょっとしたスペースがあり、向こうでは灯台が僕を出迎えてくれます。他に特筆すべきものがない場所です。

潮岬……「みさき」……その場所が岬であったこと……一つの鍵になるでしょう。海に突き出た地形であるため、大体の時において風が吹いているといえます。場合によっては突風だって吹くかもしれません。

僕がチャリダーで一人旅であったということ……一つの鍵になるでしょう。周りには誰もいない……、当然周囲で証言してくれる人もいないわけですが、事実を知っているはずの人が一人いるんです。それは……まぎれもなく、僕です。

つまり、こうです。一人だからセルフタイマーをセットし、条件の良くない場所にカメラを置く、そこに風が吹きカメラが落ちる、その瞬間にシャッターが切られる……謎は解けました。


蜂の巣みたいです。

穴があったら入りたい……でも、どの穴に入ったらいいんでしょうか。たくさんありすぎて悩んでしまいます。蜂の巣なんかもそうだけど、同じように見える穴をどうやって見分けているんだろうと思ってしまいます。きっと何か少しずつ違うんだと思うけど、どこがちがうんだろうって感じです。

さて、チャリンコは紀伊半島を進んでいきます。いや、僕がペダルをこいで進めていくんですが……、穴だらけの壁と出会います。もちろん、この穴の中に進んでいくわけじゃないから別にどうでもいいんだけど、気になるモンは気になります。実際、なんでこんな穴だらけになったのかさっぱり分かりません。人間の力が及ぶものではないとは思います。

人間が創り出すものには限界があるような気がします。「?」と思うような芸術作品も、やっぱりどこかで人間臭さを持っているように見えるんです。それが天然モノには底が見えません。奥が深すぎて想像の域を遥かに超えています。恐るべし、天然モノです。世の中には天然ボケという特殊な才能を持っている人もいて、周囲を嵐に巻き込みます。どれだけすごい人でもかないません。養殖モノはどれだけ頑張っても養殖モノです。

自然のすごさ、怖さ、おもしろさ……僕らの心を永遠に震わせてくれる存在だと思います。

カッコイイつもり。

朝、ちょっとだけ早起きをしてみました。といっても、別に無理をしたわけじゃなくて、勝手に目が覚めて起き出したというだけです。チャリダー生活をしていると、その時間帯が太陽と同じようなものになっていきます。軟弱者です。夜、暗くなっても走っていられるような強さがありません。だから、すぐにテントを張っておやすみモードへ入ります。テントの中は暗いから、何もすることがなく、眠るだけです。結果、翌朝は太陽と同じくらいに起き出すことになるんです。

この日はもう引き返さなければならないタイムリミットを迎えていました。この期間のチャリダー計画は「ここまで……太地で終結です。何としてもたどり着きたかった町まで到達できたから、まあ満足できる結果です。鯨の町、太地です。

少しでも太地の雰囲気を味わっていこうと思ったら、すてきな風景に出会うことができました。一日の様子を教えてくれるような美しい朝でした。僕にはタイムリミットというものがあります。「旅人」という種類の人間ではないんです。でも、だからこそ、ほんの一瞬をじっくりと見つめられるのかもしれません。限りない時間があったら、時間の流れを感じることもできずにいつの間にか自分だけが違う流れに生きてしまいそうです。朝という貴重な時間を太地で過ごせた幸せです。

帽子と菜の花。

出発する頃、雪が降っていたとは思えません。紀伊半島へは一足早く春がやって来ていました。風に揺れる菜の花を見ると、実際の気温よりも暖かく感じられるから不思議なものです。

始めはどこまで行き着けるかほとんど分からずに走って、とりあえず紀伊半島の半分くらいは走ったと思います。一番南の海岸線を通り、少しだけの南国、少しだけの暖かさを感じて帰っていきます。やさしい気持ちになって帰ることができます。春を感じるってことは、やさしさを感じるってことかもしれません。ちょっとうれしい帰り方です。

僕は別に芸術的な写真を撮るような、カメラマンではありません。きれいな写真を撮るなんて、僕には無理だと勝手に思っています。だからきれいな写真はプロに任せて、変な……じゃなくて……、僕にしか撮れないような写真を撮ろうと努力します。僕のセンスがバリバリに詰まった写真です。

でも、時々勘違いをして、自分がカメラマンにでもなったかのような写真を撮りたくなることもあるんです。この時は、帽子という小道具まで使ってしまいました。感覚的に菜の花と帽子が合うような気がしたからです。

風に揺れる帽子と菜の花……こんな、ちょっと感傷的で、ちょっとやさしい気持ちを残して紀伊半島をあとにしました。

チャリダー日記

北海道編

さぁ、ガンバッテいこ〜！

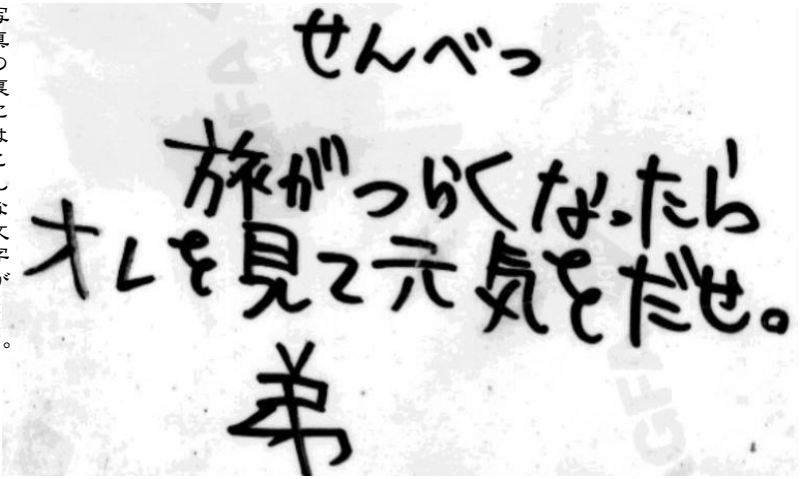
軟弱者……チャリダーとしての僕はこの一言に尽きます。どうしたってチャリンコに乗り続けていたらしんどいから、ナヨナヨしてしまうんです。それでも最初くらいは元気で余裕な顔で出発したいところです。

目指す先は北海道ですが、そのスタート地点は焼津の実家です。実家なので家族が住んでいます。玄関の前で、僕なりに精一杯のアピールをしました。

出発する時、特に強敵だと思えるのはばあちゃんです。うちのばあちゃんは必要以上に心配性なので、いかに心配させずに出発するかというのが大きなテーマになります。それこそ必要以上に元気なフリをして、妙にでかい声で「行ってきます」なんて言ってみたりするんです。

これは自分との闘いでもあるんだけど、軟弱チャリダーとしては出発するのにものすごいエネルギーが必要なんで、「えいや！」と頑張っちゃわないと動き出せないんです。それならやめればいいのに、というツッコミは無しです。軟弱チャリダーはつらいんです。

これから始まる尻の痛さとの葛藤に胸を沈ませながら、それでも、まだ見ぬ北海道を目指して出発です。ホント、何が起こるかヒジョ〜に楽しみで、ヒジョ〜に不安な旅立ちです。



写真の裏にはこんな文字が……。

ふと荷物の中を見てみました。すると何やら文字の書かれた写真が出てきたのです。そこには弟の文字が書かれていました。お、弟め！なかなかやるじゃないか、と少し感動したものです。

でも、「せんべつ」と書かれていると、どうも大げさなお別れみたいな感じがしてしまいます。そんなモンじゃないはずなんですが、まぁ、いいです。ヤツの思いを汲み取っておきます。身内をほめるのはちょっとくやしいし、変なんだけど、僕の弟のいいところってのは、ちょっとした心配りができることです。僕に一番欠けている部分を持っているヤツです。

僕は自分勝手な人間で、常に自分を中心に地球が回っているかのような過ごし方をしています。逆にいうと、一人でいてもほとんど寂しさを感じることなく、のほほんと生きていられる平和なヤツなのかもしれません。

チャリダーとして生活していると、何といっても汚れます。臭くもなります。もちろん、きれいに「サイクリング」をすることもできるんでしょうけど、僕には無理です。走っているペースも、速くなったり遅くなったりエエ加減なモンです。だから、他の人に一緒に走ってくれるように頼むことがなかなかできません。自然に心配りができる、そんなチャリダーになれたら、と思います。

我が弟ながら情けない……。

弟はやはり、アホでした。自分の写真にマジックでぐちゃぐちゃ落書きがしてありました。とんでもない代物です。ただでさえアホな顔が余計にアホになっているんだから、救いようがありません。

時々、親からもらった自分の体に細工をする人がいます。耳に穴を開ける人もいます。唇に穴があったり、ヘソに穴があったり……全身穴だらけになっていることもあります。美容整形などで、もともとはどんな顔だったのか分からなくなっている人だっています。訳ワカメです。

僕がふと気づいたときには、自分の顔はすでに長いモノでした。決してカッコイイ顔とは思えません。自分の顔がもっとカッコよかったら僕の人生もずいぶん変わっていたかもしれません。あんまり想像できませんけど……。

カッコ悪い自分の顔ですが、「自分は自分！この顔で生きていくんだ」と思っています。堂々と、そのままの自分を貫いて生きていきたいし、表面じゃなく内面を磨いていきたいと思っているからです。外側よりも先に鍛えていかなきゃいけない部分ってのがあるんじゃないかと思っています。

しかし……、たとえ写真でも、ここまでする奴も珍しいと思います。アホな弟をお許しください。

鉛筆が入るくらいに破裂です……。

焼津を出発してから二時間くらいたったでしょうか、雨の中を僕は走っていました。すると、突然パ～ンと音がするのです。「何じゃ？何じゃ？発砲事件か？」と思っているうちに、後ろのタイヤがベコベコベコ……原因は自分でした。

ふぇにっくす号のタイヤを見て、僕はびっくり……、破裂していたんです。ただのパンクなら何度も経験していますが、中のチューブと一緒に外側のタイヤまで裂けてしまうバースト状態なんて初めての体験でした。

こんな状態では走るに走れません。どうしようかと考えました。走り出して約二時間しか経っていないんだから、焼津へ戻るのが一番楽な方法です。でも、ここで引き返したら、そのままずるずる再出発を延期して、尻つぼみに北海道編が終わってしまいそうな気がしました。軟弱チャリダーとしては、やっとの思いでスタートした後、止まってしまったら、もう一度走り出すのには最初の何十倍もエネルギーが必要になると思ったんです。

というわけで、負傷したふぇにっくす号を引きずりながら近くの駅まで歩き、列車に乗ることにしました。横浜に行けば友達が待っている……はず……です。数々の困難を乗り越えて前へ進むしかありません。遥かなり北海道……。

ちょっと緊張……。

出物腫れ物所嫌わず、という言葉があるようです。出てくるものはいつでもどこでも出てきたがります。そして、出てくるものとは必ず対決しなければいけないんです。宿命なんです。

朝、食後の時間帯くらいで、毎日、対決の時がやってきます。それはチャリダーであろうと何であろうと同じです。ところがチャリダーであると不利なことがあります。それは決戦の場所を選べないことです。たとえばそれは駅であったり、コンビニであったり、場合によっては河原の草むらであったりもします。とにかく、逃げることは許されないんです。

さて、北海道へ行くまでの途中、一番お世話になったのがパチンコ屋さんでした。なんとなく入店して、「どこに座ろうかなぁ」なんて顔をしながら、さりげなく奥の方へと歩を進めるんです。汚い格好をしたチャリダーの姿だから、多分、店員さんはすべてお見通しだと思います。でも、一応、それっぽい雰囲気を出そうと努力はします。

決戦の場所にたどり着き、スタンバイオーケーとなったとき、目の前に張り紙があることに気づきました……。緊張しながら、慎重に照準を合わせ、戦闘開始……、勝負は一瞬のうちに決まりました。当然、僕の勝利です。

「さらばだ！僕の排泄物よ！」

感謝！

一日の終了は、ふとんに入って「おやすみなさい」というのが一般的なパターンだと思います。ところが、チャリダーがその状態にまでいきつき、安心して眠れるまでには多大なる苦労が隠れています。テントを持っているからどこであろうと寝ることはできますが、できれば環境のいいところで寝たいんです。

さてこの日も「今日はよく走った。どこで寝ようか……」と考えていました。地図を見て、だいたいの見当はつけて走りますが、ここぞという場所が見つかりません。どんどん心細くなり、寝場所の不安定さに悲しさを覚えたりしていました。

そんな時に盛岡農業高校が現れました。そこにいた先生に声をかけると、軒先にテントを張っても良いとのこと、ラッキー！話はしてみるモンです。

人は体外情報型の動物です。外側からの情報に頼る部分がかなりたくさんあります。ということは逆に、何かを思った時には、他者へ働きかけをしないと何も前に進まないことがあるってことです。この日、いくら僕が頑張って門の前でテレパシーを飛ばしていても、受信してくれる人は二宮金次郎くらいのモンです。そこにいた先生に、言葉を使いコミュニケーションをしたことで、僕は寝場所を確保することができたんです。

さらに翌朝、おにぎりまでいただきました。幸せ……。

田んぼは続くよどこまでも……。

ご飯とパン、どっちが好きかと聞かれたら、間違いなくご飯だと答えます。はい、ご飯が大好きなんです。アツアツの白ご飯と漬け物がセットになっていたら、いくらでもおかわりできてしまいます。あの湯気の、おいしそうなこと……。

米を食べられる幸せ、ありがたいことです。しかも、ふっくらもっちりとしたジャポニカ米のおいしさは何モノにも替えられません。しばらく前にタイ米が大量に輸入されたことがありました。決してタイ米をバカにするわけじゃありません。ピラフとかカレーとか、そういうメニューのときには最大限に強さを発揮する米種だと思います。でも……、でも、なんです。鼻に漂う柔らかな香り、歯が感じ取る米質の弾力、口いっぱいに広がる米の甘み……、あぁ〜、アイ・ラブ・ジャパニーズ・ライスです。僕の幸せをありがとう！

おいしいお米を食べられるのも、お百姓さんのおかげです。僕はお百姓さんを、かなり尊敬しています。毎日毎日、ものすごい肉体労働をして、僕らの食べ物を生み出してくれていることには、感謝以外ありません。お百姓さんは強いと思います。谷筋にずっと向こうにまでつながる田んぼを見たとき、僕のこの思いはとても強まりました。

日本のお百姓さん、万歳！

北海道で目にしたモノ。

「何なんじゃぁ〜?」と思うモノに出会いました。北海道に上陸しても、やっぱりそんなモノたちがいるのかと思うと、ワクワクしてしまいます。

フェリーに乗って津軽海峡を渡り函館に到着しても、何かが特別ドカンと変化するわけでもなく、フラフラ北海道を走っていました。そこで出会ったのが「作業中」の看板を掲げる、草刈り号だったんです。ムムム……久しぶりの獲物でした。

車体の上の方についている表示はクルクル回転するものだったので、じっとカメラを構えてシャッターチャンスを狙います。文字が「作業中」という部分に来て、カシャッ……、完璧に捕らえました。いや、捕らえたつもりでした。実際は、ほんの一瞬遅れていたみたいで、いつもの間抜けさが充分に発揮されたようです。うまくいかないモンです。

自分では「こう」と思ったことが、「ああ」だったり「そう」だったりすることがあります。モノの見方は人によって違うことが多々あるってことです。僕は、残念ながら視野が狭く、何かをしていても、そのうちに頭がパニックに陥ったりします。自分が思った通りにいかないこと、くやしいモンです。悲しいモンです。寂しいモンです。人間ってそんなモンです、きっと。

草刈り号は北海道にしかないのか……、定かじゃありません。

カニ飯を食べたい……。

オシャマンベ……漢字で書いたら、長万部です。北海道ならではの地名だと思います。ずぅ～っと昔から、ずぅ～っと住んでいた人たちの呼び方を、無理矢理に漢字に当てはめたら、いろんな地名がいろんな漢字でリニューアルされてしまったようです。地図を見ても、みんな漢字です。読めない地名がたくさんありすぎて、もう、お手上げです。

さてさて、長万部の名物はカニ飯だ……と、風の便りに聞きました。貧乏人だって、たまには贅沢な食事をしたくなることがあるんです。おなかも空いてきたことだし、え～い、食堂へ入場です。あらら、僕専用の食堂みたいな雰囲気が漂っています。

奥の方で、おばちゃんがカニ飯の準備をしてくれています。

奥の方から、おばちゃんがカニ飯を運んでくれます。

奥の方からの心の高ぶりがあまりありません。

食べているのは僕一人……、感動がスルスルと逃げていくようでした。こんな時、一人旅の寂しさを感じます。どんなに高級な料理だったとしても、心に隙間風が吹いていたら、味も一緒に流れ出てしまいそうです。どんなに安い食事でも、大勢でワイワイ言いながら食べたら、きっと最高のごちそうです。長万部、いつか最上級だと思えるカニ飯に会える日が楽しみです。

お馬さんパカパカ。

広い場所に出たら気分も開放的になって、思わずパカパカ走りたくなることもあります。顔が長くても、長くなくても、そんなことは関係ありません。走ることもあるんです。

「広い」……北海道を表現するのに、この言葉以外には考えられません。とんでもない広さです。特にチャリダーにとって、この広さは想像を絶するものでした。走っても走っても景色が変わらないんだから、キョ～レツです。そう思うと、自分の足でひたすら走っていくお馬さんって、えらいのかもしれません。ちょっと尊敬してしまいます。

北海道の馬といえば、道産子です。我慢強く、寒さの中でも余裕で生きていく、彼らはすごいと思います。そんなお馬さんたちが牧場をのんびり歩いていました。何に気兼ねすることもなく、辺りを歩き回っていたし、気が向いたのか、小走りをしているお馬さんもいました。

広い場所で生きていたら、僕も広い心を持つことができるかな……なんて思います。日頃、狭苦しい環境で過ごしているから、心の中まで狭くなってしまいそうです。たまには広い所で自分自身を見つめて、心の洗濯をしていきたいように感じました。こんな気持ちを持たせてくれて、北海道……ありがとう！お馬さん……ありがとう！

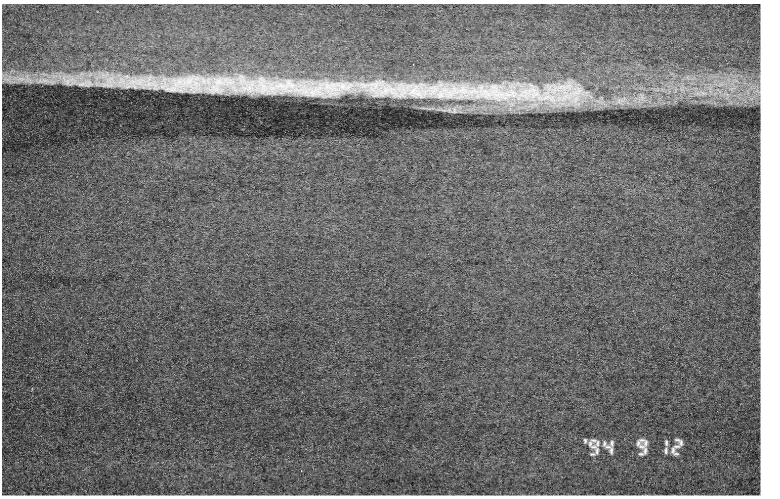
あんた、よう日焼けしてんなぁ……。

北海道へは函館に上陸し、反時計回りに海岸線を走っていきました。北海道へ入るまで一週間かかり、「遠い〜！」と思っていましたが、北海道に入ると、走っても走っても同じ景色ばかり……「でかい〜！」でした。

で、毎日毎日チャリンコで走るだけなので、とにかく日焼けをします。車の排気ガスも浴びるので余計に真っ黒になります。そして、体力を使いまくるのでガリガリにやせていきます。さらに、やたらと汗もかくので臭くもなっていきます。そうすると、なんともみすぼらしい姿になってしまい、周りの人がだんだんに近寄ってくれなくなってくるんです。それが一般的なチャリダーの宿命かもしれません。

ところがここは夏の北海道、チャリダーやライダーの聖地です。そんな人たちがたくさんいました。それだからかもしれないけど、みんな慣れている雰囲気があってフレンドリーに接してくれました。快くシャッターを押してくれました。

襟裳岬にはゴマフアザラシがたくさん生息しているらしく、僕はその姿を探しました。けど、やたらめったら風が強いばっかりで何だかよく分からなかったので、めげました。自然とは厳しいモノ……軟弱者の僕には簡単にその良さを味わわせてはくれません。あぁ、遥かなり北海道……。



川が真っ黒。

ワシャワシャワシャァ〜ァ〜、と川がうごめいていました。だんだんに暗くなろうとしている時間です。ピョォ〜ン、と跳ね上がることもあります。目を凝らしました。

そこにはとんでもない数の鮭が泳いでいたんです。川の中を二重三重になり、体をこすり寄せながら川上を目指して泳いでいました。誰かが教えたわけじゃありません。ナビゲーションシステムがあるわけでもありません。それでも彼らは自分の故郷の川を見つけ、さかのぼっていきます。

熊は、川へ入ります。鮭のつかみ取りです。バシャバシャ泳ぐ鮭を人間が捕まえたら……、密漁になるそうです。でも、熊だったら認められるはずです。言葉も法律も知らないはずですからね。もう、より取りみどりです。こっちがいいかな、こっちの方がうまそうかな……なんて選び抜いているんでしょう。

人間は、釣り針を投げます。まだ、川に入っていない海で泳いでる鮭なら密漁にならないそうです。へぇ……、なんででしょう。僕が考えるに……、卵を産みに川の中に入った鮭を守ることがものすごく大切なことだからじゃないでしょうか。逆にいえば海の鮭は、もしかしたらそのまま海で泳いでいるかもしれませんからねぇ……。

何にしても、暗くて上手に写真が撮れなかったのが残念です。

大変お世話になりました。

「明けましておめでとうございます」というあいさつ文句があります。それを文字にして、毎年郵送したくなる人がいます。

そんな人との出会いがありました。

グァシャグァシャと、鮭が踊る川の上、僕は橋から身を乗り出すように、その様子を見ていました。……と、「兄ちゃん、どこから来たの？」ってな具合で話しかけられたんです。

「あ、ハイ、静岡県からです」

「へぇ、すごいねぇ、今日はどこまで行くの？」

「あ、ハイ、この辺で野宿しようと思ってます」

「ふ～ん、……ウチに泊まっていくか？」

「……えっ？……いいんですか？」

その日の晩、僕は腹いっぱいカレーライスとイクラを食べていました。久しぶりに風呂へ入り、ふかふかのふとんに包まれました。次の日の朝、幸せいっぱいでペダルを踏み始めました。

今でも、あの時のうれしさは忘れられません。見ず知らずの、汚れのかたまりみたいなチャリダーを家に招き入れてくれた、その心を忘れられるわけがありません。そんな心に少しでも自分の心を近づけたくて、年賀状を毎年書き続けています。遠く離れた北海道、僕にできることは何か……できることをします。

「明けましておめでとうございます。」

北の島々は霧の向こう……。

雨は大キライです。でも、雨は僕のことを好きだったみたいです。北海道にいる間、かなりの時間を雨と一緒にすごしていました。

僕が行ける範囲では日本最東端である場所へたどり着いたときも雨でした。納沙布岬です。雨が降ろうが槍が降ろうが、東は東、証拠写真を撮らなければいけません。愛車ふぇにっくすとともに到達したことの意味は大きいのです。さて……、キョロキョロ周りを見回します。「シャッターお願いします」と笑顔でコミュニケーション成功でした。

雨が降っていると、セルフタイマーで写真を撮るなんてことは限りなく不可能に近くなります。一人旅の苦悩です。しかも、雨だったら周りに人がいないことだってたくさんあります。けれども、そこはさすがに最東端の地、誰かがいるモンです。人のありがたさを強く感じました。

自分勝手でわがままな僕は、チャリダー変身後も単独行動です。周りに合わせることが苦手なんですよね。特にチャリンコだと、体力が違い、速度が違う人と一緒に走るのが、ものすごく苦痛です。余計に疲れるし、イライラします。だから、大体一人で走っているんですが、やっぱり、人は温かいものです。もっと心を温めたいです。

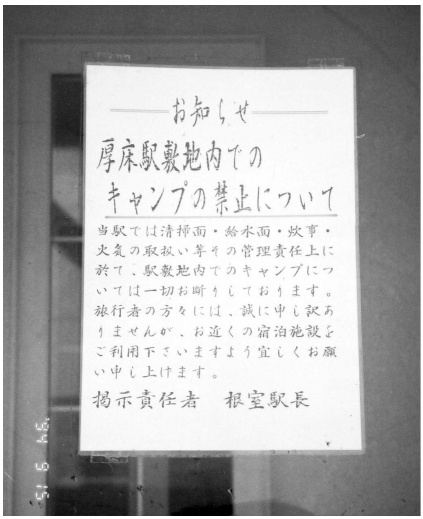
「駅寝」という言葉が、世の中にはあるようです。そのまんまですが、駅で寝るということです。日本国内を旅する人たちの中では、わりとよく使う言葉みたいです。僕は、全く知りません。いや、ちょっとは知っている……ぐらいにしておきましょう。

駅で寝ることの長所は雨が降ろうが槍が降ろうが、大丈夫ということです。

逆に、駅で寝ることの短所は……、乗客が来る前の朝早くに起きなければいけない、乗客が来ている間は寝てはいけない、火を起こしてはいけない、また、開けっぴろげなのでやたらと風がビュ〜ビュ〜吹く、怪しい人と勘違いされる……、いろいろあります。

それでも、他に心当たりはなかったし、雨は降っているし、僕は駅を目指してチャリンコを走らせました。やっとたどり着いたら、「駅寝」はダメみたいでした。はぁ……、ホントにショックでした。たぶん、それまでにマナーの悪い旅人がたくさんいたんだと思います。それは旅人の責任です。自分たちの仲間がしてしまったことは自分たちの行動でつぐなわなければいけません。

僕は、すごすごとその場を立ち去りました……。



マナーを守りましょうね！

立派です！

快適に眠ることができたのはこの場所のおかげです。

北海道は日本中で一番寒いところですよね。ということは、外でボ～っと立っていたりしたら、ものすごく大変なことになりますよね。だからです。……たぶん……。バス停がものすごくしっかりと作られていました。僕の家から一番近いバス停の様子と比べると雲泥の差です。

場所によっては蛍光灯までついているようなバス停もありました。橋の下でテントを張ることの多い僕にとって、夜が明るいことは文明のすごさを感じさせる衝撃的な事実でした。しかも、つきっぱなしじゃなくて、スイッチがあって自分の意思で消すことまでできたりして、もう、信じらんなぁ～い……って感じです。寝袋さえ出せば「おやすみなさい」です。

扉が取れていて窓ガラスまで割れているバス停だったりすると、ヒュルヒュルと風が入ってきます。寝袋だけで寝るのはちょっとつらいモノがあります。ということで、たいそう失礼なこととは思いながら、バス停の中にテントを張らせていただきました。割れガラスが床に散らばっていて、ちょっと怖かったんですけど、パパパッときれいにしてみました。

立つ鳥跡を濁さず……、自分としては最初よりもきれいにして帰ったつもりです。

日本最北端！

もし、自分だったらどうするでしょう？「今からあそこで逆立ちをするので、シャッターを押してください」と、見ず知らずの人にお願いをするという無謀さです。そこにいた人もとんだ災難だったことでしょう。でも、やさしい人だったのか、快く僕の頼みをきいてくれました。一度、撮影に失敗していただき、二回も逆立ちをしてきましたけど……。

気温は十三、三度、とんでもなく寒い場所でした。ビュ～ビュ～風が吹きすさぶ中、ギシギシとチャリンコをきしませ、宗谷岬へとたどり着いたんです。チャリンコでひたすら走り、僕が行くことができる一番の先っぽである最果ての地です。そんな所まで来て、何もせずに帰れるわけがありません。当然、記念写真を撮って帰ります。いや、記念というよりは証拠写真に近いかもしれません。自分にしか撮れない、自分だけの写真を撮って帰るというのは義務にも感じられました。もちろん誰に強制されたんでもないんですけど……。

このへんが、僕の人間性の小さいところです。周りには「記録より記憶」とカッコイイことを言いながら、自分自身がやっていることは完全に記録を重視しているなんて、悲しい限りです。でも、写真という記録を見たとき、そこから記憶が鮮明に蘇るのも事実です。やっぱり「記録より記憶」です。

証拠写真。

タンクトップに短パン……あんなに寒いとは思わずに、僕は思いっきり夏の姿でチャリンコを走らせていました。北へ向かえば向かうほど寒さが肌を刺します。宗谷岬の寒いこと寒いこと……。「宗谷岬」の歌がひたすら繰り返して流れていました。某テレビ局の「みんなのうた」で流れていたのを小さいころ聞いたような気がします。その音源であるスピーカーの方を見ると、はい、出ました、お土産屋さんです。「氷」の字が少しはがれて、目の悪い僕には何となく「牙」のようにも思えます。気にするほどのことじゃありません。

気温表示の数字も怪しげでした。たぶん、「1」という数字と「3」という数字と「.」という小数点と「3」という数字だと思われます。一の位の「3」が一番怪しかったわけで、もしかしたら「8」かもしれないし、「0」かもしれないけど、線を一本足したら「3」になるので、その可能性が高いのではないかと判断しました。

僕の皮膚感覚では気温が何度なのか、そんなこと分かりません。ただ寒いんです。そこに数字の裏付けがあったら、心強いわけです。自分の感覚を言葉にすることの難しさ……、数字の持つ力の偉大さを感じます。

ロール草。

〇〇と煙は高い所が好き、といいます。僕は何となく、ぐるぐる巻きになって固められた草の上に乗ってみました。そして、大発見……温かかったんです。

宗谷岬で寒さにやられた僕は、ガタガタ震えながらチャリンコをこいでいました。目指していたのは名寄という場所です。海岸線を離れ、内陸部へと突入です。途中、腹が減ったという思いで食料を調達し、どこで食べようかと考えていたときに目に飛び込んできたのがぐるぐる巻きのロール草だったんです。

牛がそのまま食べに来ることはないよなぁ……、なんてアホなことを思うんですが、この草はどうやってぐるぐる巻きにされて、どうやって活用されていくんだろうと考えてみます。北海道のあっちこっちに転がっているこのロール草、きっと便利に使うために丸められているんでしょう。僕は牛じゃないからその便利さを味わうことができません。でも、温かさを感じることで、ロール草の恩恵にあずかりました。

もともと北海道ってのは、自然環境の厳しい所だと思います。そこに人間が住み着いてから、いかに快適に過ごすかという工夫がなされてきたわけです。きっと草の利用法も昔から工夫に工夫を重ねて今の形になっているはずです。じゃ、将来の草の利用法はインスタント草とかになってたりして……？

バカ丸出し。

ホントに北海道の地名というのはアイヌの言葉だと感じさせられます。「なよろ」なんて、普通に読めません。名寄です。

全国展開している、僕の細い細いネットワークを駆使して宿泊費ゼロ計画を目指していました。なんでそこに住むことになったのか詳しいことは知りません。そこには元京都人が住んでいたんです。「チャリンコで行くからね〜」と連絡をしていました。そしたら、いろいろ準備をして待っていてくれて、妙にうれしい再会でした。

が、現実とは厳しいモノ……その人から出てきた言葉は「臭い！」というものでした。自分ではまったく分からないけど、僕はものすごく臭かったみたいです。とりあえず風呂へと強制収容です。久しぶりに体を洗いました。ひとまわり体が小さくなったかもしれません。ごしごし磨きました。まだにおいが残ってるようなことも言っていましたが、勘弁してもらいました。

お酒登場です。僕はお酒、飲めないんですけど……ありがたく少しだけいただきました。刺身もいただきました。ウニもいただきました。北海道まで世話になりに来た人間に対して、こんなに心を配ってくれて、とてもとても最大限の感謝です。

久しぶりに屋根の下に入り、体も心も芯から温まる思いでした。

あっち向いてホイ！

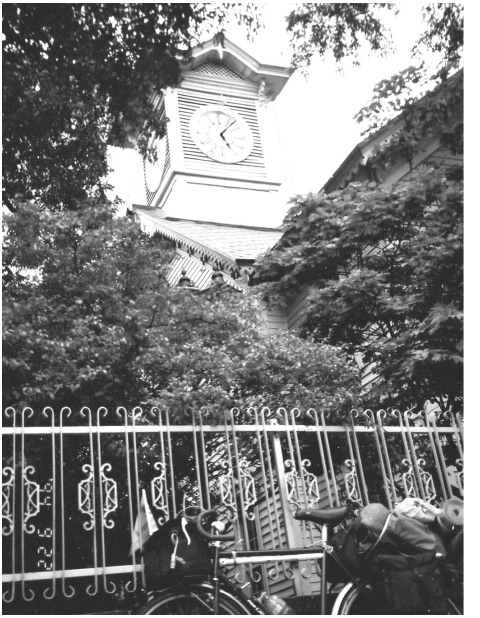
旭川です。北海道もかなり内陸部にやってきました。

「風呂をおごってやる」というのが、その人の言葉でした。今までいろんな物をおごってもらったことがありますが、風呂は初めてです。一体どんな風呂なんだろうと期待と不安が混じり合います。元焼津人、北海道在住のネットワーク先です。

やっぱり「チャリンコで行くからね～」と伝えておいたんだけど、「わぁ、ホントに自転車で来ちゃったんだねぇ！」と必要以上に驚いてくれました。走ってきた人間としてはそんなに無理をしてきたわけじゃないので、実感が湧きません。ただ、雨に降られたりしていて、メチャクチャ寒くてみすぼらしい姿だったということはあるかもしれません。

何はともあれ風呂へと向かいます。一応、温泉でした。でも、かなり怪しげな雰囲気が漂っています。「怪しいだろ！」と元焼津人は満足顔でした。僕の中には疑いの心が芽生えてきます。確かに温泉らしいけど、「〇〇風温泉」というような、入浴剤チックな印象が拭い去れないんです。火山の溶岩みたいな演出の照明も僕の温泉的イメージを覆す代物でした。ま、心は多少冷えたかもしれないけど、体は温まって出ることができました。

旭川の記念に元焼津人の部屋で写真撮影です。気の緩みか、赤目防止フラッシュに騙されて、変な姿になってしまいました。



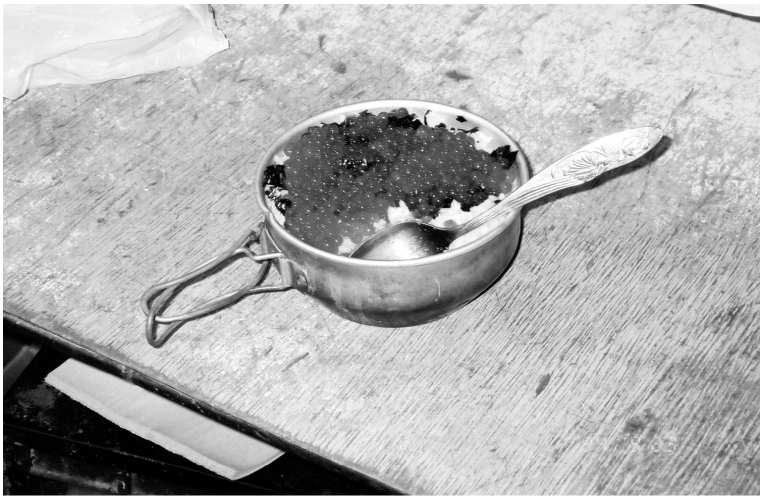
寝っ転がって撮った力作。

腹減った……チャリダーの口癖です。バイクのように燃料はいらない乗り物です。自分の体さえあったら動いてくれるすばらしい乗り物なんです。条件としては自分自身が元気であること……。チャリンコに乗っていて思ったことの一つは、僕という人間には他よりもたくさんの燃料が必要なのではないか、ということです。すぐに腹が減る……燃費が悪いんです。

札幌といえば時計台……。確かにそうだけど、この時の僕にとって、札幌といえばラーメン横丁でした。ラーメンを求めて、あの店この店、フラフラ巡っていきます。北海道も、すでに何となく一周してきているので、体にはかなり疲れがたまってきていました。重たいチャリンコを前へ進めるにも、妙にしんどいんです。ちょっとした坂道でも「よいしょよいしょ」って感じで前進です。ママチャリで走る、普通のヒトよりも軟弱なチャリダーだったかもしれません。

ラーメン屋に入って注文です。札幌といえば味噌ラーメンです。それしか頼んじゃいけないんです、僕の中では……。ということで味噌ラーメンをすすります。「う〜ま〜い〜ぞ〜！」と叫びたくなります。もう、この上ない幸せでした。とにかく食べる、食べる、食べる……僕は幸せなんです。

この日、僕は五回食事をとったことを覚えています。



百グラム八百円の贅沢。

空き地でご飯を炊きました。それを持って朝市へ向かいます。そこは北海道、さすがに新鮮な海の幸であふれていました。僕は決めていたんです。「イクラを食う！」と……。

このチャリダー旅行の途中、広尾川という所で僕は鮭の遡上を見ていました。故郷の川を離れ、大海原を何年もかけて泳ぎ回り、戻ってきた鮭たちです。きっと僕の何倍もの経験を積んできているはずです。そんな鮭たちの分身をいただくことができたら、僕だって、その経験を何分の一かは分けてもらえるような気がしました。

海の中では強いものが生き残り、弱いものは消え行く運命にあります。そんな中で、群れを作って暮らすイルカやクジラたちは弱い子どもを命がけで守るといいます。北海道に戻ってきた鮭たちも、きっとそんなドラマを目にして泳ぎ、海の中の声を聞いているはずです。海底から響き渡る長い歌声、ピュウピュウというイルカの会話、やさしい海の命の触れ合いなど……。

海の中の様子を僕らは正確にとらえることができません。僕らは彼らとはちがい、生活場所として陸上を選んだからです。でも、海という神秘の世界は、僕のいただいた小さなイクラたちにも宿っていると思います。僕の中に生きると思います。

ちなみに、店のおばちゃんは海苔をサービスしてくれました。

ディレイラーぶら〜ん。

静岡から北海道まで約一週間、北海道の中を約二週間……、よく走ったモンです。僕も大変だったけど、チャリンコも同じように大変だったんですよね。雨の日も多かったし、金属の体にはきついモノがあったのかもしれません。

どうも、調子が悪いなぁ……と思っていたんです。ギアチェンジがうまくいかず、カシャカシャした感じでした。無理矢理ギアをチェンジさせるとチェーンが切れてしまうので、やさしくやさしく扱って走り続けました。自分自身が疲れまくっていたから、問題はすべて自分にあると思いこんでいたんだと思います。

僕は物事を考えるときに、自分の内側へと発想を向けるタイプみたいです。陰気といえば陰気なんだけど、自分で何とかしてやる……ってな自分中心的な考え方ともいえます。

世の中には正反対の人もいます。何でもかんでも外側へと発想を向けて、場合によっては自分に問題があっても他のせいにするようなこともあるみたいです。

内側、外側、どちらか片方じゃダメなんですよね。両方とも大切なんです。自分の眼をもっともっと鍛えなければいけません。体を鍛えるよりも、さらに大変な課題です。

もっと早く気づけばよかったな、ゴメン、ふぇにっくす号。

タイヤ つる〜ん。

F1グランプリで走っているような車はタイヤに溝がなくてつるつるしています。ピタッと地面に吸い付くようにサーキットを走り抜けます。

北海道を走っているようなチャリンコはタイヤに溝がなくてつるつるしています。ツルッと地面を横滑りして町中で転び去ります。……そんなわけないだろ！……とツッコミが入ります。

僕と一緒に旅をしたチャリンコは、まぁ、言ってみれば僕に走らされて北海道まで来てしまったようなモンです。そういう意味では僕のわがままの被害者といえるのかもしれません。実際に地面を蹴り、身をすり減らしていたのはチャリンコであり、その足であるタイヤです。過酷な旅だったことでしょう。

僕が一歩で歩く距離は何十センチという世界です。でも、僕がペダルを一周ぐるりと回すと、チャリンコは何メートルという単位で前に進みます。僕は大変だ、しんどいといいながら、実は楽をさせてもらっていたんです。僕が歩くことの何倍も走ってくれていた相棒がいたからこそ、北海道を旅することができたんです。

結局、僕らは一心同体……、僕がいなければタイヤは回らない……、タイヤがなければ僕は進めない……、お互い様です。僕らはいいコンビなんです。

また来るぜ、北海道！

北海道はここまでです。フェリーに乗ったら僕の意思とは無関係に体はどんどん北海道から離れていきます。自分の足の筋肉痛や尻痛と戦いながら進んできた北海道を、あっという間に離れていくのは寂しいものです。巨大な船に連れ去られる気分です。ドナドナド～ナ……。

チャリダーにとって北海道という土地は特別なモノです。そこを走らずして語れないモノがあるような気がするんです。これはライダーでも同じようなことがいえると思うけど、二輪車に乗る者にとって北海道は聖地なんです。

どこまでも続く広い大地、まっすぐに伸びる長い道……、そんな北海道をチャリンコと一緒に走ってきたという気持ちは、なかなか言葉にできないものです。頭じゃなくて、体で感じたものだから、体で味わうことを抜きにして表現するのはものすごく難しいことだと思います。

僕は自分をしっかり表現できる言葉が欲しいと感じます。自分の言葉がどうしても本当の自分を表しきれていないと感じるからです。もちろん、北海道みたいなデカイ相手じゃ仕方ないこともあるんだけど、それでも、僕はもどかしく思います。

ただ、一つだけ確かにいえること……、愛車・ふぇにっくす号への言葉、「ありがとう」……。

チャリダー日記

春野編

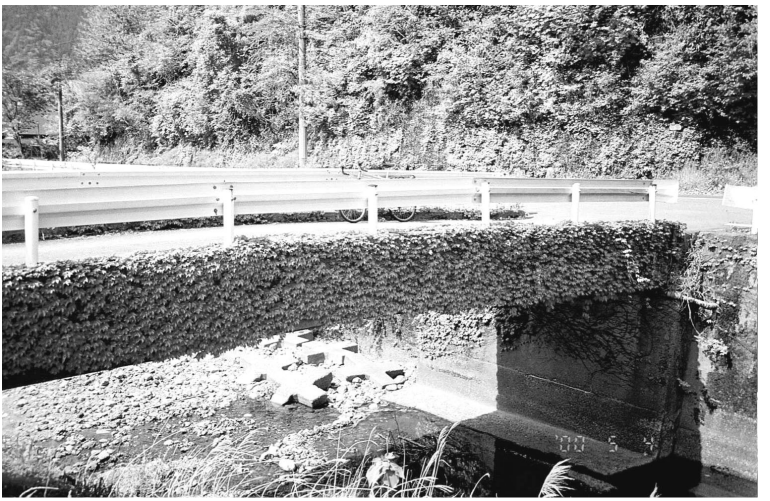
大和海嶺
大和海盆
佐渡海盆
秋田
新潟
石川
富山
福井
岐阜
滋賀
兵庫
京都
大阪
奈良
香川
徳島
和歌山
愛知
静岡
神奈川
栃木
群馬
長野
山梨
第二天竜海丘

チャリダー変身！

短パンに長袖、その上にはベストを着用、韓国で購入した度入りのサングラスをかけ、完全に変身です。愛車「山風号」にはサイドバッグを取り付け、ペットボトルも装着しました。もちろん、携帯用の空気入れだって忘れてはいけません。装備は完璧です。

目指すのは春野町、浜松市からずっと走っていった山奥です。それなりの覚悟をして行かなければなりません。「帰りは下り坂だ」と自分に言い聞かせながら、ひたすら坂を登っていく道のりです。そう、帰りには楽勝の下り坂が待っているんです。最初から軟弱者の姿がありありと見えてきますねぇ……。情けないことに、僕は登り坂がきついとすぐにチャリンコを降り、押して歩くような者でございます。ガシガシ走っていくなんてとても無理な話です。体はなまっているし、荷物も重いし、大変ですから……。

でも、チャリンコのスピードってのは妙にイイ感じなんです。歩きだったら遅すぎるけど、車だったら絶景も見落としてしまうし、バイクだったらとにかく飛ばしたくなってしまう……。それぞれの良さがある中で、チャリンコは上位にランクインするくらいの良さを充分に備えているんです。すばらしい乗り物です。ただ一つ、非常に疲れるという欠点を除いては……。



葉っぱの橋。

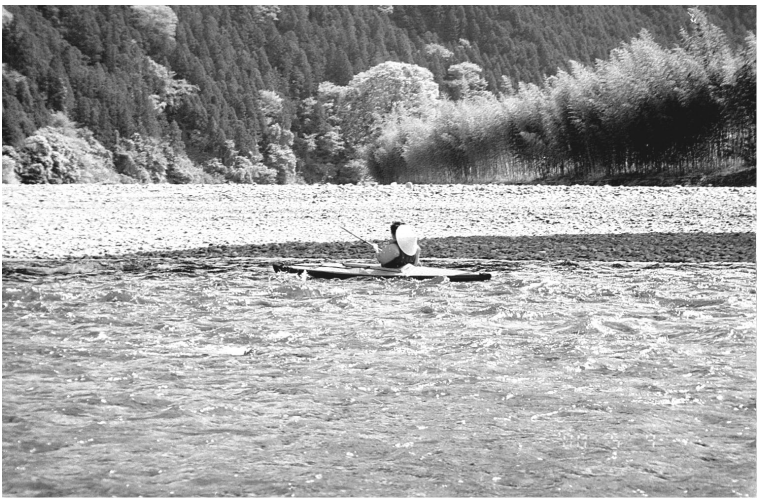
「えっ?」と思うことはよくあります。目を疑う、という状況です。そのときの僕の「えっ?」は橋がふさふさしている様子が見えたときです。遠くから見たらホント、何事かと思いました。緑色に揺れていたんです。

山へ向かって道を走っていると、だんだん「山ぁ〜!」という雰囲気になってきます。川の流れがキラキラ光り、車の流れもパラパラになり、空の青さがピカピカ近づいてくる感覚です。でも、特に「山」を強く感じるときというのは、やっぱり緑という色の変化です。

ところが坂道を登る苦しみにあえぐ僕の視界には、緑の山や遠く澄み渡る空などほとんど入ってきません。延々と続く道路をうつむき加減ににらみつけ、ひたすらペダルを踏みしめるんです。顔を上に向けるだけのゆとりなんか全然ありません。時々、前方確認のために前をギロリと見るくらいのモンです。

そんな時の「えっ?」だから、かなりの動揺が僕の中に走るんです。思わず写真まで撮ってしまいました。でも、そんな動揺とともに、目に映る緑の風が心の中をやさしく吹き抜けていったような気がします。

そして、一度止まってしまうと次に動き出すのが大変で、しばらくその場でくたばっていました……。


笠をかぶって川下り。

どんぶらこ、どんぶらこ……川を下っていきます。いや、もっとスマートにすいすいと流れていくような感じですね。チャリダーの僕ですが、川面を流れるその姿を見るとカヌーイストにも変身してみたくなります。

山道にさしかかった頃、そのきれいな流れをカヌーで下っていく姿を見たときには、ホント水辺はいいなぁ、とうらやましくなりました。僕が汗だくでチャリンコを進めているのを尻目に涼しい顔をして流れていくんだから、やってられません。

僕の「ほしい物リスト」に組み立て式のカヌーというものがあります。カヌーなんて乗ったこともないのに、それでもほしいと思っています。何よりもまず、乗ってみなけりゃ話にならないんですけどねぇ……。どうもチャンスにめぐまれないんです。やっぱり陸の上と水の上では勝手が違うような感じがします。所詮、チャリダーはチャリダーか……と悲しくなります。

僕には僕の得意技があります。だらだらとだけど長い距離をチャリンコに乗ることです。でも、得意技が一つしかないのはくやしいし、もっと増やしたいと思うわけです。カヌーに乗り、するすると水面を走っていくような技を身につけたら、僕はまた一つレベルアップすると思います。いつまでもどこまでも伸び続けていけるような人間でありたいもんです。

天狗登場！

わぁお！……ついに現れました。天狗です。しかも、デカイ顔をしています。目からビームでも出てきそうな勢いの顔です。さすが、天狗街道と名付けられているだけのことはあります。長さでは僕の顔も長い方ですが、デカイかというとちょっと違うような感じがします。とにかく天狗の顔はデカかったんです。

顔というのはそれを見ただけでその人の中味がかなり分かってくるから不思議なものです。その時うれしいのか悲しいのか、怒っているのか楽しんでいるのか……表情の変化っていうのは人間特有のものかもしれないけど、すごいことだと思います。

さらにその人の顔を見て、怖い人なのか面白い人なのか……もちろん全然はずれてしまうこともありますが……、その時の感情だけでない、人柄まで伝わってしまうこともあります。パッと見ただけでそれが感じられるんだから、顔とはさすがによく見えるところにくっついているわけです。

じゃあ、どんな顔をしているのが一番なんでしょう。顔の長さはどうにもならないけど、僕はできるだけ人が見て不快にならないような顔をしていたいと思います。できればいつでも笑顔というのが一番よさそうな気がします。自分の笑顔が他の人の笑顔、そして幸せを呼んでくれるような気がするからです。たくさんの幸せに囲まれて生きていきたいものです。

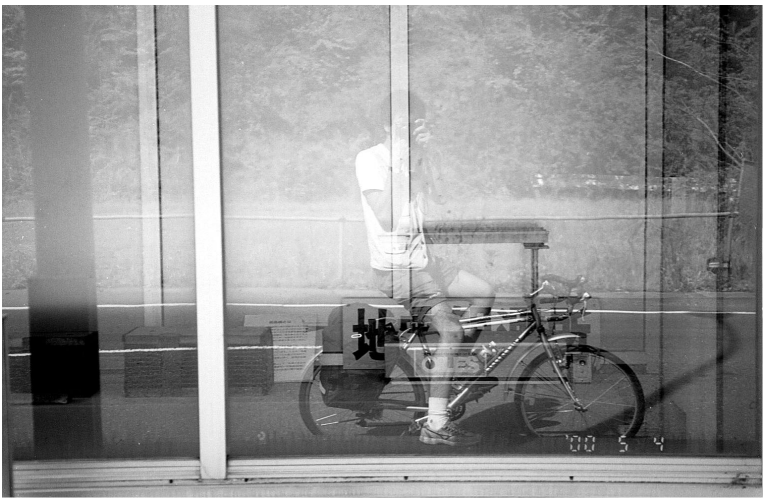
ミニサイズの小天狗登場。

「小さい」……、大きなヤツがいれば小さなヤツもいるんです。橋のたもとには小さい天狗が睨みをきかせていました。かわいいヤツでした。

五条の橋では弁慶が待ちかまえ、牛若丸がヒラリと飛んだといいます。その牛若丸は鞍馬山でカラス天狗から修行を授かったともいいます。天狗にも親戚などがいるんでしょうか。春野の天狗と鞍馬山の天狗との関係は一体どうなっているのか、そんなことは知りません。でも、全国区で、天狗たちはがんばっていたということみたいです。

日本に限らず、人間の力が及ばないことには何かしらの神懸かり的な力を信じ、ヒトはその力を敬って暮らしてきました。自然というものを畏れ、それに憧れ、尊敬していたということだと思います。当然、僕なんかに分かるわけもないような、ものすごいエネルギーが自然界には存在しているんです。「自然はいいねぇ」なんて軽々しく口走ってしまう自分が、妙に偉そうに見えてしまいます。「自然は怖いねぇ」なんて軽々しく口走ってしまう自分が、妙に力のあるヤツに見えてしまいます。

天狗たちは、今でもこんな僕らの態度をこっそり見ているのかもしれません。お仕置きされてしまう前にちょっと自分に喝を入れておこうと思います。



記念撮影。

チャリンコに乗っていると、だんだん頭の中がプワァ〜ンとしてきます。何も考えずにひたすらペダルをこぎ続けるんです。きっと何かを考えているはずなんだけど……、やっぱり頭の中はからっぽになっているような気がします。ものすごくしんどいだけなんだけど、妙なトランス状態が自分に訪れるのを感じるんです。まさにチャリダー変身です。

さて、トランス状態に入ってしまうと、あんまり外界のことが気にならなくなってきます。そうすると、だんだんに写真を撮る回数も減ってきてしまいます。こりゃイカン、と思ったりするわけです。そこで、無理矢理にでも写真を撮るという行動にでます。

自分自身を写真におさめることは、機会としてそんなにたくさんあるわけじゃありません。チャリダー旅行の記念として一枚撮っておいても損はないでしょう。ガラスの世界に入り込んだチャリダーがカメラを構えている姿をフィルムに写し取りました。ガラスの中の彼も、きっと不思議な顔をしていることと思います。

チャリダーとしての時間は日常とは別の時間です。ガラスの中の世界も日常とは別の世界です。こんな別の次元に目を向けることも、僕にとっては楽しいことだと感じられます。

宿は橋の下。

「あんたが橋の下で泣いているところを拾って……」などと母はよく言っていました。そういえば、実家のすぐそばには小石川という川が流れていました。愛すべき橋の下……、どこであっても故郷というものは心が落ち着くものでしょうか。人にはそれぞれ何ともいえない暖かさというものを感じる場所というのがあると思います。テントを張るのにも大好きな場所があるんです。和みます。

……って、確かに橋の下にテントを張るのは好きですが、僕は焼津の市立病院で生まれました……のはずです。生まれる時から体がでかくて母が苦労した……と聞いています……。その後、何不自由なく……ちょっと貧乏な思いをしたけど……生活してきました。

じゃ、なんで橋の下が好きなのか……それは雨が降ってもあんまり濡れないからです。テントを張ろうとしている時から雨が降ってたらものすごく不愉快です。撤収するときまで降っていると最悪です。濡れたテントをそのままたたんで袋にしまうことを考えただけで鳥肌が立ちます。

たとえ、朝起きたらテントが鳥の糞だらけでも……、たとえ、朝起きたらテントが水没していたとしても……、僕は橋の下が好きなんです。

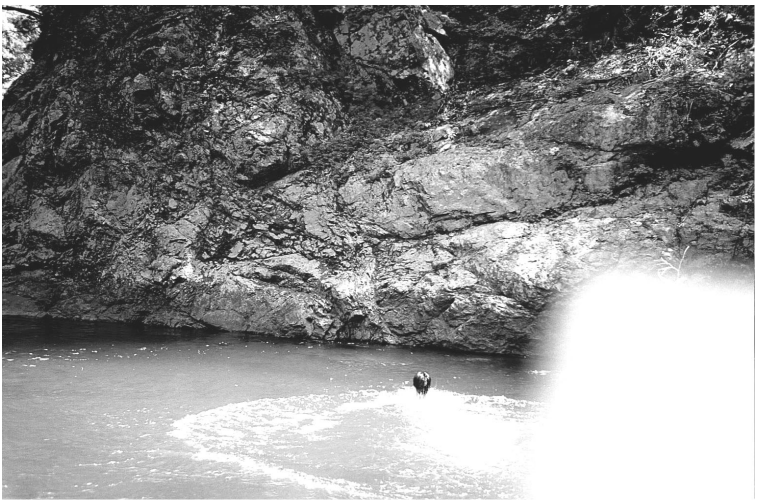
空き缶の正しい使い方。

チャンチャカチャカチャカチャンチャッチャ♪……さぁ、夕食の支度です。本日の料理はインスタントラーメン、空き缶塩味です。まず、空き缶を切り開いて水を入れ、火をつけます。沸騰した頃にバキバキにした麺を投入し、二〜三分したら味付けをしてできあがりです。さぁ、召し上がれ……てなモンです。

空き缶は便利です。特にアルミ缶は簡単に加工できるので使いやすいと思います。ご飯一合が上手に炊き上がった時は、自分が天才に思えてきます。平べったく切り開いて鉄板の代わりにして焼き肉をするとなかなか豪勢な食事になります。

チャリダーにとって荷物が重いことは地獄です。そこで、いかに荷物を軽く、コンパクトにするかという点で最大限の工夫をします。旅をするとき、僕はサイドバッグを後ろに二つ装着するだけです。前後合わせて四つのサイドバッグを使う人もいますが、かなり重たいので軟弱な僕にはきついんです。

アウトドアブームということで、車にいろんな装備を山ほど乗せて走っていく人もいます。それもひとつの楽しみ方だと思うけど、僕はできる限り少ない荷物の中で自分の知恵を使って旅をしたいと思っています。自分の旅は、他の誰かが作るんでも何かの道具が生み出してくれるんでもない、自分自身が楽しもうと思ったときに充実していくと思うからです。



どっぽ～ん！

朝、目が覚めたらとんでもなくいい天気でした。……となると、どうしても体がウズウズしてきて……、気がついたら飛び込んでいました。ここはものすごく深い淵で、身長百八十センチの僕が思いっきり飛び込んでも全然足が届かないくらいの深さでした。

基本的に僕は水が大好きで、どうもきれいな水を見ると入りたくなってしまうんです。後のことを考えずに行動してしまうのも僕の習性で、おかげで様々な失敗もしてきました。この時もそうです。

僕が春野へ行ったのは五月の連休の時です。普通に考えたら人間が川で泳ぐ季節ではありません。でも、飛び込んでしまったんです。ものすごく楽しい気持ちが強くて、しばらく気付きませんでした。でも、そのうちメチャクチャ水が冷たいことに気付いたのです。

川からあがった時にはガタガタ震えていました。自分のことながら情けないことです。太陽で暖まった大きな石に抱きついて、その暖かさに感動しました。太陽の力は偉大です。その熱を貯めてくれた石も偉大です。……僕はちっぽけです。

でも……、でも……「とにかく行動にうつして体で感じることも大切だ」と自分を慰めました。

武器弾薬……。

CARTRIDGES……カートリッジィズ……えっ？カートリッジ？……ゴロンと転がっていた物を見て、僕は目を疑いました。辞書には弾薬筒などと書いてある代物です。なんで僕は春野町の河原でそんなモンと出会わなきゃいけなかったんでしょう。

五月の川に飛び込み、寒さに震え、太陽にぬくもりを感じていた僕は、河原をボ～ッと眺めていました。たくさんのゴミが散らばっていました。その中にあの特有の色のモノを発見したんです。なぜかあの色というのは直感的に怖さを覚える色です。見ただけで何か、人を攻撃してきそうなイヤな威圧感を感じるんです。

戦争なんて僕らからしてみればかなり遠い存在のものに思えます。テレビから流れてくる映像を見ていても、どうしたって自分のことと結びつけて考えることは難しいことです。でも、実は自分の周りにも、時々不穏な空気が漂うことがあります。この時もそれに近いわけです。

なんで弾薬のカートリッジケースがそこにあったのか、そんなことを僕が知っているわけがありません。でも、実際にそれはそこにありました。世の中、僕らが知らないところで、いつでも何かが起こっているんです。それを知る眼を持ちたいです。

あ……、そのケースはおみやげとして拾って帰りました。

ビョ〜ン、巨大ところてん。

道の上に覆い被さるのは一体何なんでしょう。角張ったコンクリートの塊が山の中から生えていました。しかも、斜めに傾いているし、道の切れ目の所でスパーンときれいに切り取られたようになっているし、工事用の足場みたいなモンまでついているし……、訳ワカメです。

「明神峡」などと書かれていてもみじの絵なんかも描かれているから、もしかしたらものすごく意味の深いモノなのかもしれません。観光のために必要なモンなんでしょうか。いや、防災用の意味があるのかもしれません。あるいは巨大なところてんが中に詰まっているのかもしれません。きっと、おそらく、たぶん、やっぱり……、奥が深いモノなんです……。

山の中にコンクリートの塊があるというのは、違和感が残ります。ま、よく考えたら、僕が走りまくったアスファルトの道路も、ガードレールも、そびえる壁だって、もともと山ん中に生えていたわけじゃないから全部不自然なんですけどね。人間にとって何かしら都合がいいから、堅いコンクリートが山ん中にボコボコ出てくるんです。確かに便利です。舗装道路がなかったら軟弱チャリダーは走れませんし……。大自然の中でも、僕はでっかいコンクリート文明に支えられていたんです。

妙に心が晴れないモノでした。

行き止まり。

「ダメだ、こりゃ〜！」と思うことがあります。前途多難、五里霧中、絶体絶命、意気消沈……ってな感じです。通行止めなんて大キライです。

僕はいろんな所のいろんなものを見たくて、ちょっとだけ脇道へと進んでいきました。だんだんに道が険しくなってきて、まさに山道という雰囲気が漂ってきます。これでこそ僕が求めていた山ん中です。よっしゃぁ〜、と思いながらさらに先を目指していくと、そこにゲート出現……という結末でした。

ちょっとくやしかったので、ちょっとだけ先を覗き込んでみました。でも、あんまり進入してしまうとマズイと思って、ちょっとだけで勘弁してあげました。

まだ見ぬ世界とは、たくさんの可能性に満ちた世界です。だってそこに何があるか分からないんだから……。自分にとって「おおっ！」と思うこともあるだろうし、「ええ？」と思うこともあるかもしれません。でも、それを知ったことで自分自身が一つ大きくなるはずです。先が見えなくなって何だか全く分からないような時でも、分かる所から出発です。無理せず……、ちょっとだけ無理をしながら先へ先へ進めたら最高だと思います。

ちなみにゲートの先は「ええ？」と思うだけでした。

標識を越えると、そこは水窪だった……。

「チャリダー日記」（春野編）です。春野編……なんです。ということは、春野を飛び出してしまった時に、その「チャリダー日記」は春野編じゃなくなってしまうわけです。別にそこには何かの線が引いてあったり、色が違っていたりという変化はありません。ただ、「ここから水窪町だよ」という標識が立っているだけです。

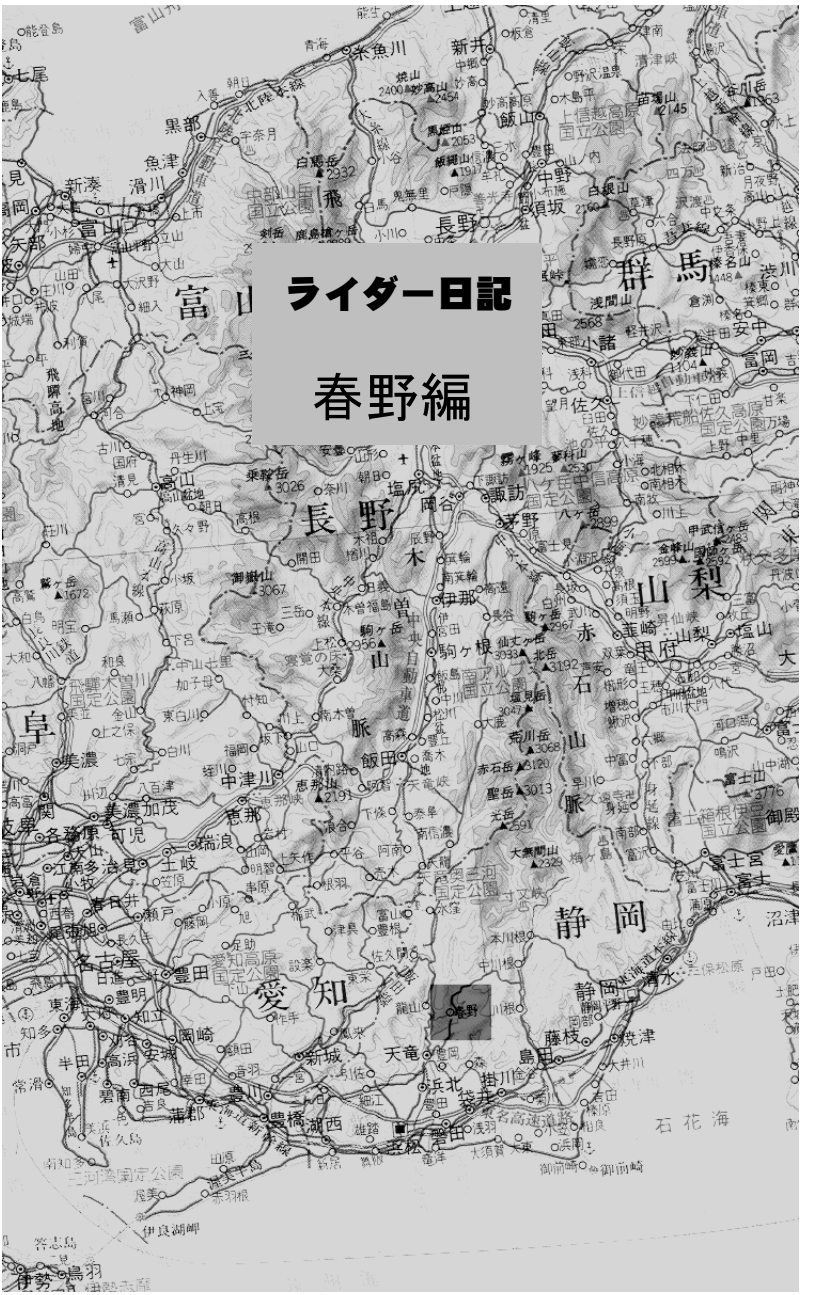
けじめとか切り替えとか、ある一定のラインをまたいで別世界になることは日常生活の中でもよくあります。そこにも明らかなラインが見えないことが多いように思います。自分では常識だと思っていたことが、他の人からは非常識に思われてしまったりすることもあります。

僕は非常識人間なので、よく周囲の人々からツッコミを受けます。ツッコミを入れてくれる人はまだやさしい方で、何も言わずに白い目で見ているだけの人もいるような気がします。僕も周囲に迷惑をかけて喜んでいるわけではないので、イヤな思いをさせていたら自分を変えていきたいと思います。せめて周囲に迷惑をかけない程度の非常識人間として生きていきたいと思うんです。もっともっとレベルアップしなければいけません。

ちなみに、ここでこのまま引き返したので、名実共に今回の「チャリダー日記」（春野編）は終了です。

ライダー日記

春野編



山ん中……。

山道を走ります。ここは春野町の山ん中です。チャリンコでも走れますが、とりあえずライダー変身です。僕はライダーにもなるし、チャリダーにもなるし、場合によっては嫌々ながらドライバーになることもあります。だから、それぞれの立場のことが全部分かります。

普通の道で走るとき、一番強いのは四輪のモノです。我が物顔で走り去ります。それに乗っているときは、横をチョロチョロしている二輪のモノが邪魔で仕方ありません。で、自分が二輪のモノに乗っているとデカイ四輪のモノたちが邪魔なんです。さらに、同じ二輪でもライダーの時はチャリダーが鈍くさく思えるし、チャリダーの時はライダーが恐ろしく思えるわけです。……基本的にわがままなんですねぇ……。

じゃ、山道で最強なのは何でしょう。僕は歩きだと思います。じっくりじっくり地面を踏みしめて歩いていくと、山道ならではの良さが伝わってくるような気がします。大地から足の裏を伝わって、腹へ、胸へ、そしてのどへ……ってヤツです。

でも、僕はこの時ライダーでした。僕はライダーとして未熟者なので、ダートの山道を走るとコケます。春野の山道では三回ほどコケました。……ということは、僕はもっと山道でライダーに変身して、練習しなけりゃいけないんですかね……。

ひぇぇぇ〜。

タラタラと山の下り坂をコケないように注意しながら進んでいきました。「ん？」と思う瞬間がもう少し遅かったらマジで死んでいたかもしれません。前に何かの蔓がビロロ〜ンと現れたんです。それもちょうど首くらいの高さでした。

そもそも自然の中、排気ガスを噴出しながらバイクで進むことが不自然なんですよね……。だから山ん中に変なモンが入り込むと、山はそれを拒むのかもしれません。山って、ものすごく奥が深いものだと感じます。頭でいくら考えても答えが出ないような、肌で感じるようなことが多いような気がするんです。それは怖さであり、大きさであり、不思議さであったりもします。とにかく、何かを感じるんです。

幸か不幸か僕はライダーとして未熟者なので、進むスピードも速くありませんでした。それで、山の方でも僕を殺す一歩手前で蔓の姿を見せてくれたんだ、とも思えます。もし、僕が調子に乗って「イェ〜イ！」なんて叫びながら突進していたら、山は僕を許してくれなかったのかもしれないんです。

自然は偉大です。偉大なんて言葉にしてしまうことが申し訳ないくらいにデカイ存在です。僕らはデカイ自然の中でちょっとずつ面倒をみてもらっているんです。まだまだ大自然のふところの中で鍛えられなきゃいけないみたいです。

山道へゴー！

草だらけでした。「ホントにこんな所でいいのか」とかなり心配になってしまいます。でも、いいんです。草ボーボーの向こう側には道がつながっています。

どうしたって入り口が狭いとその先へ進もうとした時、おっかなびっくりという状態になってしまいます。そりゃ、そうです。先のことが分からなかったら不安で頭がいっぱいになります。もしかしたらその先にショッカーが待ちかまえているかもしれないんです。ライダー対ショッカーなら完全勝利を収めると思いますが、もしも凶暴な怪獣が出てきたらウルトラマンに助けを求めなきゃいけないじゃないですか……。

春野の山ん中に怪獣はいないと思ったので、不安と闘いながらも前へ進みました。この決断には正確性が必要です。もし、この判断が間違っていたらライダー生命が絶たれることだってあり得るからです。決断力と正確性のバランスが大切なんです。

僕らは毎日、人類を守るような決断をしているわけじゃありません。もっと小さな行動について何かの判断をしています。その小さな判断の積み重ねが「いざ」という時の決断力につながるんだと思います。その判断ができるような眼を育てていくのが日頃の修行なんだと思います。

決断の向こうには、わくわくするような道が続いていました。

これぞ山道。

「自分の道は自分で切り開け！」なんて言いますが、山ん中でヒトが歩く道を作り出すのは大変なことだと思います。大小さまざまな木々が立ち、その根元には下草が生えまくり、落ち葉がガサガサと積もっているし……、大変なことです。

でも、道はできていくんです。一番最初に道筋をつけるのは何かの動物でしょうか。けもの道と呼ばれるような道があちこちに出現します。それをヒトが利用し始めて、もっと便利にするために草を刈ったり、階段をつけたりするんじゃないでしょうか。もしかして、その道をもっと便利にしようとしたら、ブルドーザなんかが入って舗装道路を作ってしまう場合もあるはずです。

僕がヒトの一人として思うのは、やっとヒトが歩けるようになったばかりの山道っていいなぁ、ってことです。ヒトが自分の足で……道を作ろうという意識ではなくて……みんなが歩いていたらいつの間にか道ができていた、ってような山道がいいと思うんです。何ていうのか、やさしい感じがするからです。

普段、アスファルトで固められた道ばっかり走ってコンクリに固められた建物の中で生きていると、それでもいいような気もするけど、やっぱり僕はそれだけじゃイヤなんです。

僕は山男じゃないんですけどね……。

森のトンネル。

ヴォォヴォヴォォォォ〜……という声が聞こえてくるかもしれません。雨降りバス停では傘をさしているかもしれません。森へのパスポートは木々のトンネルをくぐって行くような所に存在しているのかもしれません。

うっそうとした山道には何かを感じさせる空気というものがあります。そこから現れるのが怖いモノなのか、変なモノなのか、やさしいモノなのか、人によって感じ方が違うと思います。

僕には霊感と呼ばれるものが全くありません。だからその類のヒトたちに出会ったこともありません。もし、僕にそのようなモノがあったら、今までにきっといろんなモノを見てしまっているかもしれません。もし見てしまったら……、もし出会ったとしたら、友達になりたいなぁ、なんて気楽なことを考えたりします。

まだ行ったことのない場所へは、どこへでも行ってみたいと思います。そこに何があるのか肌で感じたいと思うじゃないですか……。行ってみなけりゃ分からないことです。まだ会ったことのないヒトも、どんなヒトか会ってみなけりゃ分からないはずです。きっと仲良くしてくれるモノたちもいるんじゃないでしょうか。

霊感があって怖い思いをしたひとたち……、ゴメンナサイ。

山の丸木橋。

デコボコ砂利道もあるし、丸木橋もあります。山道はこれだからおもしろいんです。どこかの街の真ん中にいきなりデコボコ砂利道が現れたら、車は大渋滞になりそうです。丸木橋なんて出てきたら、運転手みんなが車を傾けて片輪走行をしなければなりません。そんな怖い所はイヤです。

それが山ん中だったら何でもあり、すべてが新鮮に思えてくるから不思議なモンです。僕は山屋ではないので命をかけてまで山のてっぺんを目指したりはしません。「山登りってすばらしい！」なんてことも言いません。だって、山を登ってたら、しんどいですから……。そう、自信をもって自己紹介ができます。僕は軟弱者なんです……。

それでも山に行って、ヘラヘラと山歩きをするくらいなら充分に楽しむことができます。変化に富んだ自然っていうものに巡り会えるからかもしれません。道は時として厳しくもなるし、やさしくもなります。迷うこともあるし、スムーズに進めることもあります。いつまでも同じ様子が続いていることは、ほとんどありません。

さぁ、丸木橋が現れました。滑って落ちてはいけません。注意して渡ります。ただし、僕はこの時バイクを降り、ライダーではなくなっていました。

橋といえば赤。

赤……この色、僕、かなり好きなんです。だからバイクも赤だし、その名も「赤龍丸」としているんです。闘牛なんかやってたら、ヒラヒラする赤い布にうれしくて反応してしまうかもしれません。情熱の赤です。

そして、橋の欄干といえば、やっぱり赤です。牛若丸が五条大橋でヒラリと飛び乗ったのが、もしも黄色の欄干だったりしたら、イマイチかっこよさに欠けるような気がします。赤い欄干にスッと降り立って弁慶をギャフンといわせるからおしゃれなんです。美しいです。絵になります。

さて、春野町のこの橋は、欄干のみならず全体が赤くなっています。別に照れているわけじゃなくて、鉄筋を赤く塗装してあるということです。五条大橋とは違うので、雅やかな雰囲気は感じられません。無骨な姿です。でも、それがこの橋の味を出しているように思えます。向こう側へ渡ることがなによりも最優先された、実用的な橋だからです。

もし、橋がなかったら、下の川をジャブジャブ渡るしかないし、他の場所なら谷底まで降りることだってあります。他の橋を求めて川筋を進むことも考えられます。本当に必要とされる存在なんです。人間も同じ……、必要とされる存在って大切ですよね。

昭和の遺物。

「あれ？おかしいなぁ……、壊れたかな」という印象を抱きながら僕の中の昭和という時代が終わりを告げていきました。ラジオの『基礎英語』を聞いていたんです。そしたら、急にその音声がおかしくなり、その時の天皇が亡くなったという臨時放送が流れてきたんです。

「昭和53年竣功」なんて橋に書いてあったりします。そんなモンを見て、「竣功」ってどういう意味だろう……などと悩んでみたりします。日本人に特有なのかもしれないけど、何か物を作ったときにはその証を刻み込もうとする習性があったりします。それを見て、「ふ～ん」などと言ってみたりもします。「ふ～ん」と言うだけで妙に安心感があったりもします。

その年号が「縄文三年」とか「宇宙世紀0079」だったりすると、ものすごく価値の高いモノになるかもしれません。でも、今のところ「昭和」という時代にはそこまでの高い価値はないような気がします。そして、その「昭和」と刻まれた橋が何百年も使われ続けるかというと、それも疑問です。

なのに、せっせとマーキングをしていきます。この表示にはきっとそれなりの役割があるんでしょう。その橋を通ったり、橋のたもとで弁当を食べるときには関係ないけど、きっと、たぶん、おそらく、それなりの役割があるんです。……地味な役割ですねぇ。

日本の田園風景。

山道を抜けてパァ～っと広がったのが田んぼでした。これぞ日本の原風景というお約束の光景でした。山ん中にしては、かなり広い田んぼのような気がします。恐るべし人間パワーです。

田んぼ……僕は大好きです。小さい頃、家の斜め前に田んぼがあって、よくそこで遊びました。春はレンゲ、夏はオタマジャクシ&カエル、秋は……入ったら叱られます……、冬は刈り取られた稲の跡、という風にいろんな顔を見せてくれる場所でした。

農家の人たちってのはすごいなぁ、と思います。毎朝毎晩気持ちを込めて作物と向き合っているんです。週休五日なんていってられません。相手は生き物です。しかも話もできないし、動きを表すこともできない生き物です。それらの気持ちが分かるんだから、農家の人たちは天才だと思います。

秋、田んぼには黄金の稲穂が揺れます。その昔マルコ・ポーロが日本に訪れたとき「黄金の国」と思ったのは、もしかしたらこの稲穂を見たからかもしれません。田んぼは黄金にも勝るとも劣らない価値をもった貴重な宝物だと感じます。

日本の農業は今、大変な状況にあるといいます。僕がその状況を大きく救うような人間にはなれません。でも、米を愛する者として、もっともっとご飯を食べたいと思います。

寂しげな木造の姿。

ワーッ、キャー……、という声が聞こえた頃もあったはずです。ドッヂボールでにぎわっていた昼もあったと思います。怒鳴り声があり、泣き顔があったかもしれません。それら全てが「今は昔」のお話です。

そこにいる時にはそんなに強く感じないし、当たり前に思えることかも知れないけど、学校という場所は何かしら居場所としての存在感があります。別に待ち合わせをしたワケじゃないけど、そこには誰かがいて話ができます。所場代を払ってなくても、自分の席が確保されています。学校って、すごいです。

そんな学校という所にも「終わり」が来ることがあります。そこに先生と呼ばれるヒトたちがいなくなり、子どもたちも通わなくなります。建物だけがポツンと取り残されてしまいます。寂しいものです。当たり前だと思っていたことが、実は当たり前じゃなかったのかもしれないと思えてきます。エビの天ぷらだと思って食べていたら、最後まで衣だけだったような虚しさです。何かがスポッと抜けてしまっている感覚です。

その時だけその場を訪れた者には分からない感覚かもしれません。でも、何かを感じます。きっと学校へ通っていた子どもたちの思いが、木造の建物にずっと息づいているんです。人の思いというものは、時を超えていきます……。

建物の中には今でも……。

今までに何枚の絵を描いたでしょうか。その中で、自分が気に入った作品がどれくらいあったでしょうか。自分の心を上手に作品の中に封じ込めて、それを見た人がその思いを自分と同じように感じてくれたら最高だと思います。

今は学校じゃなくなってしまっている場所に、何枚も絵が飾ってありました。その絵は主人の心を伝えているんでしょうか。絵を描いた人は、学校じゃなくなる場所に自分の作品が飾られることを意識していたんでしょうか。そして、僕のような人間が覗き込むように絵を眺めるだなんてチラッとでも思ったでしょうか。……まずそれはないでしょう……。人知れず、作品たちは語っていました。

絵の上手下手なんて、僕に分かるわけがありません。だいたいが僕が描く絵なんてモンは、エエ加減なモンですから、ろくでもない絵ばっかりです。それと比べると、一生懸命に思いを込めて描いた絵というのは、上手だとか下手だとかそんな世界を飛び越えています。何かしら心に残る良さというものがあるように感じられるんです。

そんな、きっと思いを込めて丁寧に描いた絵が、誰もいない建物の中でひっそりしているかと思うと、寂しさで心がいっぱいになります。せめて、僕が思いを感じて帰ろうと思いました。

卒業の思い出。

「夜の校舎窓ガラス壊してまわった……」なんていう歌もありますが、卒業というイベントは学校の中でかなりのインパクトを持ったものです。だから、それに向けていろいろな取り組みをするんです。

自分が卒業した学校にふらっと遊びにいったら、そこに自分の面影を感じるモノがある……、ただそれだけでうれしくなります。それがたいしたモンじゃなくてもいいんです。「自分」が感じられたら、それでいいんです。

そう考えると、レンガなどの作品はいいですねぇ……。かなりの年月に耐える力を持っています。多少、苔が生えたり汚くなっても、逆に味が出てきます。

僕の記憶の中では、小学校の卒業の時に作った、トイレットペーパー・ホルダーが妙に鮮明な姿を現します。でも、冷静に考えたら、ベニヤ板で作ったあのホルダーが何十年も使用可能とは思えません。といって、まさかレンガ作りのホルダーをトイレに置くわけにもいきませんからね……。

僕が作った卒業記念の存在は気になるところですが、それでもやっぱり、大切なのは記録より記憶でしょう。物より思い出ってヤツです。物に代えることができないほどの豊かさのある大きな何かを、もっと心の中に積んでいきたいと思います。

ちゃんと狛犬がいます。

ただの家の前に、普通は灯籠が立っていたりはしません。もちろん狛犬なんてありえないことでしょう。……そんな風に考えなければ、ここが神社だなんてイマイチよく分かりません。パッと見ただけじゃ普通の家のようでした。

でも、やっぱり神社は神社です。神の宿る所としてそれなりの雰囲気は持っていました。あくまで「それなり」の雰囲気だと感じたんですが……。それを僕に感じさせたのは何だったのか、ちょっと考えてみました。

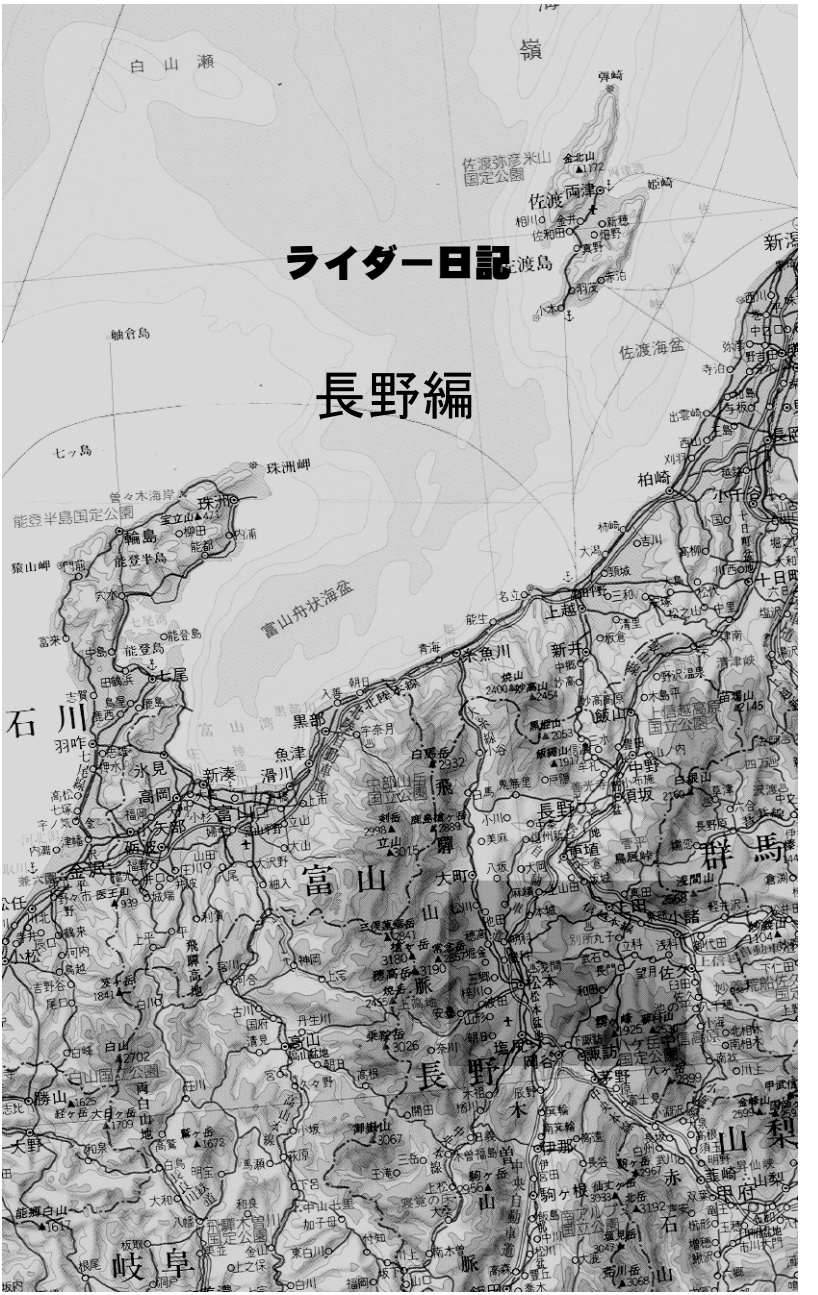
木……じゃないでしょうか。神木なんていうものもありますが、何かの雰囲気を感じさせる木の存在は大きいように思います。もちろん、山ん中だから辺り一面、木、木、木……です。そこに感じられる威圧感があってこそ、神社の存在意義があるんでしょう。

ここまでフォローしてみましたが、神社としてはそんなにすごいモンじゃありませんでした……。すごいモンじゃないけど、そこに住む人々はその神社を大切にしていると思います。所詮、僕はよそ者であり、山の人間ではないってことです。

山の人間になりきれないことを感じながら……、でも、山への憧れを抱きながら、僕はこの神社を後にして山を下り、自分の世界である「街」へと戻っていきました。

ライダー日記

長野編


白山瀬
嶺
弾崎
佐渡弥彦米山国定公園
金北山
佐渡両津
姫崎
相川
佐和田
新穂
佐渡島
小木
佐渡海盆
軸倉島
七ッ島
珠洲岬
能登半島国定公園
輪島
能登半島
猿山岬
富山舟状海盆
能登島
七尾
石川
羽咋
氷見
高岡
新湊
富山
魚津
滑川
黒部
金沢
小松
白山
白山国立公園
勝山
大野
岐阜
飛騨
高山
長野
上田
松本
諏訪
飯田
伊那
木曽
中野
飯山
上越
新井
糸魚川
柏崎
長岡
小千谷
十日町
群馬
赤城山
日光
足尾
栃木
宇都宮
那須
福島
会津
郡山
白河
仙台
山形
新潟
佐渡

ウルトラマン！

遠出は久しぶりでした。今回の目的地は長野、友人・白柳淳のギター・コンサートを聞きに行くのが目的です。どのくらいの時間がかかるのかもよく分からずに出発しました。とにかく国道一五二号線をひたすら進めばコンサート会場へたどり着けそうだ、ということが地図を見て分かっていたことです。

僕の唯一の財産、ＢＭＷ・Ｆ６５０ＧＳ「赤龍丸」は快調にうなりをあげます。山のクネクネ道も楽しみながら進むことができました。バイクならではの楽しみですねぇ、あれは……。チャリンコではしんどいだけです。以前、彼の所へチャリンコで行ったときは、メチャクチャしんどかったですから……。

さて、ぐんぐん進んでいくと、道端にウルトラマンがいらっしゃいました。他にも、ゴジラさんなどもいらっしゃいましたが、この右側のウルトラマンが一番かわいい感じでした。左側のウルトラマンは妙に怖い顔をしているような気がします。

しかし、これは一体、何だったんでしょう……。残念ながら、その真相は分かりません。でも、きっと作った人は何かの思いをもって石のウルトラマンを生み出したんだろうと思います。番組の中ではカップラーメンができるだけの三分間しか活躍できないウルトラマンですが、石のウルトラマンはきっと何年間も僕らの安全を祈ってくれるはずです。

なぜ？通行不能？

頼りにしていた国道一五二号線、それが途中で切れていました。「えっ？」と思い、この先まで赤龍丸を走らせましたが、そのうち砂利道になり、結局、行き止まりになっていました。かなりのショックでした。

そこで、あわてて地図を見て、ここを右手に行けば何とか向こう側へ行けそうだということを確認しました。ただし、僕の地図はちょっと古い「ツーリング・マップ」で、あっているのかいないのか、不安を拭いきることはできませんでした。でも、行くしかないので、右へと進路をとりました。

ウネウネと、また、かなりの山道に突入です。道に対して信頼感がないので、余計に進みにくいような気がしました。坂道は上ったら下りていく道があり、ここでも下り道がありました。

そこでアクシデント発生……。後ろのブレーキが利かなくなってしまったのです。これも焦りました。長い下り坂のせいでベーパーロック現象というものが起こり、いくら踏み込んでもスカスカいうだけになってしまったのです。自動車教習所でこの現象について勉強していたので、熱が冷めれば大丈夫だと判断して乗り越えました。

知識は自分自身を助けてくれます。それを、身をもって感じた出来事でした。

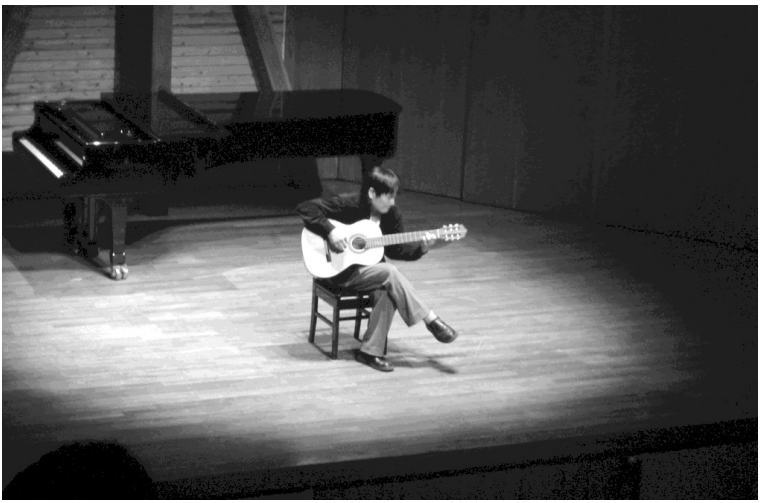
信州国際音楽村ホール「こだま」

コンサート会場に着いたのは午後七時過ぎ、すでに開演時刻を過ぎていました。「受付を……」と思ったのですが、そこには誰もおらず、勝手に入り込みました。ホールの内側から「アルハンブラの思い出」の音が漏れてきます。早く入りたいけど、演奏の途中で入るような失礼なことはできません。

大きな拍手が聞こえてきました。このタイミングで入場です。入ってびっくりしました。木調のすてきなホールにお客さんが大勢入っています。そこにヤツがいました。みんなの視線を浴びながら何か話しています。静かに話すその声が木のぬくもりに包まれています。ちょっと緊張しているようでした。

ヤツが「僕の友達」という範囲から飛び出していってしまったような気がしました。大学時代、僕の下宿で一晩中ギターを弾き、音楽について語り合ったヤツが、自分のためのコンサート会場で話をしていました。うれしいようで悲しいようで、不思議な気持ちです。

三年前、たった一人で長野へ引っ越したヤツが、あれだけたくさんのファンを集められるギタリストになっているということ……。でも、僕が思ったことは自分自身のことでした。「ヤツが頑張っているからには俺もがんばる」、道はちがうけど、僕は僕の全力を尽くすことを考えていました。



ギタリスト・白柳淳。

ヤツが時々演奏を間違えるとき、僕はクックックッ……と笑っていました。自分で作った曲を間違えているんだから変なモンです。いつものようにごまかしながら、何事もなかったかのように弾き続けています。「他の客は騙せても、俺の耳は騙せんぞ」と妙な優越感にひたりながら聞いていました。

ヤツが作曲するとメチャクチャいい曲でも、メチャクチャ難しい曲ができあがります。それで、自分で弾けなくて「あ〜、むかつくぅ〜。誰やねん、こんな曲作ったンは！」と一人でつっこんでいるんです。手に負えません。

ちなみにヤツは大阪を出て長野に移住したとき、ギター職人のところに弟子入りしました。だから、ヤツが使っているギターは自分で作ったギターです。非常にいい音が出ます。ギター職人の技術を盗み終わった頃、ヤツは師匠のもとを離れて、本格的な作曲活動に入りました。

ヤツは自分で作った曲を、自分の作ったギターで、自分自身が演奏する……完全自給自足型のギター男です。ということは、自分のしたことに言い訳ができません。どこかで失敗しても他の人のせいにすることができないんです。逆に言えば他の誰かがヤツに文句をつけることもできません。……それだけ真剣だから人を感動させることができるんでしょうね、きっと……。

わぁ？！「こだま」の床が……。

コンサートの第一部が終わり、休憩時間になりました。そこらへんを歩くと、カコカコと音がします。足元をよく見れば、木が埋め込まれていました。例によって好奇心が顔を出します。……どれ……、キコキコ……、スポン！やったぜ！……床の一部がはずれました。だから何だと言わないでください……。

僕は木が好きです。しかも、生えている木より木材になって、人間が使うようになった状態の木が好きです。生えている木は僕にとって偉大すぎるような気がします。屋久島の縄文杉なんて、ちょっと近寄りがたいくらいにすごい存在に感じます。

木材になった木は、雨や風とたたかうことを終え、僕たち人間を包み込むようなやさしさを持っているように思えるのです。あの、木目の美しさが僕に語りかけてくれるように思えて……。「焦らなくてもいいよ。のんびり行こうよ……」なんて、声が聞こえそうです。

信州国際音楽村ホール「こだま」は、入った瞬間から僕の心をリラックスさせてくれました。床から壁から柱、天井まで、木、木、木……。しかも、そこにギターの音色がやさしく響くんです。ものすごく贅沢な時間を過ごすことができる空間でした。僕はそんな木からやさしさをもらって、そんな木のような温かさを持った人になりたいなぁ……と思います。

「白柳淳作品集Ⅰ」のCDには一曲目に「朝陽のように」という曲が入っています。題名のようにとてもさわかかで心が軽くなるメロディです。もちろん、ギター曲です。それをヤツは弦楽四重奏曲として編曲していました。いつの間に編曲なんてことにも手を伸ばしていたのか……。ヤツの守備範囲はみるみるうちに広がっていきます。

広がっていくのはヤツ自身の技術だけではなくて、人間関係についても驚くことの連続です。電話などで話をするたびに、何かしら世界が大きくなっているんです。ヤツはインターネット上にホームページを持っていますが、本人はそれをほとんど操れません。「ファン2号」さんという人がそれを作っています。「白柳淳を食わせるようにする会」などというモノもあるようです。周囲の人々が応援したくなる存在なんですね……。

さて、そんな人間関係の広がりの中でこの弦楽四重奏が産声をあげました。この日の演奏が初演だったということです。演奏が始まった瞬間、ギターの音とはまったく異質な深まりを感じ、また驚かされてしまいました。ギター一本では出すことが不可能な音の幅がありました。あの音の深さを生み出すのが、人間関係の深さなんだと思います。ヤツに脱帽！

ギターなんか放っといて……。

そもそも、最初に音楽活動を始めたとき、ヤツはバンドでドラムを叩いていたそうです。それが、エレキギターを見て、「俺にもやらせろっ！」ってな感じでエレキに走ります。そして大学に入って、ちょうど僕と出会った頃、クラシックギターの響きに惹かれていったようです。が、それとほぼ同時期にピアノを練習し始め、ついにはバイオリンにまで手を出しました。ただのアホかもしれませんが、とにかく音楽が好きだということは間違いありません。

で、この時は、自分のオリジナル曲とショパンの曲を弾いていました。ヤツの曲には怪しげな和音がたくさん出てくるので、聞いていて騙されることがあります。が、ヤツは時々、さりげなく間違えています。狙っていてその音なのか、間違いなのかは、だんだんにわかるようになります。

今回、ヤツの最大の失敗は、ショパンの曲を弾いたことでした。ショパンの曲は誰もが知っています。誰もがその間違いに気づいてしまいました。南無阿弥陀仏……。でも、うまくなりましたよ。以前は鍵盤の上をクモが走っているような弾き方だったのが、手の形もきれいになっていました。……え？文句言うなら弾いてみろって？……ごめんなさい……。

闇。

コンサートが終わって本人やら関係者やらと話をしました。なんで、みんないい人なんでしょう。白柳淳を応援する人たちと心が温かくなるような空気を一緒に味わってきました。不思議なほどにいい人たちなんです。

白柳・母もいました。その話の中で、「俺が兄貴の三倍ギターがうまくてもあんなことはできない」と、弟さんが言っていたと聞きました。納得です。前に向かっていくエネルギーや音楽についての情熱は、はかり知ることができないくらいのものをもっています。それが、僕にはうらやましい限りです。

ものすごく飛び抜けた才能なんていうものはよくわかりません。僕の中に、それがあるのかないのかもわかりません。でも、自分の中のほんの小さな才能を大切に育てることが、僕にできることだし、僕がしなければいけないことだと思っています。

そして長野からの帰りは電灯も何もない、目を閉じているのか開けているのかもわからなくなってしまうような暗い道でした。そこを一人、バイクで突っ走ると、自分がスポットライトを浴びている主人公になったような気がしました。山のくねくね道をがんがん攻め、自分に酔いつつ、今の自分の世界・浜松へとたどり着くのでした。

白柳淳作品集Ⅰ

うちに帰り着いてから、あらためてヤツのCDを聞いてみました。「できる限り安く売りたい」ということでギリギリの値段でやったというレコーディングにしてはまぁまぁの音が聞けるので、いいんじゃないかと思っているCDです。一五〇〇円という低価ながらさすがに売り物だけあって、大きな失敗のない演奏が納められています。でも、何かちがうんです。

僕はヤツのギターの音を学生の頃から、一晩中でも本当に飽きるほどに聞かされています。ヤツが勝手に僕の所に来て、勝手に弾いているだけではあったけれども、ナマの音とCDの音ではやっぱり大きくちがうようでした。そう考えると、ヤツのあれだけの演奏を目の前で、あるいは、寝ながら聞いていた僕、というのはものすごく贅沢な人間なのかもしれません。今さらそんなにありがたがって聞くこともできませんが……。

ヤツのギター職人としての「兄弟子」が、「そのうち僕らと話もできないくらいの人になっちゃうのかもね……」と言っていました。そんな感じもします。別世界の人になってしまうのかもしれません。……あまり、イメージできません。ヤツはいつまでも、そのまんまのような気がします。

超有名人になっても、いきなり僕のうちにフラッと現れるような、温かみのある白柳淳であってほしいと思います。

ライダー日記

西国訪問編

ライダー変身！

春……花が咲き誇り、蝶が舞い、ライダーが走り始めます。様々な花粉が飛んでいようと関係ありません。負けてはいられないのです。

ある春の日、バイクで走り始めたモノがおりました。もちろん、僕のことです。いろんな人との再会をするために西を目指しました。学生時代の先生、旅先で出会った友人、これから力を貸してもらうかもしれない人、そして、訳のわからん僕の仲間たち……。

旅とはどこかの場所を目指して移動していくもののように感じられます。でも僕は、どこかの「場所」を目指していた訳ではありません。そこにいる「人」を目指して走りました。

人には出会いがあり別れがあります。僕も今まで数々の人との出会いをしてきました。この出会いというものはすごいモノだと思っています。それまで全然知らない他人だった人が、もしかしたら一生つきあっていく人に変わるかもしれないからです。しかも、その出会いのほとんどが偶然の重なりなんです。

運命というモノを信じている訳じゃないですが、出会いから生まれた人間関係というのは宝だと思います。大切な宝を、より大切なものにするために……「ライダー変身！」バイクで走り始めます。

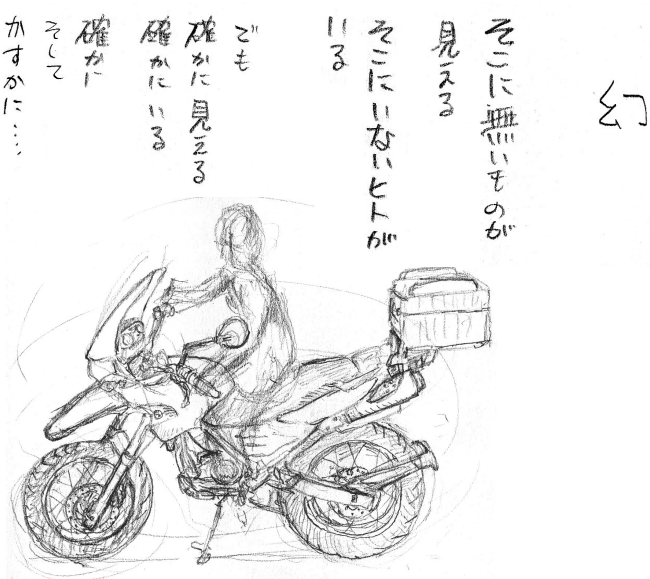
関ヶ原でござる。

岐阜県……って何があるんでしょう。旅先で岐阜県人と出会い、そんな話になりました。岐阜のこと、関ヶ原くらいしか知らないんですよねぇ。岐阜県のみなさん、ごめんなさい。だって、旧東海道だって岐阜県は通っていないんですから……。

それでも何でも、西へと進む僕の目には「岐阜県」という標識が飛び込んできます。旧東海道を使わず、僕は岐阜県経由で西を目指していました。ヒトに会う約束をしていたんです。それが旅先で出会った岐阜県人だったということです。

ところが、ライダーには正確な所要時間が分かりません。そのうえ、無計画人間である僕は「何時何分どこどこへ着く」という連絡をしていませんでした。「だいたい午後」という強烈にあやふやな伝え方をしていたので、エライ迷惑をかける結果になってしまいました。おまけに、その日の午前中、また別のライダーがそのヒトの所へ遊びに来ていたということを後から聞かされ、地団駄踏むことになったのです。そのヒト達とは同じ宿で同じ時間を過ごし、思い出話もいっぱいあったのに……。そこでヒトと会って何をするわけでもありません。ただ話をするぐらいのモンです。それが楽しいし、大切だとも思うんです。記録よりも記憶の方が貴重だって思えます。

そして僕は飄々（ひょうひょう）と岐阜県をあとにしました。



バイク乗りの姿……。

「あぁ～、撮っときゃよかったぁ。」と思っても後のまつりです。写真ってのはバシバシ撮らなきゃいけないんですよね。よく、写真家が何百本という単位でフィルムを使っていたりするのを聞いてビビるんですが、いい瞬間なんてそんなにたくさんあるわけがないんです。そりゃ、大変です。プロの写真家でさえそうなんだから、僕ら、単なるライダーなら尚更です。下手な鉄砲、数撃ちゃ当たる……ってなモンです。

でも、その「瞬間」は過ぎ去ってしまいました。じゃ、どうする……？……という時、他にも方法があります。絵です。絵など「芸術」とはすばらしいものです。たくさんのウソを積み重ねてひとつの真実を創り出すものだ……といえるからです。

たとえば、ピカソの絵って、僕に言わせりゃ「落書きみたい」ということになります。でも、あれは立体的なものを強引に平面に置き換えて作品にしているモンだそうです。目や鼻や耳など、一度に見ることができないものを一度に見てしまったようなものだと教えてもらったことがあります。

岐阜のある町で、僕はなんでこの時シャッターを押さなかったんだろう、と思います。いい光景すぎて写真よりも心にその映像が残ってしまったからかもしれません。でも、記録より記憶に残る大切な宝物を僕は心に残すことができたようです。

西へ西へ……。

岐阜からさらに西へ向かいます。とりあえず、京都に住む愉快な仲間たちのところを目指してバイクをかっ飛ばしました。……が、午後という時間に西を目指すということは、太陽に向かって進むということでもあります。太陽に向かって進むということは、とてもまぶしいということにもなります。はい……簡単にいえば、僕はまぶしかったんです。

その昔、日本という国名もなかったような頃、大陸の人々は太陽を目指して船を進めたともいいます。といっても、この太陽は生まれくる太陽……、東から昇る太陽でした。遥か東方に浮かぶ島国、未知なる島国が目的地です。

もちろん、現在とは全く違う環境で過ごす人々だったはずです。けれど、島国の中からも、そして船の上からも輝く太陽を見ていたんです。僕らが見ているのと同じような太陽が東の空から生まれ、西の空へと消えていったんです。ものすごい時間のロマンを感じます。

日の光、風の声、水の流れなど、僕らの力など到底及ばない、ものすごいパワーを感じさせる自然というものがあります。そのパワーを体全部で味わって走ることができるバイク……、ライダーでよかったと実感する道のりです。

それにしてもまぶしすぎて、事故るところでした……。

絶好の駅寝ポイント！

「夕日へ向かって走るんだぁ！」とばかりに西へ進んでいったんですが、そのうち日が暮れました。真っ暗です。ちょっと心細くなっていきます。僕の心の内では京都に住む仲間を訪ねていく予定でしたが、実は全く連絡をしてなかったからです。

まずいなぁ……と思いながら走っていたら、おっと無人駅発見です。今回は寝袋だけで、テントを持ち歩いていなかったから、寝る場所の確保は重要な問題だったんです。もし、京都の仲間に連絡が取れなかったら、無人駅で寝てやろうと思っていました。ライダー生活では宿泊費ゼロ記録が続いているし、無人駅って割と過ごしやすいんです。

でも、一つ問題になるのは時間帯です。正義の味方であるライダーとしては、当然、利用客の迷惑になってはいけないと考えるので、最終電車が駅を去るまでそこにはいられません。そして、始発電車が来るまでにはその場を去る必要があります。長時間バイクに乗っていると疲れてしまい、ガァガァ眠りたいのにそれがイマイチできないのが苦しいんです。

あれこれ考えながら、そこの駅にあった公衆電話で連絡をしてみると、幸いなことに仲間と話をすることができました。ということで結果的には駅で寝ることはなく、文化的に眠る場所を確保することができたのです。

滋賀、琵琶湖大橋の灯り。

「今から滋賀でメシ……」「はっ?」なんで京都の人が滋賀でメシなんでしょう。お邪魔しようと思っていた人のケータイデンワに連絡をしたところ、滋賀にいることが判明しました。僕も滋賀県、彦根でした。

滋賀といえば琵琶湖です。他に何があるのか……、やっぱりよく分かりません。とにかく、京都人が滋賀でメシを食うんだから、うまいモンにありつけるに違いないと期待しながら待ち合わせの場所に向かいました。

再会したときは「ムムム……!」でした。ライダーであったはずの人が、タイヤの四つあるモノに乗っていたからです。そんなことがあっていいのでしょうか。いや、断じてよくない、けれども目の前に現れた食事を楽しむことも大切なことです。おいしいものを邪心とともに食べてもよいのでしょうか。いや、断じてよくない、とにかく食事に集中です。花粉症で鼻がつまっていても、うまいものはうまいのです。

「食」は文化です。おいしいものをゆっくり味わって食べる時間というのは、ものすごく大切なことだとあらためて感じさせられました。普段の食生活が貧弱なだけに、時々ありつける幸せにはすぐにメロメロになってしまいます。そこが滋賀であろうが、タイヤが四つあろうが、小さなコトなのです。

この寒さは一体……。

以前、京都ではよくキャンプへ行きました。でも、こんなに寒いときにバイクで山奥へ向かったことはありません。とんでもない寒さでした。

京都人と滋賀でメシを食べた後、「京都の山奥で仲間に会うけど、どうする？」と聞かれました。午後十時くらいだったと思います。眠さや寒さと天秤にかけてちょっと考えましたが、やっぱり仲間を選びました。そんなに会えるモンじゃないですからねぇ……。

さて、山道を走っていると道路の脇に光る電光掲示板があります。「ただ今の気温一度」……おお、そりゃ寒いわけです。んっ？何？「〇度」……「マイナス一度」……「マイナス二度」……と順調に気温が下がっていきます。結局、落ち着いたのが「マイナス三度」……勘弁してください。そんな真冬の装備はしていません。バイクは寒いんです。

風を感じて走ることができるのが二輪車のすばらしさです。決して快適なばかりではありません。でも、それがいいんです。風に苦しみ、雨を恨み、ホコリにまみれながらも自分の道をひた走るんです。自分が生きていることを実感できる乗り物が二輪車だと思います。快適なことがあふれる世の中で、少しの不便さが自分を高めてくれるような気がするんです。

ラー油との闘い。

餃子にはラー油です。ラー油なしで餃子を食べても、それはワサビなしの寿司、いや、チャーシューなしのチャーシュー麺を食べているようなモンです。そんなことがあってはいけないのです。

というわけで、ラー油を小皿に入れようとしました。あれっ？ラー油はどこだ？……という状態になります。僕の感覚では小さなビンに入っているものを、耳掻きみたいな小さなスプーンですくってチョイチョイと移すのがラー油の取り方でした。ところが、そのようなものがない……焦りました。目を移すと、どうやらシャンプーの入れ物のようなヤツが口元を赤くして待っています。よし、コイツか……とばかりに手を伸ばしました。

ドパッ……ヤツは勢いよくラー油を噴き出しました。僕の手を赤く染め、テーブルの上をドロドロにしてくれました。肝心の小皿には雀の涙ほどの量しか入っていません。ムムム……コイツ挑戦的なヤツだ……などと思いながら手を拭き、今度は慎重にヤツの頭を押さえました。タラリッ……いい感じです。やっと小皿に満足いくようなラー油が準備されました。僕とラー油との熱い闘いは幕を閉じたのです。激しい闘いでした。

やっぱり、ラー油には耳掻きタイプのものが必要です……。

なぜか一番右隅に中央線が……。

待ち合わせをしました。大阪は肥後橋という所です。といっても実はその人、初めて会う人でした。もしかしたらこの先お世話になるかもしれない人、という人でした。えらいこっちゃ、えらいこっちゃと思いながらバイクを走らせました。

僕の友達の中には訳の分からんヤツがたくさんいます。その中でもナンバーワンクラスの訳の分からんヤツが、最近どんどん自分の世界を広げています。自分自身がガシガシ積極的に動くことで自分の可能性をバンバン広げているんです。僕が待ち合わせをした人はその訳の分からんヤツの知り合いでした。僕もヤツに負けずに自分自身の可能性を広げたい一心でその人に会ってみようと思ったんです。

待ち合わせ場所の近くで、変な空間に出会いました。六車線くらいある道の、一番端っこに中央線があったんです。何じゃこりゃ……と思いました。中央線は中央になくてもいいんですねぇ。

僕の大きな夢を現実に近づけてくれるかもしれない人との出会いでした。そこで一つのチャンスをもらいました。まだそのチャンスは小さなカケラです。これから、僕がもっと成長しないとチャンスはカケラのまま埋もれそうだし、夢まで消えてしまうかもしれません。でも僕は夢を「自分の」ド真ン中、中央線に据えて堂々とチャレンジする人間になりたいと思います。

「原付を駆るおっさん」の図。

「逆さ蛍」って何だろう……見たまんまでした。蛍はお尻を光らせます。じゃ、人間が光らせるのはどこか……、うちの家系にはいないと思うんですが、世の中にはピカピカと光っている人もいます。久しぶりに会ったその人は、いっそう光り輝いていました。

僕が関西に住んでいる頃、たいそうお世話になった人です。といっても、僕のことですから「ハハー」っとかしこまって接するようなことはしませんでした。それでも、僕なりの敬意を総動員していろいろな話をする、そんな人です。

僕はまだまだ修行中の身で、間違ってもすごい人間ではないんだけれど、でっかい人間になりたいなぁ、という思いだけは持っています。世の中には、誰もが「う～ん」とうなるような正しいことを言ってくれる人がいます。まったく逆の人もいます。正しいことを見極められるようになりたいものです。

ところが、いくら正しいことを言っても「う～ん？」となることがあります。逆に「それって正しいの？」と思いながらも、なぜか納得させられてしまうようなこともあります。ほとんど魔法使いの世界です。

恐るべし「逆さ蛍」……僕、頭は光って欲しくないけど、人間としてはピカピカ輝けるようになりたいと思います。

色とりどりの花のように……。

美しさがテーブルの上で生き生きと共演していました。花とは美しいものです。そして、神秘的だとも思います。花は「物」ではなく息づいているからです。生き物だからこそ、神秘的な美しさを感じるのかもしれません。

「逆さ蛍」の住みかには花があちこちに咲いていました。僕の家とは雰囲気が違います。僕の家には、そこら辺にゴミがコロコロと転がっているくらいのモンです。美しさのカケラもありません。僕は外側から見える所じゃなくて、内側の美しさで勝負ですから……。えっ……？

とにかく、テーブルの上には花が咲いていたんです。それぞれがきれいだったんです。何種類かの花が咲いていました。パッと見たとき、全体としてきれいだと思い、じっくり見てそれぞれ一輪ずつがきれいだ思いました。「みんな同じ」美しさがあり、「みんな違う」美しさがありました。

「みんな同じ」、「みんな違う」……どっちが正しいんだろう、と悩みます。で、僕はどっちも間違いだと思うしかなくなります。そして、どっちも合っているんだと思い直します。最後に、どっちか一つには決められない、と自分に言い聞かせるのです。一つにはできない答えがそこにあるからこそ、花は美しいんじゃないか……なんて思うのです。人間もですけど……。

テラスでお食事など、いかが？

テラスがありました。妙におしゃれですよねぇ。「逆さ堂」の住みかとは思えません。この辺がただ者とは違うところなんでしょう。僕らはどうしてもバランスが悪いんです。外側だけ着飾ったり、内側だけで思うだけだったり、という感じでうまくいかないんです。

「逆さ堂」はその名の通り……、そんなにカッコいいモンじゃありません。なにしろ光ってますから……。でも、その光に何かオーラのようなモノが感じられたりします。なんでだろう、と思うんですが、どうやらそれは内と外とのバランスのようでした。

内側は間違いなくすごい存在です。話をしていると、ものすごく学ぶことが多いことを感じます。何というか、グイグイと魂の中に入り込んでくるようなものを感じるんです。痛いところをつかれて、イタタタタ……と思いながらも、それが心地良いから不思議です。

外側は間違いかなぁ、と思うんですが、イイんです。渋いという感じでしょうか。花に囲まれ、コーヒーなんぞ飲んでいると、「イイ」と思わされてしまうんです。これがカッコよさなんでしょう。ちょっとくやしいですねぇ……。でも、寒くてテラスでコーヒーという訳にはいきませんでした。

さらば関西。

道を走っていくと琵琶湖が見えます。西へ向かっているときは「いらっしゃい」、東へ向かっているときは「さようなら」という顔をしているような気がします。

人の中には様々な風景が生きているように思います。僕にとって関西の風景は、すてきな時を過ごしたユートピアとでもいうかのように心の中に残っています。ものすごく思いの深い時間を過ごした場所であり、ものすごく濃い時間の過ごし方をした場所だからです。

これから何回訪れても、たぶん同じような感覚を抱くと思います。その時その時で印象は違うことがあっても、マイナスイメージをもつことはないような気がするんです。

思い出の風景はどんどん増えていっています。自分にとって大切だと思える場所です。でも、それを思うとき、頭に浮かぶのは風景をバックにした、人の姿です。人との出会いとは限りなく奇跡的なものだと思えます。だからこそ人は風景と一体になり、僕らの心に住み着くのかもしれません。

僕らは数多くの人々に支えられて生きています。生きているというよりは生かされていると考えた方がすっきりするような感じもします。多くの出会いという奇跡のおかげです。そんな奇跡のひとつ、関西……また会う日まで、さようなら。

放浪日記

メキシコ編

90°W
プリンスオブウェールズ島
ヴィクトリア島
アムンゼン湾
プーシア半島
ブローダー半島
バフィン島
メルヴィル半島
グレートベア湖
北北東
フォックス湾
サウサンプトン島
イカルイト
イエローナイフ
放浪日記
グレートスレーヴ湖
ハドソン海峡
ハドソン湾
アサバスカ湖
カナダ
メキシコ編
ベルチャー諸島
ラブラドル半島
エドモントン
ウィニペグ湖
カルガリー
マニトバ湖
ウィニペグ
ヴァンクーヴァー
北東
シアトル
スペリオル湖
ヒューロン湖
セントローレンス川
ポートランド
ミネアポリス
ミシガン湖
オタワ
モントリオール
トロント
オンタリオ湖
アメリカ合衆国
デトロイト
エリー湖
ボストン
シカゴ
グレートソルト湖
ソルトレークシティ
デンヴァー
インディアナポリス
ニューヨーク
カンザスシティ
フィラデルフィア
フランシスコ
ラスヴェガス
セントルイス
ナッシュヴィル
ワシントン
オクラホマシティ
メンフィス
ロサンゼルス
サンディエゴ
フェニックス
ダラス
アトランタ
シウダーフアレス
サンアントニオ
ヒューストン
ニューオーリンズ
オーランド
フロリダ半島
モンテレイ
メキシコ湾
マイアミ
ナッソー
バハマ
西インド諸
メキシコ
ハバナ
キューバ
グアダラハラ
レオン
ハイチ
ドミニカ共和
ユカタン半島
ポルトープランス
サントドミンゴ
メキシコシティ
プエブラ
ベリーズ
レビジャヒヘド諸島
[メキシコ]
ベルモパン
キングストン
グアテマラ
ホンジュラス
ジャマイカ
グアテマラシティ
テグシガルパ
カリブ海
グレナダ
サンサルバドル
マナグア
セントジョージス
エルサルバドル
ニカラグア
サンホセ
パナマ
カラカス
コスタリカ
パナマシティ
ベネズエラ
メデジン
ボゴタ
カリ
コロンビア
赤道
ガラパゴス諸島
エクアドル
キト

メキシコが呼んでいる……。

JOSE RAUL SAAVEDRA SHIMIZU
APDO POSTAL NO 24
TUXTLA GUTIERREZ CHIAPAS
FAX 296-16 28
TEL 296-16 22
0196 25 03 (01)
ALEJANDRA SAAVEDRA
AK ELRIEGO ANDADOR 8
DUPLEX, INT. VILLA COAPATLALPAN
MEXICO

じいちゃんの兄弟の子どもの子どもがメキシコで暮らしている、という話がありました。僕の親戚になります。……はっきりいってそんなのアカの他人です。だけど、大義名分としては充分な事実です。「メキシコの親戚に会いに行く」ために僕はヒコーキに乗りました。

僕のイメージの中で中南米というのはものすごく恐ろしい所でした。危険だという話は聞かされていて、ひったくりをされたり、強盗に出会ってしまったり……と、物騒な感じです。頭の中では、ヒコーキを降りた直後に口の中へ拳銃を突きつけられた自分が両手を上げていました。

それでも僕はメキシコを目指します。なんといっても「親戚に会いに行く」という重要な使命を帯びているからです。日本国内で、よく連絡を取り合っているというおじさんを訪ねて住所や電話番号を聞き、あれこれと教えてもらって準備は完璧です。あとは僕がメキシコへ向かうだけでした。

メキシコの宿を舞台とした本を読んで想像をふくらませ、ガイドブックを読んで都市情報をゲットし……、いつもの僕の旅と比べたら異常なまでの準備状況です。普段、行き当たりばったりの僕がここまでやっていれば、何が起きても大丈夫です。大丈夫です、大丈夫です……、自分に言い聞かせてました……。

パスさえ手に入れればこっちのモノ。

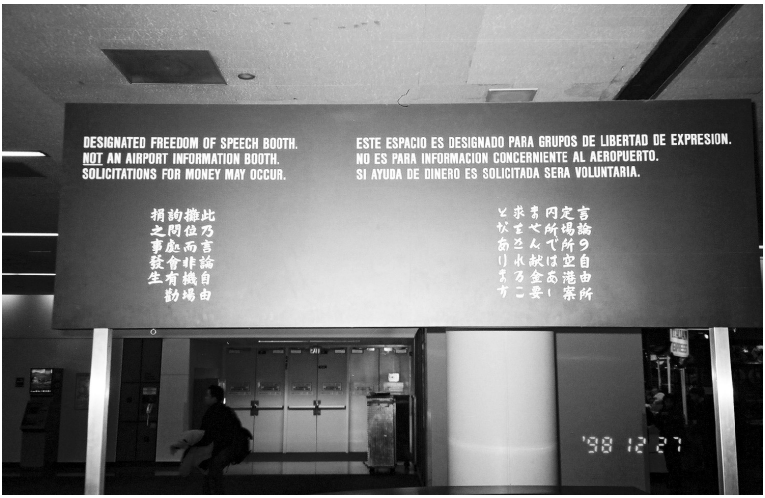
スタートの時……どんなに簡単なことでも、どんなに大変なことでも、必ず始まりというものがあります。何回もやり直しをしていたら、緊張感のかけらもありません。大相撲だって、「待ったなし」という状況で軍配が返るわけです。

一日の始まりは、普通、日の出と共にやってきます。それで、太陽が沈めばその一日は終わり、次に日の出が見られるときは、もう、翌朝になっているはずです。ところが、僕はこの日、一日に二回も朝を迎えてしまいました。確かに、その日の太陽は沈んだはずなのに……。

犯人は日付変更線です。僕はメキシコへ向かうために、この、目に見えないけれども、そこにある、という一本の線を越えて空を飛んでいました。その線を越えた瞬間に、僕はタイムスリップをして一日前の日に登場してしまったんです。一日分、僕は人生を得した気分でした。

スタートを二度味わうことができるって、いいことなんでしょうか。精一杯の力を注いで最初の瞬間を迎えるのには、それが一度しかない方が、絶対に大きな価値があるように思います。静けさの中、ステージ上から第一声がサァ〜っと観客に伝わっていく歌声なんか、最高です。やっぱり、最初が肝心……スタートはじっくり、一度だけ味わうのが貴重な収穫だと思います。

言葉の氾濫。



英語は習いました。中国語も少し習いました。これはスペイン語？……話せません。聞けません。書けません。そして、読めません。

目的地はメキシコ、使われている言葉はスペイン語です。ガイドブックを見て、少しだけ勉強をしました。噂によると、メキシコの人たちは英語を話すことができない、ということだったので、これはマズイと焦っていました。ま、僕は英語もあんまり分からないから、関係ないんですけどね。

さて、メキシコへ向かう途中、アメリカでヒコーキの乗り換えがありました。そこで、出会ったのが不思議な看板です。日本語が書かれていたから、ちょっと安心しつつ読んでみたけど、意味がよく分かりませんでした。「あれ？ついに日本語も使えなくなってしまったか」と、日本人としての誇りを失いかけました。空港とは、いろんな人たちが入り交じり、いろんな言葉が乱れ飛んでいる所です。混沌とした空間です。

どんな言葉でも、どんな表現方法であっても一番大切なのは相手に何かが伝わることです。細かいことは気にしません。多少、ずれた部分があったって、心は伝わります。伝える心さえしっかりしていれば、伝わります。記録より記憶……心に残るのは人の思いだと、僕は思います。

石鹸の包み紙をお土産に……。

「ゲット！」……実は、メキシコに着いたとき、ものすごく不安だった僕は、ヒコーキの中で、日本人を発見して仲間に入れてもらっていました。何となくだけれども、僕と同じ空気を漂わせている二人組でした。

僕の中での中南米の国々というイメージは、とにかく怖いというものでした。いきなり強盗にあったりするらしいとか何とかイヤな噂をよく聞いていたからです。会いたくない人たちです。一人じゃどうなるか分からない、仲間と一緒が一番です。日本語ができることが条件ですけど……。

三人、連れだって空港からメキシコシティにある宿へと向かいました。目指した宿は日本人がたくさん泊まっているというペンション・アミーゴという所です。収容所のような鉄の扉の向こうに宿があり、そこの人と話をします。……満員でした。

紹介されたのはペンシルバニア・ホテルという宿です。その宿は……ラブホテルでした……。ラブホテルへ三人の男が一緒に入っていく光景を、もし自分が見たとしたら……、想像しただけでイヤな世界です……。違う、誤解だ、僕らは出会ったばかりで、宿がないだけなんだ……いやはや、大変なことです。

ホテルの中、とりあえず荷物を下ろし、テレビなんかをつけてみます。わぁお！、画面いっぱい肌色……さすがです。

ピラミッドを登る米粒……。

頂点を極めるということは、途方もないことです。一番高い所には誰もがたどり着けるわけじゃありません。ほんのひとにぎりの人しかその思いを味わうことができないんです。

高い所、でかい物といえばピラミッド、そして、ピラミッドといえばエジプトという発想ですが、実は、メキシコに世界で三番目にでかいというピラミッドがあります。へぇ〜、と意外な感じがしました。しかもエッサホイサと登ることができるというから、うれしくなってしまいます。

実際に登っている人の姿を遠くから見ると、ほとんど米粒です。そのピラミッドの大きさを感じないわけにはいきません。ピラミッドの大きさを感じたのは、遠くから人間を見たときです。近くで見たってただの壁面です。人間の大きさと比べてこそ、その大きさが明らかになるんだと思います。

人間と比べて遥かにでかいピラミッド、そんなモンを作り上げたのは、ブルドーザもクレーンもないような昔のことです。きっと多くの犠牲者が出たことと思います。僕はどうしても、そこを考えてしまいます。何か一つ、でかいことを成し遂げることの裏には、必ず何かが流れているんです。もし、何か頂点を極めたときでも、僕はその裏側まで見極める眼を持っていたいと思うんです。

いつでもどこでも記念写真。

「One day one thing」……旅先では時間の流れ方が違います。一日に一つのことをすれば妙な充実感を得られます。一日にそんな多くのことができるわけないんです。こんな考え方、おかしいのかなぁ……、のんびり行きましょうよ……。

一人だったらたぶんボ〜っと最初の一日を過ごしていたと思います。でも、仲間は違いました。テオティワカンの遺跡へ行くというので、「ラッキー」……ぐらいの気持ちでくっついていきました。「くっつき虫状態」は、楽なんです。

テオティワカンはメキシコ国内でも最大級の遺跡なので、僕らのような外国人も含めてたくさんの観光客がいました。どこでも同じなんだと妙な感心の仕方をしながら、観光客ウォッチングをしていました。

と、ある観光客が近寄ってきます。「ムムム、何事?」と思ったら「シャッターを押してくれ」とのことでした。僕はドキドキしてしまいましたが、「オー、イエス」と気軽に応じてくれる仲間のおかげで助かりました。三人セットで行動していてよかったと感じてしまいました。

人との出会いは、まさに奇跡です。ヒコーキの中で発見した日本人……、他の場所だったら「へぇ」でおしまいです。たくさんの出会いを自分に生かしていきたいと思います。

ピラミッドパワー！

カシャッ……ガコガコ……シ～ン……。

僕は青くなりました。

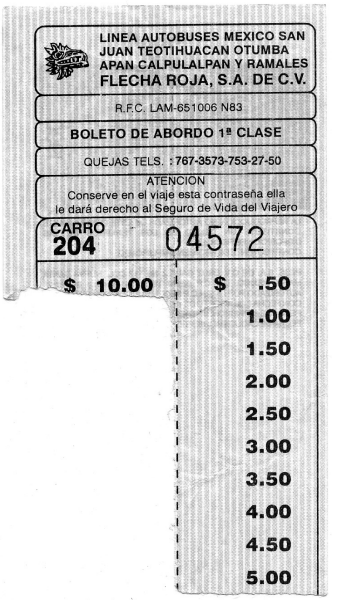
ピラミッドのてっぺんには観光客が思い思いの過ごし方をしています。のどかなモンです。僕らも観光客の一部として「おお、これがピラミッドかぁ」という態度で過ごしていました。

ん？……そこに、座り込んでいる皆さん、何をしているんですか。それぞれ手をつなぎ、輪になっています。よく見たら、こっちにもいるし、……あっちは大人数の団体です。真剣な顔つきで手をつなぎ、近寄ってはいけないような雰囲気さえ感じられます。

これぞピラミッドパワーなんでしょう。科学雑誌なんかに載っていたんだったか……、ピラミッドの形をした、いわゆる四角錐の空間の中に卵を置いておいたら、ヒナが他のものよりも早く殻を破って出てきた……なんて現象を紹介していました。

「ピラミッドのてっぺんだったら、そのパワーも格段に高くなります。それを感じる人間がたくさんいたら、さらにパワーが倍増します。すごいことですよ、これは！」……なんて、これっぽっちも思っていない僕は、この集団を写真に撮りました。その直後にカメラは動かなくなりました。

ピラミッドパワーをバカにしてはいけません……。



切れっ端？

ザクザク……小さな紙は切り取られていきました。切り取られた部分に未練がない、といったらウソになります。バスの乗車です。

日本でバスに乗ったとき「整理券をお取り下さい」などというアナウンスが流れて、それぞれのお客さんが小さな紙切れを取り、電光掲示と見比べた上で料金を払います。ああ、僕はこのバスに信頼されているんだ……と感動の乗車です。ごまかそうとしたらいくらでもごまかせてしまうシステムでしょう。

ごまかしなんか絶対に許さない……という決意を感じたような気がします。料金は先払いで、そこで受け取る紙は、これだけのお金を払ったよ……ということを見事に表しています。並んだ数字の中から支払った分を残して切り取ってしまうんだから、ごまかしの方法がありません。ペンで書いても書き直しができるけど、切り取られた紙を再生させることは不可能です。

僕は料金をごまかしたいわけじゃありません。でも、ここまでしっかり管理していれば間違いないな、と感心したんです。反面で、お客さん一人一人を信頼しているような日本のシステムのすごさも感じます。日本人はえらい！といえるのかもしれません。この信頼を裏切るような、アホな日本人にならないように気をつけて生きていきたいと思います。

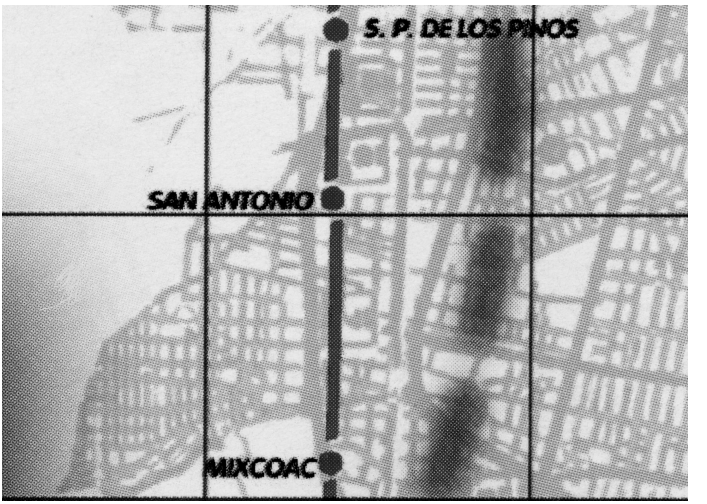
ペンション・アミーゴとは……。

過酷なトレーニングが行われているというわけでもないと思います。頑丈な扉にしきられたその敷地内に、プロレスラーがいるんだといわれていました。メキシコシティの一角、ペンション・アミーゴという場所です。

別に恐ろしい所ではありません。日本人がたくさん泊まる宿、というだけです。だから、日本出身のプロレスラーが住み着いていても不思議なことはありません。いろんな人が訪れ、いろんな時間を過ごしているのが、宿屋というモンです。

初日、三人で訪ねて満員のペンション・アミーゴだったけど、仲間二人と別れて一人旅にもどった僕はそこで寝場所を確保することができました。様々な噂を聞いているだけに、興味津々です。同じ部屋には元チャリダーで南米へ行く予定の人、シベリア鉄道を使って八ヶ月旅をしていた人、ラジオ講座など独学で学んだスペイン語ペラペラの人……見事な人たちでした。

日常生活の中でいろんな種類の人間に会うという機会はそんなにたくさんありません。むしろ、同じような種類の人間と同じような毎日を繰り返しています。それが、ペンション・アミーゴでは一度にドカドカいろんな人が登場するんです。旅先では多くの刺激が待っています。自分を高めるか低めるか……いずれにしても、出会いは自分に変化を与えてくれます。



この辺りのはず……。

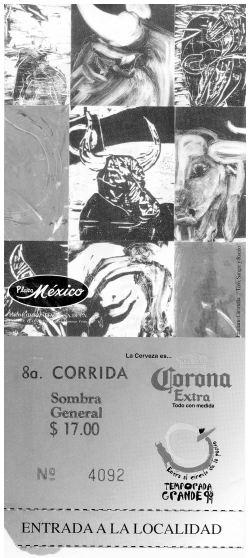
「……プラザ・デ・メヒコ……プラザ・デ・メヒコ……」と、呪文のように唱えながらフラフラと歩き回ります。地下鉄七号線、サン・アントニオ駅から徒歩十分程度のはずなのに、なぜか、僕は長い間さまよい続けていました。

目的は闘牛を見ることです。スペイン人がドドッと入り込んでから、闘牛の文化も一緒にメキシコへ伝えられました。今ではメキシコ人の娯楽として確固たる地位を築き上げています。その闘牛を見るために、僕は会場である「プラザ・デ・メヒコ」を探していたんです。

闘牛の歴史なんて、僕は知りません。とにかく、牛と人間の戦いが行われ、観衆が歓声を上げながら興奮するものなんだ、という単純な基礎知識があるくらいのモンです。見ればきっと、その良さが分かるんだろうと思っていました。何といっても、命がけの対決です。その緊張感や迫力は何モノにも代えられないはずです。自分が命をかけて臨む機会って、そうそう滅多にあるモンじゃない……、それを見られるんだから……と、気が気ではありませんでした。

疲れた足で、やっと「プラザ・デ・メヒコ」へたどり着きました。大きな大きな闘牛場でした。牛が遠くに小さく見えます。

教訓「お金をかけて、いい席のチケットを買うべし」……。



ウッシッシ……。

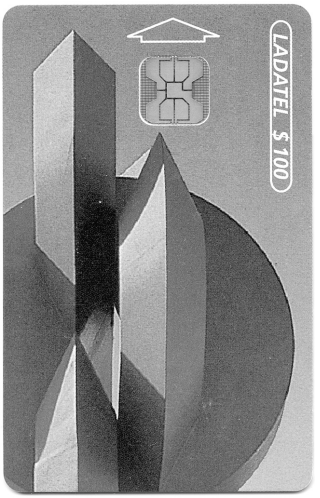
ぐぉ〜……、気がついたら居眠りをしていました。周りの人が見たら、怒るかもしれません。でも、周りにあんまり人がいませんでした。高い高い場所、地面からの距離もそこそこにある場所です。そこの場所代は十七ペソです。

眼下、遠くの方で牛が走っています。人がそれをかわしています。大体は何をやっているのか分かります、大体は……。でも、全然つかめないんです。伝わらないんです。前の日の睡眠時間が少なかったことも悪いんです。そりゃ、二時間しか眠っていないようなら、フラフラします。迷子になったのも悪いんです。そりゃ、疲れます。下調べをしっかりしていなかったことも悪いんです。そりゃ、眠くもなります。

牛と人との命がけの決闘、その迫力が闘牛の醍醐味なんだと思います。命がかかっているんだから真剣なのは当たり前です。周りの人が盛り上がり、興奮するのも理解できます。それを他の国から来た文化も全然違う人間が、すぐに同じような見方をしようというのがそもそもの間違いなんです。文化などという何百年もかけて培われたものを軽々しく扱うなんて失礼極まりないことなんです。

「コラ、そこの日本人、メキシコの文化を尊重しなさい！分かっていますか！」

……分かってないからお金をケチるんですよね……。



テレフォンカード。

大義名分は「親戚に会いに行く」です。何はともあれアクションを起こさなければいけません。

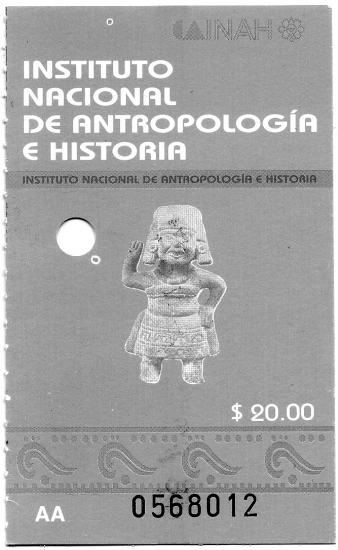
「○×△◇★◎!」……ハイ?……「ごめんなさい。よく分からないので、本当にごめんなさい。」……僕はスペイン語を話せないんです。電話でペラペラ言われても、分かるわけがありません。お手上げです。

日本で聞いていた電話番号のお宅へ挑戦してみました。すると、何となくの日本語と英語とスペイン語の混ざった言葉で意思疎通が出来ました。僕が会おうとしていた人が、そこにはいないということが分かったんです。じゃ、どこへ連絡をすればいいのか……ということで、また、電話番号を聞きました。

嫌な予感はしていたんです。……的中です。全く分かりません。多分、相手はもっと困ったと思います。いきなり電話がかかってきたかと思えば、何を言っているのかも分からない……、いたずら電話だと思ったかもしれません。

これが電話じゃなければ何とかなったかもしれないんです。直接会って話をしていたら、ジェスチャーもフル活用しながら、こちらの思いが伝わることも多いからです。僕は電話がキライです。ますますキライになりました。

結果……、僕の大義名分は崩れ去りました。



入場券。

「お前に会いたかったんだぁ～！」というモノたちがいます。いくつかの出会いがあるわけですが、オルメカ文明の巨石人頭像も、「会いたかった度」の高いモノでした。

ラ・ベンタという所、その辺りで発見されたというんですが、高さが一メートル以上、重さが八トンくらいある石頭なんです。頭だけなんです。そんなデカ頭がその辺にゴロ～ンと転がっていたら、どうでしょう。ステキじゃないですか！草むらの中にゴロ～ン、ですよ。

……と、思いながら、ラ・ベンタ方面へ行くことはできませんでした……。

で、国立人類学博物館へと足を運ぶんです。人類学の博物館ですから、僕らがサルだった頃の歴史までよく分かるように展示されています。そして、そこで、僕はデカ頭くんと出会うことができました。本物じゃないかもしれません。でも、僕はうれしかったんです。独特の表情をして、こちらを見つめています。デカ頭くんは黙って、それでも雄弁に語りかけてきました。

博物館には他にも「太陽の石」と呼ばれる暦石があったり、生け贄の心臓を祀ったといわれる石像があったり、すごいんです。すごいけど、やっぱり僕にはデカ頭くんが一番でした。デカ頭くん……、いつかまた会いましょう。

名刺。

「サムラ〜イ！」などと言って戦いが始まりました。メキシコシティにある公園の中です。手には刀、頭にはチョンマゲ、腰にはふんどしという姿です。異常なほどの緊張感でした。

彼は長細い風船をふくらませて、いろんな物を生み出しています。犬がいました。うさぎがいました。そして、刀が生まれ、チョンマゲが生まれていったんです。その時、僕は彼を取り巻く集団の中にいました。ワイワイガヤガヤ、次は何が起こるのか、と楽しみにする野次馬です。

彼の名はピエロ、人を楽しませるのが仕事です。たとえ、言葉が分からなくても、人は彼を見て笑顔をもらいます。ピエロは自分が偉くなることをせず、自分が失敗をすることで人を笑わせます。身を切って、人を幸せにします。痛々しい仕事かもしれません。まさに「道化師」です。

この時、僕もピエロになりました。彼が僕の方を向いて手招きをしたんです。頭には風船のチョンマゲをし、手には風船刀を持ちます。彼と息を合わせ、人を喜ばせるためのサムライの戦いです。失敗を見せ、我が身を切ることで人々は笑いました。

演技を終え、彼は小銭を入れてもらうために帽子を出しました。僕は靴を出しました。僕の靴にも一人のおばさんが小銭をいれてくれました。人を喜ばせることができました。

プロレスのちらし。

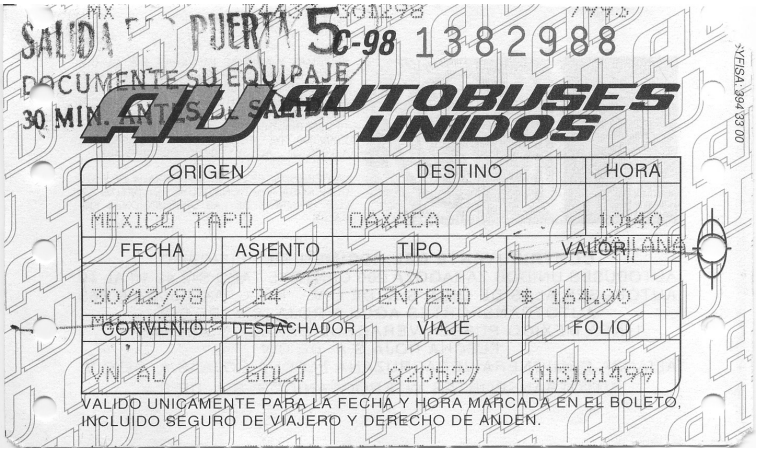
「一、二、三……ダァァァ！」なんて言いながら拳を天に突き上げてみます。いい気分です。垂直落下のブレーンバスターなんかが決まった様子を見ていると、かなりスカッとした気分になります。プロレスは最高のエンターテイメントです。

メキシコのプロレスはジュニア級の雰囲気が強くて、技も多彩です。だから、見ていても非常に変化があり、飽きることがありません。僕は少ない滞在日数の中で、二回、小さなスタジアムに足を運びました。

メキシコでプロレスは国民生活の中にかなり浸透しています。一般人だと思っていても、夜はリングに立っている、という人もいるようです。昼間は教会の牧師さん、夜はレスラーという人もいると聞きました。すごいギャップです。でも、それにはワケが隠されているようです。

教会では天涯孤独の子どもたちを預かったりします。ところが彼らを養う費用が足りないから、レスラーとして働き、お金の足しにするというのです。きっと得意技には「アーメンスープレックス」なんて名前をつけるんでしょう……。

メキシコに覆面レスラーが多いのもそんなことが影響しているみたいです。スタジアムの前でもお土産用のマスクがたくさん売られていました。もちろん買ってきましたよ。


SALIDA PUERTA 5 C-98 1382988
DOCUMENTE SU EQUIPAJE
30 MIN. ANTES DEL SALIDA
AU AUTOBUSES UNIDOS
ORIGEN | DESTINO | HORA
MEXICO TAPO | OAXACA | 10:40
FECHA | ASIENTO | TIPO | VALOR
30/12/98 | 24 | ENTERO | $ 164.00
CONVENIO | DESPACHADOR | VIAJE | FOLIO
VN AU | BOLJ | 020527 | 013101499
VALIDO UNICAMENTE PARA LA FECHA Y HORA MARCADA EN EL BOLETO.
INCLUIDO SEGURO DE VIAJERO Y DERECHO DE ANDEN.

バスのチケット、使用済み。

陸路での移動ほど、旅しているという実感が得られることはありません。移動手段にはいくつかあります。僕自身のことで考えたら、多いのはチャリンコであり、バイクだったりします。日本国外へ脱出したときはバス移動が多いような気がします。

国によって交通機関の発達ぶりがそれぞれ違うので、それぞれの楽しみがあります。メキシコシティにはタクシーがたくさん走っていました。そこまでは「だから何だ！」って世界ですけど、そのタクシーのほとんどがフォルクスワーゲンのビートルだったんです。僕、あの形が好きなんです。モデルチェンジした、ニュー・ビートルも好きですけど、やっぱり昔ながらの「かぶと虫」って雰囲気は他に替えられないように思います。

さて、「かぶと虫」であふれるメキシコシティから、僕はオアハカという町へと移動します。オアハカは地方都市としては有名な都市なので、「オアハカ、オアハカ！」と叫んでいれば誰かが「あのバスだよ」などと何となく教えてくれます。何となく分かるというのがすごいことなんです。文字だけだったら分からないことが、実際に人間という相手がいると、分かってしまうんです。人間も捨てたモンじゃありません。

オアハカという町、ヨーロッパ的な町並みを持つオシャレな町でした。だから？……僕には合いませんでした……。

大みそかの熱気。

シャッターチャンス……と思って構えてみたところで、写真を撮ることができません。何といっても恐るべしピラミッドパワーです。カメラは復活していません。

その町では音楽隊がメロディを奏で、ピエロが観客を楽しませ、人々は笑顔で大騒ぎしていました。グァナファトという町の大みそかです。ラテンの血がたぎっているような、そんな空気に包まれていました。目の前の人だかり、その背中越しの向こう側を写真として切り取りたい、と思ったんですが……。

こんな時には図々しく、人に頼るのが一番です。ちょうどそこには……、ラッキ〜……、日本人旅行者がいました。「はぁ、へぇ！」、と旅の話をしながら、僕のカメラが動かなくなっていることをアピールしました。そして、その夜の光景を撮らせてもらいました。

日本人というのは親切な人たちだと思います。安心して話をすることができるように思うんです。同じ国の人だから、ってこともありますが、それだけじゃありません。お互いにということですが、もしかしたら僕がカメラを持って逃げ出すことだってあり得るわけですから……。

日本へ帰り着いてからですが、その人は他にも何枚か写真を送ってくれました。本当にありがたいことです。

強烈なインパクト。

いつでもどこでも、大体の物をおいしく食べられるのが僕の取り柄のうちの一つです。おなかがあんまり空いていなくても、食べ物が目の前にあったら、いつの間にかそれがなくなっています。なぜでしょう、不思議な現象です。

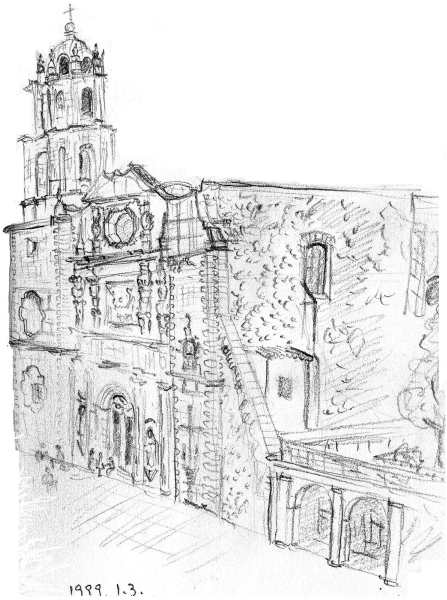
そんな僕が食欲不振に陥りました。

その事態の発生現場はグァナファト、ミイラ博物館です。噂に聞いていました。「ほう、おもしろい」……とばかりに乗り込みます。入ってすぐに、圧倒されました。シャレにならん数のミイラたちが待っていたんです。だてに墓地が隣にあるわけじゃないんですね。良質のミイラが次々に供給されていました。

僕が、一番まいってしまったのは、小さな小さな子どものミイラです。片手に乗ってしまうほどの小さな体が安置されていました。もうダメです。

日頃、命だとか死だとか、考え続けているわけじゃありません。もっと深く考えるべきなのかもしれませんが、生活に追われて、それどころじゃないです。博物館の建物に入ったときも、その延長線……、「人」が「物」にしか見えない状態でした。それが、あの体を見たとき、僕の目は人の死をとらえました。

その子に何があったか、知りません。でも、不幸なことです。僕は、僕より若い命が先に逝ってしまうことを望みません。



ペンション・アミーゴ、それがメキシコシティでの僕の宿です。日本にいるときから噂を聞いていた宿でした。大都市の片隅にある、日本人がたまる宿として有名だったんです。

さて、メキシコに限らず、地方都市を巡ってから大都市を見たら、新鮮さが感じられないことがあります。大都市であるメキシコシティへ帰ってきたとき、僕はペンション・アミーゴへは戻らず、サン・フェルナンド館という宿へ行ってみました。幸せなことに、その宿には屋上があって、僕はそこから景色を眺めました。

新鮮さを感じられない僕の目に、メキシコシティの街並みが映ります。スペイン人がたくさん入ってきたことが分かる建物がそびえていました。中世ヨーロッパの街はきっとこんな風だったんだろうと、自分勝手に想像したりします。

新鮮さを感じられないまま、絵を描き始めました。描いていると、だんだんその世界へ引き込まれていきます。丁寧に描こうと思うから、細かな所までじっくりと建物を見ます。じっくり見ていると、そこから新鮮さがにじみ出てきます。

同じものを見ているはずでも、全然違って見えてくることは他にもあります。ふし穴じゃない眼を持って、いつでも新鮮な感覚で物事を感じられる人間になりたいと思います。

インチキ紳士。

スペイン語はやっぱり分かりません。でも、少しだけ教えてもらいました。僕は意気揚々と床屋へと向かいます。

チャキチャキとはさみが進みます。なかなか、ベテランの味を感じさせるさばき方です。髪を切られる方としても、心地よさを感じました。とにかく、僕は黙って座っていればいいんです。床屋さんを信頼して、できあがるのを待ちました。

どうやらできあがったみたいです。鏡の中の自分は……、なんか、ちょっと、怪しげな感じです。なんでだろう……。

問題点一、ワックスバリバリで固められていました。風が吹いてもオールバック気味の髪の毛が微動だにしません。

問題点二、無精ヒゲだったはずが、口ヒゲだけ残されていました。古典的な紳士の雰囲気が漂っています。

総合的に見て、僕には全く似合わない完成体だったわけです。自分が貧乏旅行人であるにも関わらず、妙にオシャレっぽい雰囲気を醸し出すような顔つきになっていました。首から上だけが自分勝手に自己主張をしているようなモンです。分相応という言葉があります。僕には僕のレベルがあります。まぁ、高いレベルの姿に自分が追いつけば済むことなんですけどね。

さて、この時僕が床屋で行くのに覚えたスペイン語は……「あなたの好きなようにしてください」でした……。

お楽しみ。

TO BEGIN

Your selected entree will be served with fruit and breakfast breads.

MAIN COURSE

United Airlines is pleased to feature selected entrees from Chefs Mary Sue Milliken and Susan Feniger. Also known to TV viewers as the "Too Hot Tamales," they are co-owners of Santa Monica's Border Grill restaurant.

Green chicken chilaquiles casserole
Accompanied by sour cream and tomatillo salsa
Border Grill

Crêpes with apple and raisin compote
Presented with grilled Canadian bacon

BEVERAGES

STARBUCKS® coffee, decaffeinated coffee and tea are available throughout the flight.

United is proud to operate this flight in cooperation with **MEXICANA**
We apologize if occasionally your choice is not available.

PARA EMPEZAR

Su plato será servido con fruta y panes.

PLATOS PRINCIPALES

United Airlines se complace en presentar creaciones de las Chefs Mary Sue Milliken y Susan Feniger. Conocidas por su programa de TV «Too Hot Tamales», son copropietarias del restaurante Border Grill en Santa Mónica.

Cacerola de chilaquiles verdes con pollo
Acompañada con salsa de tomatillo y crema agria
Border Grill

Crepas con compota de manzana y pasas
Servidas con tocino canadiense a la parrilla

BEBIDAS

Durante el vuelo, tenemos a su disposición café **STARBUCKS**®, café descafeinado y té.

United se complace en operar este vuelo conjuntamente con **MEXICANA**
Nos disculpamos si ocasionalmente su selección no está disponible.

SJO-MEX-MEX-SFO/UA (B/4)
ECONOMY 331Y308-2 12/98

土産を買いました。身なりも整えました。散髪もして、すっきりです。これでヒコーキに乗っても怪しまれません。旅先で、僕は普段の二割増しくらいで汚くなっていますから、何かと小細工をしないと堂々とヒコーキへ乗る自信がありません。

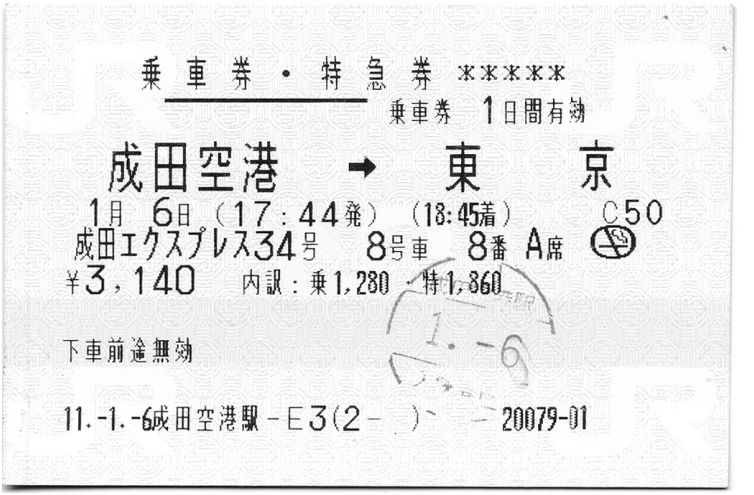
それでも、僕は日本人です。日本へ帰っていく人なんです。日本へ帰るヒコーキの中で、メキシコの名残を感じながら、それでも少しずつ日本へ近付いていきます。メキシコの名残……、スペイン語です。ブロイラー状態のヒコーキで、数少ない楽しみは機内食です。その機内食の案内がスペイン語で書いてあったりしました。ああ、ヒコーキの中にはまだメキシコが残っていました。それでも少しずつ日本へ近付いていきます。

食は文化です。メキシコでは毎日タコスばっかり食べていました。屋台で指さしながら、あれとこれとそれを……とリクエストしながら、自分好みのタコスを注文し、周りのメキシコ人と一緒にハフハフいいながら味わっていたんです。味そのものもそうだけど、その空気を味わっていたような気もします。

楽しみな機内食、ほんの少し、スペイン語という調味料が隠し味になって味わいを深めていました。でも、その空気に味はありません。「メキシコ味」の空気は薄くなっていきました。

ヒコーキは僕を乗せて少しずつ日本へ近付いていきます。

日本。



ピヨピヨピヨ……、どこかで携帯電話が鳴っていました。この時、僕の中で感じられた「日本」でした。

メキシコのバスの中、ガサガサとした物音、ワイワイとしたしゃべり声、モウモウとした埃っぽさ……、何者かは分からないけど、とにかく何かが生きていることが感じられました。乗り物自体が息づいているような、そんなうねりでした。

列車の中で僕は感じました。また一つの旅が終わっていくこと……。どんな瞬間に旅の終わりを実感するのか、それはその時々によって違います。メキシコの旅が終わったことを強く感じさせたのが携帯電話の音だったんです。うねりを感じた、メキシコでの時間は過ぎ去っていきました。

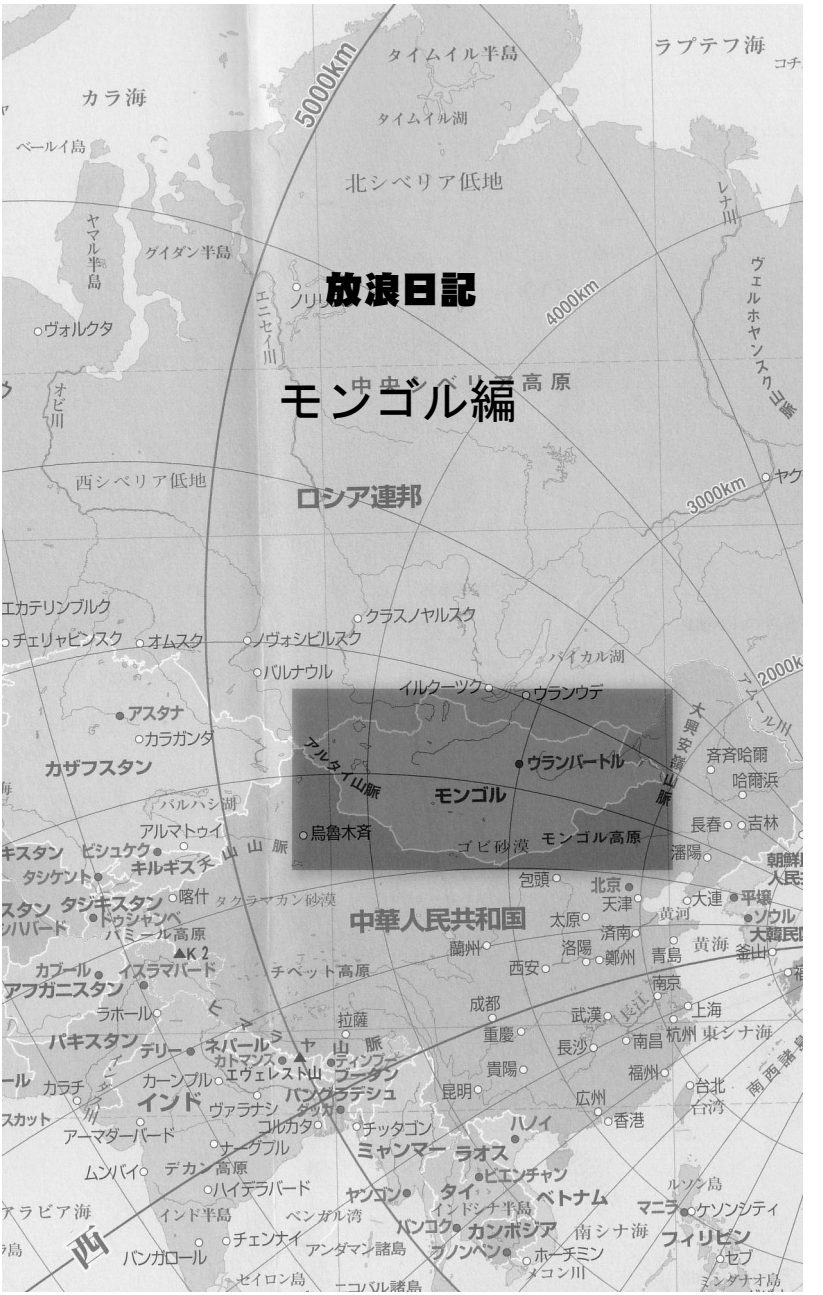
楽しい時間はあっという間に過ぎ去ります。たとえば、学校という所で、一学期という時間はあっという間に過ぎ去っていくように思います。熱さの中、いろいろな行事にあふれて、「おりゃ～」とか「うりゃ～」とか言っているうちに、いつの間にか寒くなってきて、いつの間にか終業式になってしまいます。

旅先での僕の時間もカメラが壊れて「ありゃ～」と言っている間に、そのまま流れ去ってしまいました。写真という記録はほとんどありません。記憶だけが輝いています。

メキシコ……、また会う日まで……、アディオス！

放浪日記

モンゴル編


タイムイル半島
ラプテフ海
カラ海
タイムイル湖
ベーレイ島
北シベリア低地
ヤマル半島
ゲイダン半島
レナ川
ヴェルホヤンスク山脈
ヴォルクタ
エニセイ川
オビ川
中央シベリア高原
5000km
4000km
3000km
2000km
西シベリア低地
ロシア連邦
エカテリンブルク
チェリャビンスク
オムスク
ノヴォシビルスク
クラスノヤルスク
バルナウル
バイカル湖
イルクーツク
ウランウデ
アスタナ
カラガンダ
カザフスタン
アルタイ山脈
ウランバートル
モンゴル
ウブサヌール湖
ハンガイ山脈
斉齊哈爾
哈爾浜
バルハシ湖
アルマトゥイ
ビシュケク
キルギス
タシケント
ウルムチ
烏魯木斉
ゴビ砂漠
モンゴル高原
長春
吉林
瀋陽
タジキスタン
喀什
タクラマカン砂漠
包頭
北京
天津
大連
平壌
ソウル
中華人民共和国
太原
黄河
済南
黄海
釜山
ドゥシャンベ
パミール高原
蘭州
洛陽
鄭州
青島
K2
カブール
イスラマバード
チベット高原
西安
南京
アフガニスタン
ラホール
成都
武漢
上海
拉薩
重慶
長沙
南昌
杭州
東シナ海
パキスタン
デリー
ネパール
カトマンズ
ディンプー
エヴェレスト山
ブータン
貴陽
福州
カラチ
カーンプル
インド
バングラデシュ
昆明
広州
台北
台湾
ヴァラナシ
ダッカ
コルカタ
チッタゴン
香港
ハノイ
アーマダーバード
ナーグプル
ミャンマー
ラオス
ムンバイ
デカン高原
ハイデラバード
ヤンゴン
タイ
ビエンチャン
ベトナム
ルソン島
マニラ
ケソンシティ
アラビア海
インド半島
ベンガル湾
インドシナ半島
バンコク
カンボジア
南シナ海
フィリピン
チェンナイ
アンダマン諸島
プノンペン
ホーチミン
メコン川
セブ
バンガロール
セイロン島
ミンダナオ島
西

遊牧の民の帰るところ「ゲル」。

今まで、一番行きたかった国のひとつがモンゴルでした。何を知っている訳でもない、ただ草原の国ということ、それだけが僕がモンゴルについて知っていたことです。それがあこがれだったんです。そしてついに、そのモンゴルを旅する機会にめぐまれました。八月二十日から八月二十九日までの九泊十日……予定はひとり旅です。

旅立つ前、周囲の人に聞かれます。「何を食べるの？」「どこに泊まるの？」……。でも、答えられません。だって、わからないんだから……。

出発の何日か前に、僕はモンゴルに詳しいというギンちゃんなる人を父親から紹介されました。早速電話をしたところ、そのギンちゃんも同じくらいの期間でモンゴルへ行くと言うではありませんか！おまけに、一緒に行かないか、と誘ってくれたんです。「ラッキー！」、チャンスはとことん生かさなければいけません！かくして、僕はモンゴルでギンちゃんを待つことになったのです。

あこがれの地、モンゴル。そこで何が起きるのか、ドキドキの始まりです。何かが始まるとき、不安と期待が入り交じります。この気持ちをどんなときでも大切にして生きていきたいと僕は思っています。

草原の空港。

僕の場合、モンゴルまでは韓国を経由して行ったのでちょっと時間がかかってしまい、名古屋空港を九時三十分に飛び立ち、首都ウランバートルに着いたのは夜の八時頃でした。今回、自分の家を出るのに、一番気をつけたのは出発する空港のことです。なぜ…？…以前、浜松駅に向かうまで自分が目指す空港を勘違いしていて、結局予約していたヒコーキに乗れなくなってしまった……というアホな経験をしているからです。

モンゴルの空港に着いて驚いたことはそこが草原のど真ん中だったということです。草原の中にいきなり地方のバスターミナルのような建物がポツリ現れるというのがいかにもモンゴルらしいと感じられました。本当に草原に着陸するのかと思うくらいの空港です。

もうひとつ驚いたのは、僕が着いた午後八時くらいの時間でも外が明るかったということです。真夏には十時くらいの時間まで明るいとも言われて、かなりビビりました。おそるべし、モンゴルです。

初めての場所というのは緊張するもの……それからの旅がどうなるのかドキドキ、そんな気持ちを楽しめたらいいなぁと思います。いつでもそこがスタート地点です。その瞬間、瞬間、前に進んでいくのです。

なんか、地方のバスターミナルみたいだ……。

モンゴルに着いた僕は空港のゲートで「Shimizu Keisuke」というプラカードを持ったモンゴル人を発見しました。その人が「ボギー」という人でした。それは一体誰なのか……。

ギンちゃんというモンゴルに詳しい人のことには触れていますが、その人は藤枝で茶工場をやっている人です。で、そこで働いていたモンゴル人がボギーだったんです。だからボギーは日本語もモンゴル語も話すことができるので、僕らにとっては大切な人でした。

そのボギーが日本から来る僕を空港まで出迎えに来てくれていたのです。といっても、僕はボギーの顔を知らなかったし、ボギーも僕のことなんか、わからないんです。ものすごくどきどきしながらモンゴルの第一歩を踏み出したのです。あのアルファベットで書かれた「Shimizu Keisuke」という文字がどれだけうれしかったことか……。

知人というのはありがたいもので、それがいる限りはお世話になろう、というのが僕の考え方です。もちろん迷惑をかけるのがいいわけじゃないですけど、せっかくそこに詳しい人がいるんだったら助けてもらいたいと思いますよね。逆に僕がその立場だったら助けてあげたいと考えると思いますし、喜んで迎えたいと思います。もし、僕が海外赴任したらいらして下さい。

泊めてもらった部屋。

着いたその日はボギーのお兄さんの家に泊めてもらいました。どうも、僕のために部屋を空けてくれたみたいで、なんとも申し訳ない気持ちになってしまいました。

……と、いいながら、僕のことですから、いろんな好奇心が頭をもたげます。チョロチョロとうろついて、小探検をしてきました。この部屋のタンスはごっついヤツで、上にはたくさんの家族の写真が置いてあったり、飾りなんかもきれいについていたので妙に存在感があり、なぜかうれしくなってしまいました。テーブルの上にスケッチブックが置いてあるのがわかるでしょうか。上の部分だけでやめてしまいましたが、ちゃんと絵を描いておきました。

テレビはケーブルテレビか何なのか知らないけど、いろんな番組が映り、日本のＮＨＫなんかも見られてびっくりしました。でも、僕が見たときラジオ体操みたいなのをやっていて、かなり力が抜けてしまいました。何も世界の隅々にまであの体操を見せなくてもいいような気がするんですけど……。

その晩は疲れていたこともあり、いつの間にか眠ってしまいました。静かな夜でした。……その日から約一週間後、この家の本当の姿を見ることになるのですが、そんなことは夢にも思わずズブズブと眠りの世界へと引き込まれていったのです。

空港のすぐ向こう側は草原です。

二日目、たくさんの絵はがきを書いた後、食糧の買い出しなどをするボギーにくっついて歩きました。鍋、米、ビール、野菜、水……何やらいろんな買い物をしていきました。

さて、買い物をするのに市場へ行ったときのことです。活気にあふれる店がならんでいます。そこを歩いていると、前後が急に人で混み混みになってしまいました。何じゃこりゃ……と、すぐにその場から逃げ出しました。しばらく行くと、また、同じことが……。「はっ!」と気づいて胸ポケットを見てみると、そこに入れていたお金がなくなっていました。スリです。

今まで、インドのバザールでも、メキシコのメルカドでも自分の物を盗まれたことはありませんでした。それが、モンゴルの市場で……。ものすごくくやしい思いでした。そして、ボギーにも「気を付けて、って言ったのに!」と叱られました。正確な金額はわからないけど、盗まれた金額よりも盗まれたという事実の方がショックでした。

初めて出会ったスリ。気がゆるんでいたのもあるけど、あんなに簡単に、上手に盗まれてしまうのかと思うと、心境としてはかなり複雑なものでした。

この日、ショックも覚めやらぬままに、空港へ行きギンちゃんたちを出迎え、ジャミンガルさんの家へと向かいました。

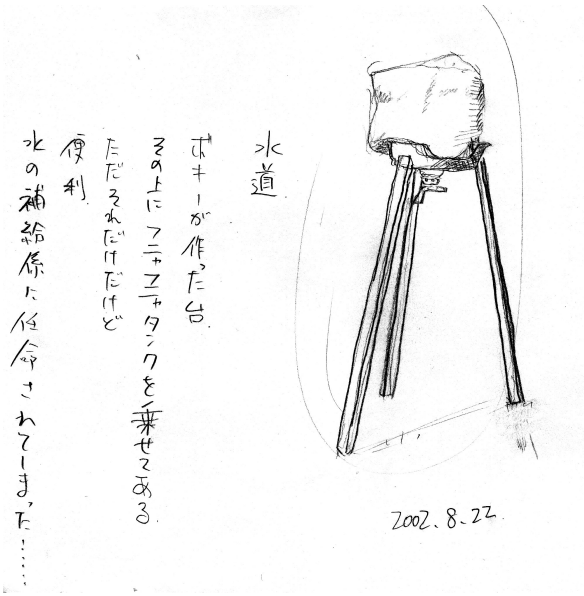
草原のオアシス。

草原には水があまりたくさんありません。ジャミンガルさんのゲルに着いて、まず始めにやったことは水汲みでした。ギンちゃんから「水道局」に任命され、ポリタンクを持って出動です。……といってもジャミンガルさんの車に乗せてもらって行ったんですけどね……。

井戸が掘ってあってそこからポンプで水を汲み上げることになっていたみたいで、ゴンゴン水が流れ出てきました。水はパイプを通って水受けにまで届き、そこでは羊たちが水を飲むようになっていました。その水の冷たいこと！手を入れていると痛くなるくらいに冷たい水でした。飲んだらものすごく幸せになりました。「水道局」の特権です。

持って帰った水の一部は貯めておいて、その中に缶ジュースや缶ビールを入れて冷やしておきました。ま、僕は、お酒は飲めなくてビールは苦くてきらいなので、飲んでいたのはジュースと水でしたけど……。冷えたビールを飲む人たちのおいしそうな姿を見ていると、ちょっとうらやましく思いました。

水は大切なものです。モンゴルで僕は「水道局」として働きましたが、みんな水を大切にしていました。ご飯を食べた後の食器は紙で拭いてから水で流すなどの工夫です。日本では実感できない「水」の偉大さでした。



僕らの水道。

さて、水の話です。川を流れていても水、道にたまっていても水、海に揺れていても水……、いろんな水がありますよね。僕らが生活するのに便利な水って、どんなモンでしょうか。

ゴンッ、ゴンッ、ゴンッ、といきなり音が聞こえてきました。何の音か……水道建設の音です。ふふふ……。とはいっても、車のホイールカバーに棒を通して地面に打ちつけているというだけですけどね。ちなみにそれはボギーがやりました。

こうして便利な水になるためのの準備ができあがりました。「高さ」です。

便利な水になるためにはそれだけではいけません。そこで重要な役割を果たすのが、蛇口です。ただ、水をためておくだけなら空き缶でも何でも構わないんですが、水を「使う」というときに、これがあるのと無いのとでは雲泥の差になります。ポリタンクにはこれがつけられるんです。ギンちゃんが知り合いの工場から持ってきちゃったみたいですが、場外ホームラン級のすばらしさでした。ただ、ポリタンクはプキョプキョしたやわらかいヤツだったので、そのうち穴が空いてしまいました。こちらは犠牲フライくらいですかね……。

とにかく、僕はその水道の価値を見抜いてスケッチしました。大切なのは物事を見極める眼です……よね……。

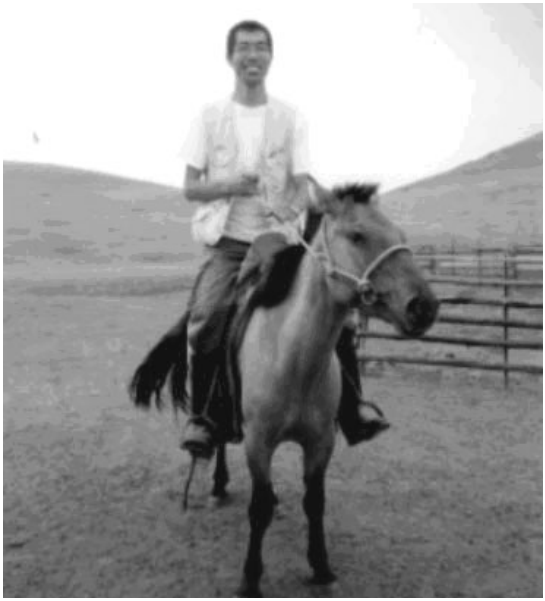
草原の朝。

草原での一夜を過ごし、朝がやってきました。この日は何が起こるのだろう……と胸をふくらませていたものです。……といえばかっこいいんですが、何しろ僕は突然のようにギンちゃんツアーにくっついていった身分の居候ですから、自分に人権があるとは思っていません。自己主張するなんてもっての他だと思っています。ということで、自分の意志とは何の関わりもなく、その日の日程に流されるようについていくのです。

まぁ、ギンちゃんたちが特別のスケジュールを組んで行動していたわけではないので、どうでもいいんですけど、とにかく馬に乗るということだけが決まっていることでした。この日は、いってみりゃ草原初日です。馬、馬、馬！……それしかありません。みんな乗りたくて仕方がないのです。

僕は生まれてからこの歳まで、馬なんて乗ったことはありません。かなりドキドキでした。「乗る人が下手だと馬になめられる」と、聞いたことがあったので、絶対馬に負けてたまるか、という意気込みで馬と対決しました。……同レベルです……。

乗ってみると背中の上下運動が思っていたよりも大きくて、はっきりいって乗りにくいと感じました。靴先のアブミは上手に踏みしめられないし、乗り方は注意されるし、ちょっとブルーの世界に入ってしまいました。



愛馬サブロー君です。

モンゴルでほぼ毎日お世話になったのが、彼「サブロー」です。彼はちょっと歳をとっていて、走るのがメチャクチャ早くはありませんでした。普通に歩くときも、なぜか一番遅れてしまい、後から追いかけていくという構図でした。でも、二日目くらいからかなり僕の言うことを聞いてくれるようになって、妙な愛着を感じてしまいました。

僕は「じろちょう」ということになっており、その弟分にしてやるということで、勝手に「サブロー」と名付けてしまいました。勝手にではあるものの、名前をつけたら余計に愛着がわいてしまい、乗りながらもよくおしゃべりをしていました。仲間だと思われたかもしれません……。

ところがある朝、彼は逃げており、僕の前に姿を見せませんでした。むむむ、裏切られた……、という気分です。仕方がないので、他の馬に乗らせてもらいましたが、そいつはサブローとは違ってやたら走りたがってしまい、止まってくれませんでした。やっぱり僕にはサブローが必要だったんです。

翌朝……、サブローは僕を待っていてくれました。僕を置いてどこかへ行ってしまったことを叱ってから、「また、よろしく！」とあいさつをして、走り出しました。やっぱりサブローは僕の馬でした。

モンゴル鞍。

馬に乗るときには鞍が必要になります。馬の背中に直接乗ったらどうなるのか……、そんなこと、僕に聞かないで下さいね。わかりません。たぶん、落ちるんでしょう。

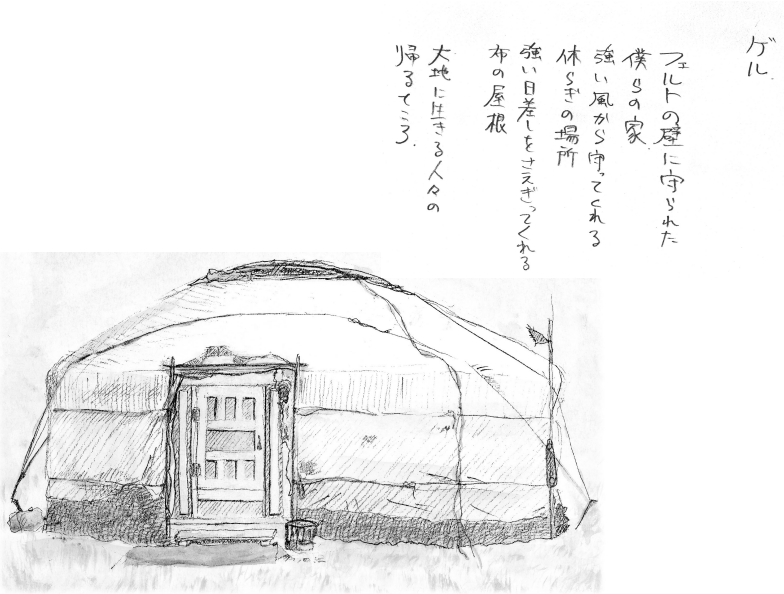
で、当然のような顔をして鞍の上にまたがることになるんですが、モンゴルの鞍はすわる部分が木でできていました。生まれて初めて馬に乗るわけで、「ほう、こういうものか……」と思うわけです。「かたい」と思いました。

で、当然のような顔をして馬を走らせることになるんですが、鞍の後ろの部分がガコンガコン尻に当たっていました。生まれて初めて馬に乗るわけで、「ほう、こういうものか……」と思うわけです。「痛い」と思いました。

で、当然のような顔をしてスピードを上げることになるんですが、馬はどんどん突っ走っていきました。生まれて初めて馬に乗っているわけで、「ほう、こういうものか……」と思うわけです。「楽しい」と思いました。

で、当然のような顔をして走り終わることになるんですが、猛烈に尻が痛くなっていました。生まれて初めて馬に乗ったわけで、「ほう、こういうものか……」と思うわけです。……が、どうもこれはちがうという感覚でした。

……尻は血だらけでした……。



大草原の小さな家。

馬に乗って疲れた頃、目の前にゲルが現れます。木の骨組みの上をフェルトで覆い、丈夫な布をかぶせた遊牧民の家です。遊牧民は馬を追い、良い草を求めて旅をする生活をしていますから、彼らの家は移動ができるようになっているんです。

冬、マイナス四十度という寒さがきても、暮らすことができるような暖かな家なんです。中にはストーブが置かれ、ゲルの上座にあたる部分には祭壇が祭られています。

夏、暑いときには少しだけ外のフェルトをまくり上げてしまいます。そうすると心地よい風がゲルの中に入り込んできます。ま、僕らはそこでジュースなんか飲んだりしてくつろいでいたわけです。極楽極楽……。

その外見は、結構かっこいいんですよね。気に入っちゃいました。ということで、スケッチです。気に入ったものは丁寧に描きたいもので、いくらか時間を多くかけて描きました。かなりの力作だと自分では思っています。朝、ちょっと早く起きて、ちょっと冷たい空気の中で、寝袋をかぶり、かなり怪しげな格好で描きました……。その姿は見せたくありません……。

自分の家というのは特別な物です。僕は焼津の実家に帰ると妙に落ち着きます。でも、モンゴルで、僕は、もう一つの自分の家を見つけたような気持ちになりました。

馬乳酒をかき混ぜています。

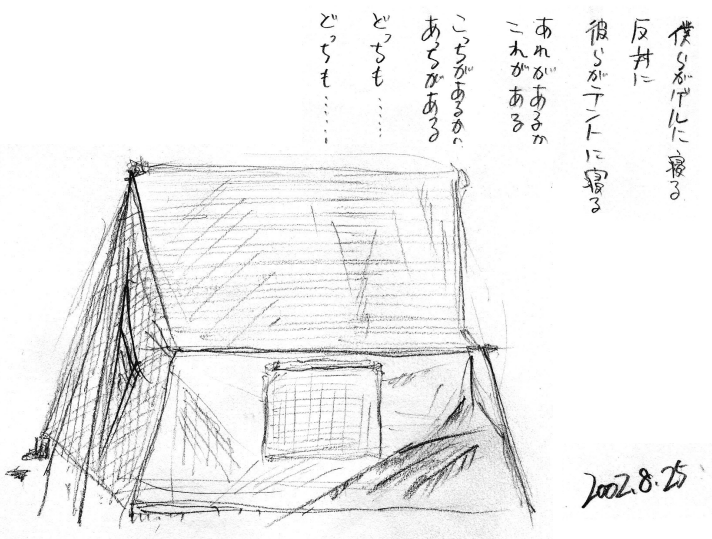
ゲルは遊牧の民の帰る場所、そこにはいろいろな仕事があります。子どもも大人も朝早くから夜遅くまで、よく働いていました。基本的に仕事の相手が馬や羊たちという生き物ですから、いつでもどこでも面倒をみてあげなければいけないんです。

ゲルの中でくつろいでいると、外から変な音が聞こえてくる……何でしょう。

モンゴルの草原には水がたくさんありません。ということで、モンゴルの人たちは飲み物を蓄える工夫をしてきました。その一つが「馬乳酒」と呼ばれるものです。読んで字のごとく、馬の乳からできるお酒のことです。どのゲルにも必ずあります。アルコール度数は低いみたいで、どうやらガバガバ飲んでいるようです。

もちろん、僕も飲ませてもらいました。お酒がダメな僕ですが、何でも自分で試さないと気が済まないんですね。感想……「すっぱかった」……です。酔っぱらうと困るので、たくさん飲みませんでしたが、日本人の口には合わないかもしれません。ついでの感想……「すべての乳製品はすっぱい」……です。チーズもお菓子もみんなすっぱいものでした。

何にしても、ゲルの中にいて聞こえてくる、この馬乳酒をガポンガポンとかき混ぜる音は不思議なものでした。



僕らが草原のゲルに着いたとき、ボギーたちはいくつかテントを張り始めました。その時は「ふ～ん、テントも張るのか……」ぐらいに思っていました。僕にとってテントは友達みたいなもので、チャリダー&ライダー生活には欠かせない必須アイテムです。だから、旅先でテントを張ることは当たり前のことでした。

でも、その日、僕らが荷をほどいたのはゲルの中でした。中には仏壇やら食器棚やら、まさに家です。「快適、快適！」と気分を良くしました。さすがのチャリダー&ライダーも、テントと家とを比べたら、落ち着いた家の方が過ごしやすいですから……。

それで、その日から僕らのゲル生活が始まりました。朝起きて、ご飯を作って、馬に乗って……、寝る……ま、簡単に表せばこんな生活です。気楽な生活でした。

鈍いんですねぇ……、しばらくして気づいたんです。僕らがゲルで寝泊まりをしている間、本来の住人であるジャミンガルさんたちは僕たちのためにテントで生活をしていたんです。観光客として僕らを泊めているという、ガイドみたいな感覚もあったんでしょうけど、僕としてはなんかやりきれず、ちょっとショックでした。

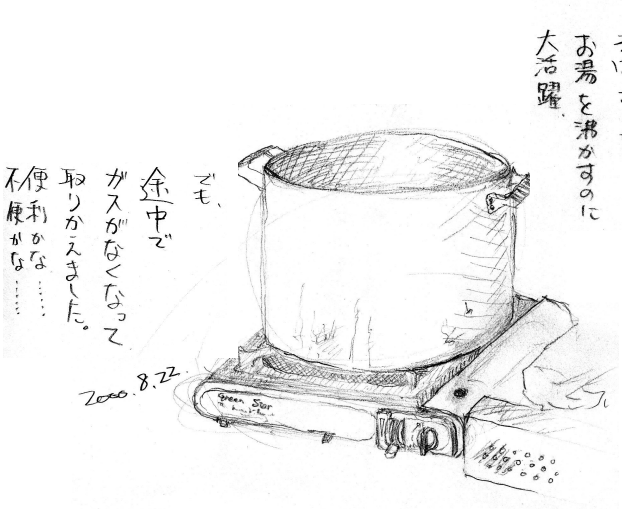
スケッチの最中

さて、ジャミンガルさんのゲルの中ですが、僕にとって魅力的なモノが結構ありました。後ろの方に見える食器棚もそうだし、その左側には小麦粉が入った筒、そのまた左側にはスーツケースが置かれているけどベッドがあり、その手前には台があって、その上には白い入れ物に入った馬乳酒があり……。

で、僕は少しずつ自分の興味を絵にしていきました。僕は絵を描くのがそんなに得意ではないので、やたらと時間がかかってしまいます。だから、たくさんのモノを目の前にして、ちょっとのモノしかスケッチブックの中に収めることができません。なんとなくくやしい気分です。

でも、絵というのは写真よりも自分が思ったことがよく表れてくるような気がします。どこかが変な風に曲がってしまったり、どこかが変な風に大きかったり……バランスが悪いこともよくあります。それが絵の良さだと、実は思っています。ピカソの絵なんか、僕は見ていても何だかよく分からないけど、きっと極端に自分の思いが出ているんだと思います。ただ、僕には絵の才能はないから言葉で飾り付けをします。僕のスケッチブックは僕にとって絵と字がセットになった宝物です。

では、この場面は何に興味を持っている写真でしょうか。答えは「ガスコンロ」です。



文明の利器？

モンゴルで、僕らはほぼ自炊をしてすごしていました。そこで大きな力を発揮したのがガスコンロでした。草原の中で、あっという間に火がついて、料理に取りかかれるというのはすごいことです。

でも、もともとモンゴルの人たちはガスコンロなんて物は使いません。牛のうんこを乾燥させた物を燃料として火をおこし、上手に活用しています。燃料はいくらでもその辺に転がっています。それを雨にも濡れないようにしっかり保管して、すぐに使えるようにしているのです。

ゲルの中にはかまどを置く場所も決まっていて、そのかまどからは煙突が伸び、天窓に作られた穴から外に突き抜けています。本当に工夫され、広い草原で生き抜く知恵が詰まっていることを彼らと一緒に生活する中で感じさせてもらいました。

さて、そんな中で僕らはガスコンロを使っているのです。カチッ、ボッ、と火がつき、そこからはカレーにシチュー、うどんにそばまで様々な料理が生まれてきました。毎日、モンゴルにいながら自炊で日本食を食べるという不思議な生活でした。でも、何となく味付けがモンゴル風味だったように感じたのは僕だけだったんでしょうか……。広い草原で、でっかい気持ちになっていたからかもしれません。

いざ、出発！

馬に乗る、ただそれだけでドキドキワクワクして、しかも気が引き締まりました。最初はなかなか走れないから恐怖や不安の気持ちもかなりたくさんあるんです。馬が思い通りに動いてくれるだろうかとか、馬から落ちたくないとかフッと嫌なことが頭をかすめていきます。憂鬱な気持ちが広がっていくんです。

そんな気持ちをグッと抑え込んで、どか～んと一発走り始めてしまうんです。そうなってくると「えいや！」ってな感じになってきて、馬もあきらめたように言うことを聞くようになるんです。その時の気持ちよさは言葉では表せません。自分が心配していたのがウソのようにスピードに乗ってスムーズに走れるんです。

チンギス・ハーンが率いたモンゴルの騎馬隊も大草原を駆けめぐり、自分たちの土地のすごさを感じていたんじゃないかと思います。しかも、騎馬隊のみんながまとまって一斉に進んだら、ものすごい迫力だと思います。この、「みんながまとまって」、というのがやっぱり大きな意味を持っているはずです。一人じゃできないこと、それを、みんなが少しずつの力を出し合って何かひとつのことをやり遂げたときの、うれしさ度数は百パーセントを越えます。

さぁ、前に、前に、前に……！

愛馬・サブローの頭。

「あれ？おかしいなぁ。こんな写真、撮ったっけ？」「はい、撮ったんですよ」……自問自答です。

実際、こんな写真を撮るつもりはサラサラありませんでした。でも、写真はあるんです。どういうことでしょう。これは、馬が揺れていたことを物語っています。たぶん、僕は何かしら気になったモノがあって、サブローの上からそれを撮ろうとしたにちがいありません。それで、シャッターを押した瞬間というのが、サブローの振動と重なって、彼の頭を撮影してしまったのです。

思ったような写真が撮れないことはよくありますが、ここまではずしてしまうことは珍しいような気もします。まぁ、モンゴルだから仕方がないんですけどね……けどね……、喜び勇んで馬に乗り、ワクワクしながら撮った写真がこれじゃあ、やっぱりちょっと悲しいわけです。

しかも、前に、前に……と進んでいるはずなのに、撮れている写真が下の地面と目の前のサブローの頭なんだから、遠く前の方を目指している僕としてはガックリ状態です。もっともっと遠くを、遥か彼方を見つめて、そこまでひたすら走っていけたらなぁ、と思います。

目が悪いから、メガネをしないと遠くまで見えないんだけど……。

あぁ、いじめないで……。

世の中にはジャイアンタイプの人と、のび太タイプの人が存在するように思います。もちろん、僕はのび太タイプだと思います。いじめられキャラなんですよね。どんな場所に行っても、どんな人たちの中に入っても、だいたい同じようなパターンでのび太になっています。

逆の意味で、僕はどうしても先天的に強そうな人が苦手です。といっても映画版の「ドラえもん」に出てくるようなジャイアンだったらものすごく頼りになるから、たぶん大好きになっていると思います。むやみやたらに威張るだけの人は体が受け付けません。

僕は結局、寂しがり屋なんです。でも、それを素直に「寂しいです」だなんて口には出せないし、そぶりだって見せたくありません。そこで、誰かにいじめてもらうことで相手にしてもらい、ほっとしているんです。相手もその辺の呼吸がわかってくれていたら、そこがうまくかみ合ってお互いに幸せになることができます。

その点「ギンちゃんツアー」に参加した人たちは、そこら辺のかけひきが上手だったなぁと思います。まぁ、漫才でいうところのボケとツッコミですよね。僕の場合は体を張ってボケているということなわけです。さぁ、ツッコミを入れてくださいよ！

ゲルへの帰路。

旅の時間が一日ずつ終わっていきます。この日も夕方という時間がやってきて、草原の我が家へと帰る時間がやってくるのです。何か一つのことが終わりに近づき、その終わりが見えてきたとき、同時にまた様々なモノが見えてきます。

大きな大きな満足感や喜びが込み上げてくることがあります。耐えきれない寂しさや悲しさが押し寄せてくることもあります。テレビ番組が最終回を迎え、エンディングが流れた後、「来週のこの時間は……」なんて紹介があったりする、あの瞬間にも似たような思いが心を揺らしています。あるいは、日曜日の夜、サザエさんを見ているような虚脱感かもしれません。

モンゴルには煌々と輝く夜はありません。薄暗い電灯の下でメシを食べ、細々と日記でも書いて、そのまま寝てしまうくらいのモンです。その生活に慣れてしまうと、日本では家にまで仕事を持ち帰って、あくせく夜中まで働いている自分の姿というのが異常なモノにも感じられてしまうから怖いものです。

でも、サブローに揺られて思いっきり走った後だったら、気分は最高です。もちろん尻は痛いんだけど、精神的には興奮状態が続いて何が起こっても愉快なんです。こんな満足感でいっぱいの時って、そんなにはありません。大きなイベントが終わったその時、その満足感を貯金して財産にしていきたいです。

夜明け。

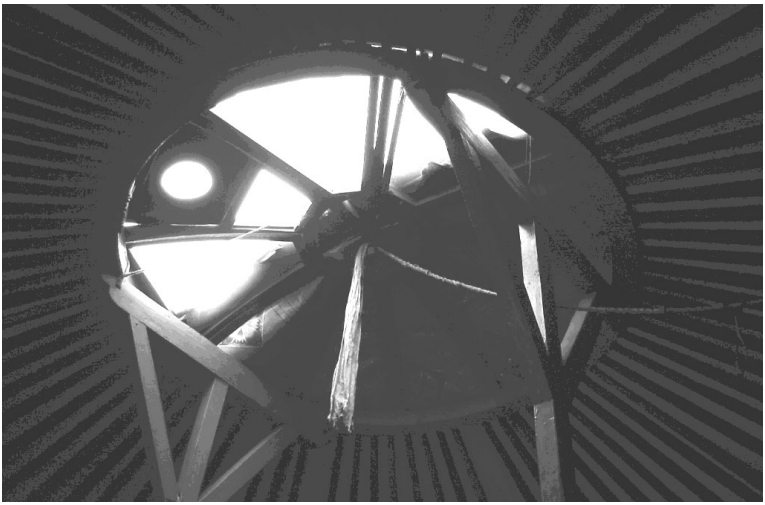
それまでの闇の中から太陽が顔を出します。新しい朝です。夜という一つの時間が終わり、朝という時間が始まるのです。次へのエネルギーを感じるときです。

僕の感覚の中で、夜中の十二時に「今日」が終り「明日」が始まるというのが、何となく分かりません。それよりも朝の太陽とともに新しい「今日」が来るという方がよっぽど納得できます。ラジオ体操の音楽なんかが流れていていい天気だったら、ものすごくいい気分で朝が迎えられるかもしれません。

モンゴルの夜明けはものすごく快いものでした。澄みきった空気の中で、また太陽が元気に顔を出してくれるんです。「昨日」という日や「夜」という時がどんなものだったとしても、またエネルギーをもらえました。ここではラジオ体操の音楽よりも大きな、「これから」という空気が感じられたんです。

苦しいことでも楽しいことでも、何かが過ぎ去った後、そこからまたスタートして前に進むにはものすごい力が必要になります。僕らにそのものすごい力をくれるのが明るく美しい太陽でもあるし、次なる目標だったりするわけです。

じゃ、僕を前に進めていく力って何だろう……って考えたら、それは楽しさじゃないかと思えます。ほんの少しの楽しさをものすごく大きな楽しさに変えて、僕はさらに前を目指します。



天窓からのぞく空。

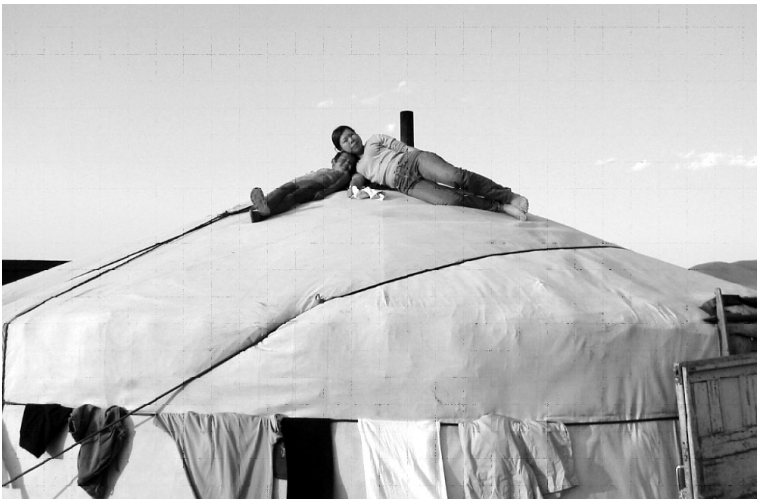
ぺろ～ん……、ゲルの天井、その真ん中は開けられるようになっています。布にひもがついていて、そいつを上手に引っ張って、開けたり閉めたりするようになっているんです。いきなり雨が降ってきた時とか、あわてて閉めるのは大変でした。

本当は、このゲルの天窓にはガラスがはめられていて、雨が入らないようになっているはずなんですが、なぜか雨が落ちてきました……。原因の一つ目は、煙突用の穴が空いていることです。丸くなっている所……僕らはあまり使わなかったけど……かまどから伸びた煙突を通す所なんです。そしてあるべきはずのガラスが抜けていることが雨が落ちてきた二つ目の原因です。

何にしても、天窓があってそこから光が射しているというのはいいものです。そこから上を眺めれば、どこまでも続く空があります。どこまでも続く空に、どこまでも僕の気持ちを乗せて、どこまでも遠くへ心が飛び立っていくんです。

天井というのは特別な存在です。日本でもお寺の天井に龍の絵が描いてあることがあります。自分がグルグル回りながらその龍を見ると、本当にそれが飛び立つような感覚になります。生き生きとした龍が天を目指して飛んでいくのです。

僕はゲルの中で天井を見上げながら、自分自身が大空へと上昇していくエネルギーを感じました。

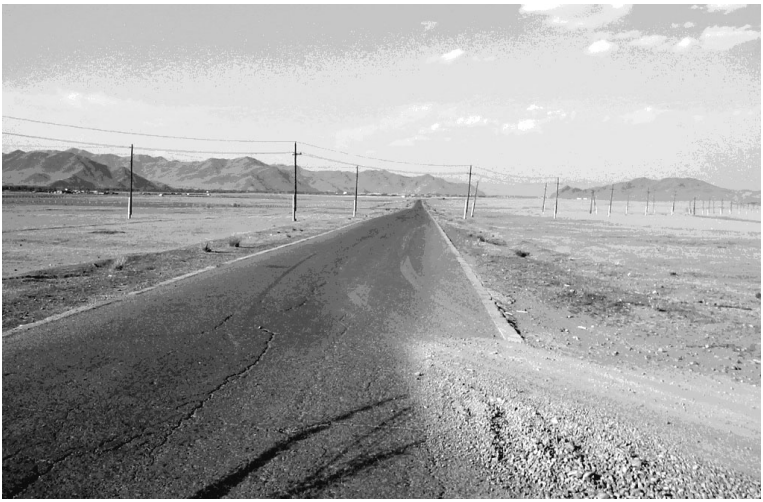


ゲルの中にいて天窓から空を見上げたら、妙なモノが目に入ってきました。目にゴミでも入ったか……どうも顔のようなものが見えるのだが……。手を振っていました。正体はジャミンガルさんの娘、アノーでした。

そこへノコノコ登っていく日本人もいるから困ったモンです。二人して寝っ転がっています。写真を撮ってくれなどとリクエストまで出してきました。うぅぅぅう〜、本当は僕も登りたいのに……。僕が登ったらゲルが壊れそうな気がするし、もし壊してしまったらえらいことなので実行しなかったのです。

ゲルの上から草原を眺めたら、また少し違ったモンゴルを感じられたかもしれません。目の高さってのは何かを見るとき、ものすごく大切な要素になると思います。ほんの少し背伸びをしただけでも、人の頭越しに見えたその光景はいつもと違ったモノになっているんです。ゲルの上の人らは幸せを感じたことでしょうねぇ。

心の目も同じこと……見る高さや角度を変えたときに、どんなものが心に広がってくるでしょう。物事には必ず多面性があると僕は考えています。いろんな見方を試してみる方が自分自身のためになると思うので、できるだけいろんな見方をしてみようと努力しています。人からは「変」と言われますけどね。



どこまでも続くまっすぐな道。

道というものは果てしなく続くものかもしれません。日本にいたら、道には行き止まりがあると思えます。でも、モンゴルに行くと、その道はどこまでもどこまでも先が見えなくなるまで続いていきます。

まぁ、モンゴルじゃあ、道なんか関係なく馬で走りまくったりするわけで、もしかしたら道というモノに全然意味がないのかもしれません。ただ、道じゃない所には穴ネズミが掘った巣穴があって、時々、馬が「ズボッ」っとハマってしまうんですけどね……。

ところが、馬で走っても道を車で走っても、そのうち必ず目の前に丘が現れます。その向こう側は見えません。一つの丘を乗り越えて走っていっても、またその向こうに丘が現れる時がきます。まっすぐな道、自分をじゃまするものが無いように思えても、そこには必ず自分の前に立ちはだかるものが出てくるのです。

僕らはそれを越えていきます。喜びの丘があったり、悲しみの丘があったり、感動の丘があったり……いろいろな丘があります。それを乗り越えたとき、自分の思いがいろいろあるんじゃないでしょうか。僕は、どんな丘を乗り越えたとしても、その次の丘を目指して走っていけるようになりたいと思います。

川遊び。

川へ行こう……ということになり、僕らは馬に乗ってパカパカと走っていきます。草原の向こうに木が見えてきました。木の姿に喜々としていると、そのうちに河原が現れました。

もともと水が大好きな僕ですから、もう、大変なことです。水着なんか持っていませんでしたが、そんなことは気にしません。パンツ一丁で川へと向かいます。結構冷たい水が流れていました。うれしくて、うれしくて……どっぽんどっぽん飛び跳ねていたら、パンツが半分くらい脱げてしまい、さすがに人に見せる姿ではなくなっていました。

大喜びで水遊びをしていたのは僕だけではありません。ジャミンガル一家の皆様も、かなり張り切っていたように思います。そこら辺に獲物を見つけては持ち上げ、どっぽ～ん、と放り投げるなんてことは余裕です。あちこちで悲鳴を上げる人の姿が見られました。アノーやザイヤなど、子どもらは自由気ままに楽しんでいました。

モンゴルの草原の中で、水とは非常に大切なものです。それが川となって流れているのだから、その恩恵はたいしたものということになります。僕らは頭を洗い、体を流し、身を清めます。そんなに無茶苦茶きれいな水じゃありません。でも、それがありがたいんです。命の水です。

アルヒの恐怖。

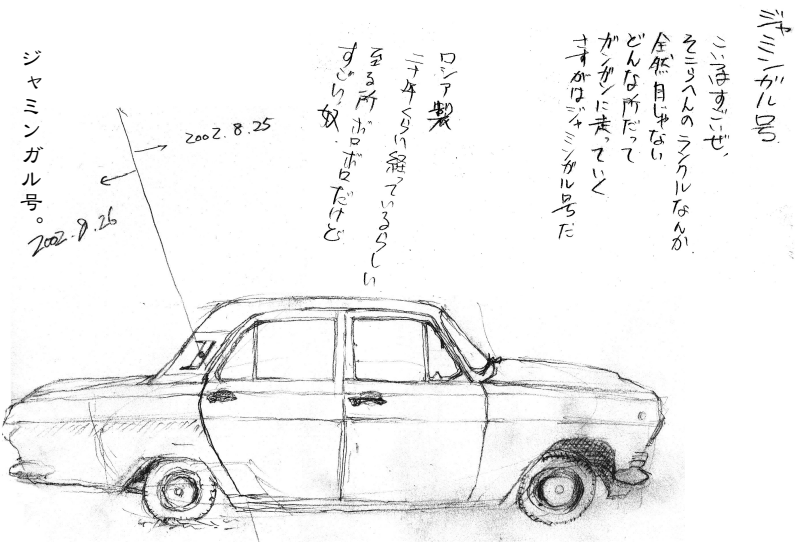
手にしているのは洗面器と空き缶です。その中に入っているのはサラダ、そして、アルヒです。サラダは……まぁ、サラダです。他に入れるモノがないので洗面器に盛られていました。アルヒとは……強烈な酒です。飲むと……のどがヒィヒィと悲鳴をあげます。

元来、僕は全くお酒を飲めません。甘酒を飲むと顔が赤くなる家系の人間です。なので、アルコールが近づいてきたときには、さりげなくその場を立ち去るようにしていました。

ところが、恐るべしジャミンガルさん……僕の姿を発見し、おいでおいでと微笑みます。僕は涙目です。空き缶にアルヒを注ぎ、僕の口へと近づけます。グイグイと押しつけられて、僕の口の中にその液体が注ぎ込まれます。「助けてくれ〜」……酒に強い人間には絶対に理解できない恐怖だと思います。いくら、お世話になっているジャミンガルさんでも、これだけは勘弁してもらいたいと心底思いました。

結局、少しだけ飲まされた後、僕は解放されました。ジャミンガルさんは楽しそうにアルヒを一気飲みしていました。瓶からそのまま飲んでいました。僕だったらたぶん死んでいます……。

帰り道、僕は馬上でフラフラしており、どうやってゲルまでたどり着いたか、ほとんど覚えていません。



道無き道をゴンゴン進んでいくモノがあります。ジャミンガルさんの車です。こいつはマジですごいです。たぶん……きっと……おそらく……、僕が運転したら途中で止まってしまい、帰ることができなくなるようなヤツです。どうやらロシア製で、二十年くらい経っているということでした。

そんなヤツがブワァァ〜っと砂煙をあげて走っていく姿は、それこそチンギスハーンも顔負け、ってな感じで、かなりの迫力です。水汲みに行くときにはこの車に乗せてもらったんですが、クッションのきかない席にすわり、開かない窓から外を見ると、「これぞモンゴル？」という気分になれたものです……。

こいつがもし日本車だったらどうだっただろう、と考えました。走れなくなっているんじゃないか、と思いました。特に最近の日本車はプラスチックの部分がものすごく多くて軽いんだけど、すぐにぶっ壊れる……というのが僕のイメージなんです。このロシア製のジャミンガル号は鉄のカタマリというイメージでした。……鉄屑になりかけているかもしれませんが……。

日本では家によって二台とか三台とか車を持っているところもあります。そして、何年か乗ったらすぐに買い替えることもよくあります。僕は、今、バイクに乗っているけど、ボロボロになるくらいまで乗ってあげられたら……と思っています。

闇夜の中で……。

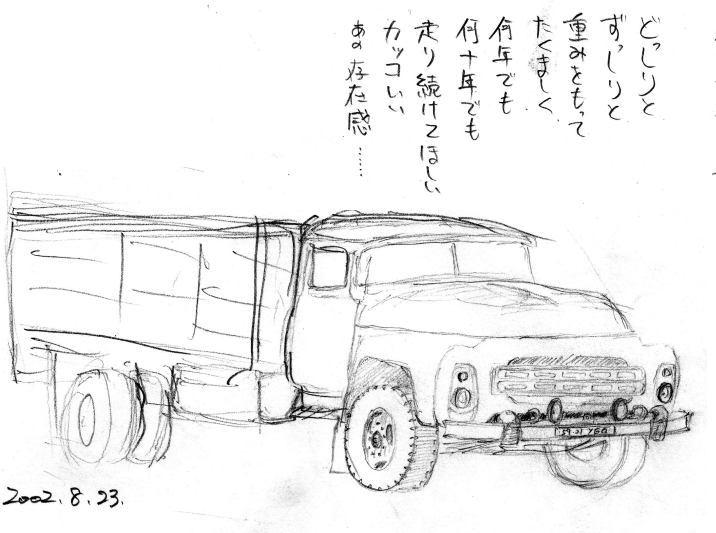
ジャミンガル号は、いつもゲルの近くにぴったり寄り添うように停まっていました。さすがに大切にされているなぁ……って……ん？……と、気がつきました。ジャミンガル号から何やらコードが伸びています。コードはゲルの屋根を伝って天窓まで行き……その先には電球が一つぶら下がっていました。車のバッテリーでゲルの明かりを灯していたんです。脱帽！

外は真っ暗けです。もちろん僕らは懐中電灯を持っていきました。ちなみに僕のはヘッドライトで、頭にくっつけるタイプです。これが便利で、両手を使っていても手元を明るく照らしてくれる優れモノです。周りからの奇異な視線は感じましたが、日記を書くときにも、ものすごく役立ちました。

さて、真っ暗な大草原で電気がつくというのは、かなり貴重なことです。車のバッテリーから伸びている裸電球一つだから、日本で同じことをやっても「おい、暗いぞ！」と突っ込みが入るくらいのモンだと思います。でも、そこはモンゴルの大草原です。ものすごく明るく感じました。家が明るいということが「当たり前」のことではないんだとその時学びました。

僕らはいろんなことを忘れていると思います。電気がつくことのありがたさ、車が走ることの便利さ……。自分で作ってみろと言われたら、確かにできません。日頃、ありがとう……。

ジャミンガル号②



重いんです。まさか、トラックのエンジンを押しがけするとは思いませんでした。

このトラック、本当はどうやってエンジンをかけるのか僕は知りません。見ていたら、グルグルするための道具を持ってきて、前の部分に突っ込んで回していました。ふ～ん、と思っていたんだけど、エンジンはかかりませんでした。

エンジンがかからない時、どうするでしょうか。僕のバイク、雨のあと電気系統がイッてしまい、バイクを降りて、うりゃ、うりゃ、と押し、無理矢理にエンジンを回して動かしたことはあります。オートマ車にはできない芸当です。でも、結構大変でした。

「えっ？」と思いましたがこのとき「後ろから押せ」と言うんです。ひぃ～、恐るべしジャミンガル号②です。ボギーと二人で押しました。ラッキーなことに数メートル押しただけで、機嫌よくエンジンが動き始めました。あんな物をそれ以上押していたら、こっちのエンジンが爆発してしまいます。

何にしてもモンゴルの車たちはタフです。あの草原を走るんだから軟弱な車じゃどうしようもないんだということがよくわかります。でも、タフなのは車だけじゃない訳で……、それを操る人間たちはもっとタフでした。

泥よけに落書きをしたのは……。

ふと見ると、そこには落書きが！……僕としては、かなりの大発見でした。もちろん、だから何だということはありません。ただ、それだけなんです。僕の発見とか僕の写真なんて、所詮そんなモンです。

でも、ジャミンガル号②の大きな泥よけに、宇宙人的な落書きがされていることって、妙におもしろく思えたんです。

僕らは小さい頃、地面やら壁やらに落書きをしました。地面には色のつく石みたいなのを拾ってきて、ゴリゴリと書きました。でも、モンゴルの地面は草ばっかりで何も書けないんですねぇ。じゃ、ここにやっとけ！ってな感じでしょうか。大きな泥よけは確かに子ども心をそそる落書きスポットかもしれません。

よく考えたら、僕は家の中でも、やっていました。今でもステレオの脇にあるスピーカーにはクレヨンで書かれた僕の落書きが残っています。どうにか消えないモンでしょうかねぇ……。悲しい財産です。

泥よけの落書きはすぐに消えてなくなってしまうかもしれません。でも、ここに落書きをした、その思いだとか感性だとかいうものはいつまでも生き続けるような気がします。子どもの頃の心って、僕には大きな財産に思えます。大切にしたいです。

ギンちゃんを蹴り飛ばす娘、アノー。

ジャミンガルさんの所に泊めてもらっていた僕らですが、そこには何人かの子どもたちがいました。一番仲良くなった子の一人がアノーです。

最初、僕なんか全然相手にしてもらえませんでした。きっかけは車の中です。ちょっと離れた泉に行ったとき、僕らは韓国製のワゴン車に乗っていました。ところが、みんなで乗ると席にすわれない人間が現れたのです。……当然のように僕は後ろの荷物といっしょのスペースに乗り込むことになりました。

で、ふとガラス越しに見える前のスペースに目をやると、そこにはしっかり席に着いたアノーがいたのです。むむむっ……と思いました。「これは何かしておかなければならない」と、何の理由もない義務感がフツフツ心にわき上がってきました。

そこで僕がやったのが顔技です。まず、手始めにアントニオ猪木の真似をしました。……ピクッ!……「おっ、反応してるぞ。」そのまま、アイィ〜ンと移行します。……ニヤリ……「よしっ、笑った」続行です。ここまでくればこっちのモノです。ただでさえ変な顔ですから、ちょっと顔を動かすだけで笑い出します。この勝負、完全に僕の勝ちでした……。

ただ、この時、前にすわっていた他の人、なぜアノーが笑っているのか分からずに謎を感じたみたいです。

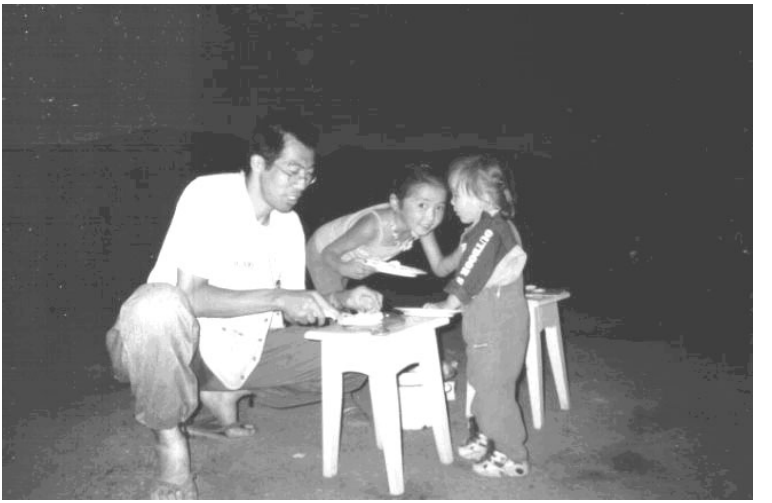
対決！

「やめてくれぇ〜！」……ぶふぅぅ〜！ぷはぁ〜！……水が飛んできます。アノーはものすごく楽しそうに獲物を探しています。僕らは防戦です。口から発射される水の弾丸は容赦なく僕らを襲ってきました。

僕はどんな時でも同じですが、やられたらやり返そうと思っています。例えば誰かにカンチョーされたら、カンチョー仕返そうと機会をうかがいます。誰かに膝カックンをされたら、膝カックン仕返そうとチャンスを待ちます。相手がどこの誰だって同じです。だって、くやしいじゃないですか、やられっぱなしは……。

ということで、この時も反撃にかかりました。飲み水を口に含み、アノーを追っかけました。口に水を含んだまま走ったりするのは結構大変なんですねぇ。もれてしまうんです。まぁ、モンゴルの大草原ですから、どこでどれだけ水をぶちまけても何の問題もありません。思う存分にねらいを定めて口の水鉄砲を発射させていました。

遊びってのはどこであっても作り出せるモンです。こんなくだらないことでも、僕は充分に楽しむことができました。僕は金をかけずにできる遊びが大好きです。自分の体が楽しさに反応してしまうんです。もっと遊びたいです。あぁ、遊び人……。



ジャミンガルさんの娘、アノーはよく働きました。そして、ジャミンガルさんの息子、ザイヤはよく邪魔しました。

このころ僕は団長であるギンちゃんから料理長という役職をいただいておりました。「水道局」と兼任であり、非常に忙しかったため過労で倒れそうなくらい……で……し……た。

そんな僕が夕食の準備をしていると、アノーやザイヤが手伝いにきてくれます。二人は日本語が分かるわけでもないのに、僕の指示に従って働こうとしていました。

「はい、これ持って行って！」

「じゃあ、これを切って！」

次から次へと料理長からの指令が出されます。アノーが材料を持ってナベの所へと向かいます。もれなくザイヤがついて行きます。アノーが野菜を切ります。もれなくザイヤが野菜に手を出します。……危ない…… そりゃ、ザイヤ君、手伝ってくれるのはうれしいのだが、恐ろしいのですよ……。

と、いうわけで、有能なアシスタントを従えて、料理長は馬車馬のごとく働いていました。世のため人のために働くというのは気持ちのいいモノです。

もちろん、楽をして飯が食えたらもっと気持ちいいかもしれないんですけどね……。

「これから」への扉。

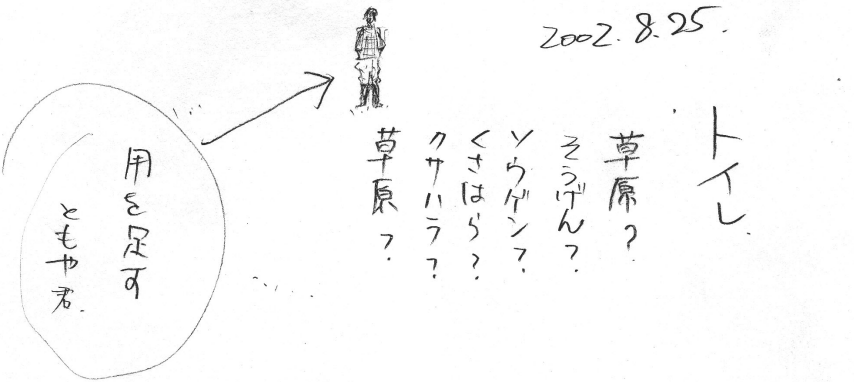
時として前が真っ暗に見えることがあります。本当にこんなんでいいのかとか、もうダメだとか思えることもあります。ゲルの中は外と比べると薄暗くて何だか変な世界にも感じられます。別に何か怪しいモノがあるわけでもないんですが、やっぱり暗さというのは嫌な雰囲気を感じさせるときがあります。

パッと外を見たとき、そこにはどこまでも続く草原が広がっていました。ゲルの外は広々とした草原なんです。今、自分がいるところが狭いゲルの中であることを感じ、外の広さを感じたとき、そこから出発することがイメージできます。

なぁ～んて……、ゲルの中は僕らが過ごしていた間、散らかし放題でエライことになっていて、狭くなっちゃった……という想像をしてはいけません。僕の寝袋が出しっぱなしになっていたり、きたないTシャツが振り回されていたり……ということも想像してはいけないのです。

何と言っても、ここはモンゴルなんです。遠くでっかい世界なんです。遥か見わたす限り草原の海なんです。僕らが、せまいせまい自分が知っているだけの世界でもがいているときに、広い世界で大きくはばたいている人たちもいるんです。

小さな自分の世界、そこをスタートにして、大きな可能性の広がる世界へと力を注いでいきたいものです。



ゲルを一歩出たらそこは全てトイレです。……はっ？……と、思わないで下さい。トイレなんです。

最初は抵抗のある人が多いみたいです。トモヤ君も、かなり戸惑っていました。でも、慣れというのは恐ろしいもので、そのうちに心のゆとりが出てきたみたいでした。悠々と用を足す姿が見られるようになったのです。別に、それを見ていて何が楽しいかって……何が楽しいわけでもないんですけどね……。

僕は開放的なトイレも全然苦になりませんでした。どちらかというと得意な方です。これも、チャリダー生活を長年してきたことの成果かもしれません。いつでもどこでも出せるようなたくましさを身につけていたのです。「食う・寝る・出す」は生活の中で基本中の基本ですから……。

出すのは生活の基本だから、世界中どこへ行っても必ずその機会に出会います。それは文化です。しかも生活に密着したモノなのでそれは非常に独特な文化を創り出します。どれだけ多くのパターンがあるか……、興味深いところです。学術的な関心の高さです。

よぉ～おしっ、この仕方の研究です。うん、この方法も面白い感じがします。ちょっと臭いですか……。

失礼しました。

スパイクフォーム。

体がムズムズしてきます。広い草原であろうと体育館の中であろうと関係ありません。どうしても跳びたくなってしまったんです。ボールとネットがあればもっと良かったんだけど、そんなモンが草原のど真ん中にあるわけがありません。開放的にとにかく跳ぶ……それはそれでいいものでした。

といっても、僕がバレーボールの専門家じゃないことは明らかなことで、ただ単に背がでかいということだけが、ホント唯一の利点です。ネット際でひょいと手を出してジャンプするだけでも有効なブロックになるんだから、ラッキーです。バシッ、とジャストミートして相手コートにボールがストンと落ちたときなんかは最高の気分になれます。

ただ単に背がでかいだけで……、こう考えるとバレーボールとは残酷なスポーツだと思います。もちろん守りの専門家であるリベロというポジションもあり、それはそれですごい活躍が見られます。でも、コートの中での存在価値には差があるように思えるんです。どれだけ練習して上達しても、背が高いだけで下手くそな僕がコートの中に立っている時間の方が長かったりするんです。本当に残酷なスポーツです。

けど、僕はバレーボールをやりたい……、ので自分の長所を最大限に生かすためにも日々跳び続けるのです。

ビョ〜ンと草原の中に突っ立っていたのはバスケットボールのゴールでした。バレーボールはできないけれどもバスケットボールはできるみたいです。モンゴル国内ではメジャーなスポーツなんでしょうか……。

モンゴルの中でメジャーなスポーツって何だろうと考えたとき、貧困な僕の頭の中ではそのイメージはほとんど何も出てきません。乗馬？モンゴル相撲？……もうダメです。でも、バスケットボールを草原でやるってのは、無理があるように思えるんです。

草原は平らな場所か……否、結構デコボコしています。さらにネズミのおうちである穴がポコポコ開いています。そんな所でバスケットボールがよくできるモンだと感心してしまいます。もちろん整備はしてあるんでしょうけど、やりにくいんじゃないでしょうかねぇ……。ドリブルなんてした日にゃあボールがどっかへ飛んでいっちゃうんじゃないでしょうか……。余計なお世話なんですけど、そんなことを考えてしまいました。

それなら、バレーボールの方が草原向きです。地面に落とさないようにするスポーツで空中戦だから、のびのびとその空間を生かせるはずです。どこまでも空が高い開放的なモンゴル、みんなでバレーボールをやったら、楽しいかもしれません。

各種取り揃えてございます。

「ちょっと、ちょっと……」と、突然僕は呼ばれました。ん？何だろう……と思ってその場に行くと、「お願いがあるんだけど……」とのこと。またしても、ん？何だろう……と思わされます。で、「ココニ、シテクレナイカナァ……」……えっっ！いくら何でもそんなアホな！……かなり衝撃的でした。

辺り一面に広がる広大なトイレ……あんまりきれいなイメージが出てきませんねぇ……。そこには様々な生き物のお土産が落とされています。僕をそこに呼んだ人は、種類別にそのお土産を分類し、並べて待っていました。牛、馬、山羊……もう一種類欲しいというのですから困ったモノです。

僕が行ったときのモンゴルは水不足とやらで、草はほとんど茶色くなっていました。でも、普通だったら緑の海が地平線のかなたまで続いているはずです。その中には多くのハーブが自生しているそうです。つまり、広大なトイレにはいい香りのする天然の芳香剤が敷き詰められているということです。

日本のトイレに入ると、見事に「トイレ」というにおいがすることがよくあります。別に臭いわけじゃないけど、においが「トイレ」なんです。それはそれで何か作られた変な感じがするんですよね……僕には……。

あ……、その人の依頼は丁重にお断りしました。

プスッ……タラリ……ドクドク……。

シャキーン！、とジャミンガルさんが何かを取り出しました。シュリシュリシュリ、と研ぎ出しました。それを持ってイソイソと外へと出ていきました。ピコーン！、と僕はひらめきました。「きっと何か面白いモノが見られる」と感じたんです。

外では馬が前と後ろの足を結ばれていました。よし、何かが始まる……予想的中です。その馬は前足にけがをしていました。ヘコヘコと足を引きずっています。

さて、ジャミンガルさんが取り出したのは、さきほどの小さなナイフのようなモノです。慎重に馬の足を探ったかと思うと、プスッ、とそいつを刺しました。続いてまたその辺りを探って押さえたりしています。「うわっ痛そう」……でも、それが大切なことなんでしょうねぇ。血がタラタラ出てきました。

よく東洋医学の中では血の流れについて論じたりします。きっと馬でも同じことだと思います。つまり、けがをして悪くなってしまった血を外に出していたんだと思います。当然、ジャミンガルさんたちは医者ではないから、専門的な知識としての手術ではないと思います。まさに草原に生きる遊牧民族としての生活の知恵だと思います。

でも、僕はけがをしてもプスッ、タラリ、は嫌です。

バキュ〜ン！

僕は弓道をやっていたことがあります。的に目がけて矢が飛んでいき、スパーンと当たったときには最高の気分です。それとは全然関係ないのかもしれませんが、鉄砲を撃つとき妙な余裕がありました。

この日、ジャミンガルさんがタルバガンという動物を撃ちにいくというので、僕は大喜びでついていきました。巣穴から出てくるのをじっと待つんですが……、真剣にねらいを定めるジャミンガルさんの隣で僕はガァーガァー眠ってしまいました。無礼者です。すみません。

パスンという音と共に一匹の獲物を得て、ゲルへと戻る途中で馬上のギンちゃん部隊と合流しました。そこで、鉄砲の試し撃ちが始まりました。「撃たせてくれぇ、撃たせてくれぇ〜」とわがままを言っていたら、本当に撃たせてくれました。

ねらいは十メートルほど離れたタバコの箱です。照準を合わせて、ゆっくりと引き金を引いていきます。どのくらい引いたら発射するのかわからなかったので、かなりドキドキしました。

パンッ……わりと乾いた音と、意外に軽い衝撃を肩に感じました。弾はタバコの箱に的中です。生まれて初めて撃った鉄砲でねらい通りの射撃！ものすごくうれしかったです。

この集中力が他にも生きればいいんですけどね……。

生き物から食べ物へ……。

ある朝、ヒツジの解体が始まりました。モンゴルの人たちは一滴の血液も大地へ落とすことなくヒツジを肉へと変えていきました。残す部分は全くない……、最大限に命を尊重する姿がそこにありました。

まず、仰向けにされたヒツジの腹にナイフを入れ、皮を切り裂きます。そして、そこから手を突っ込んで太い血管を指先で断ち切るのです。血はヒツジ自身の腹の中にたまっていきます。その血はすくい取られ、やはり取り出された腸の中へと詰められることになります。みじん切りのタマネギと小麦粉を混ぜ、塩で味付けをしてから詰めて、煮込みます。

さて、肉の方は上手に皮と切り離されて、まるで服を脱ぐかのように美しく剥がれていきます。皮を剥がれたとき、もうそこには「お肉」になったヒツジがありました。

僕は以前から屠殺の場面をこの目で見たいと思っていました。当然、「お肉」も最初は「生き物」だと知っているんですが、どうしても実感が湧かなかったんです。こんな鈍感な僕でも、実際にその過程を見れば何か感じるものがあるんじゃないかと思っていたんです。確かに印象的でした。でも、僕はそれをありのままに受け止めることができました。いい経験でした。

ヒツジとヒト。

どこまでも緊張感のない人間です。しかも、ものすごく楽しそうだから余計に力が抜けていきます。僕らのために食糧になってくれたヒツジの生首で遊んでいるんだから、ヒツジもいい迷惑だと思います。

生き物から食べ物へと移り変わる過程を見ているときには、苦しそうに体を動かす姿や流れ出る血を目にします。ところが、ひとたびその命が消えてしまったとき、僕らはもうその命の存在を忘れかけています。何とも情けないことなのかもしれません。でも、それが普通なのかもしれないとも思うんです。

人には頭ではわかっていても実感としてどうにもピンとこないという時があると思います。実は僕の場合それがものすごく多いような気がするんです。言葉の上では理解できるし、頭の表面では理解できているつもりだったとしても、やっぱり本質では全くわかっていないという状況です。

考え方によってはものすごく失礼なヤツです。人の話を聞いてもそれを自分のものとして生かせないんだから、人との関わりに意味がなくなってしまいます。でも考え方によってはものすごく自分を大切にしているヤツといえないでしょうか。

僕はまだまだ修行中です。人との関わりの中で自分自身を見つめ、自分の姿をもっとはっきりさせたいと思っています。

頭と足の対決。

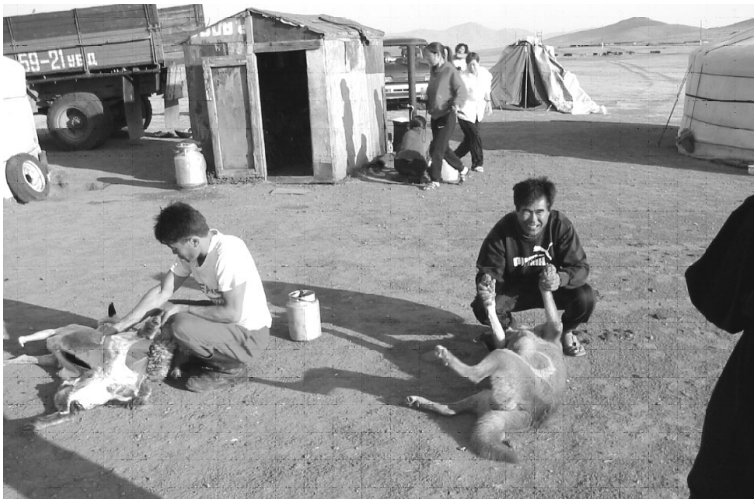
「トリャァ〜」「なんのこれしき！」……ものすごい決闘が行われています。……って、何のこっちゃ、という感じですね。とりあえず、僕らはアホの集団だったみたいです。貴重な命も何のその、とにかく自分たちの楽しみに変えていきます。

命を奪ったばかりの頭と足で何ということをっ！……と思う人もいるかもしれません。いや、そう思う人たちが多いんでしょう、きっと……。でも、僕らは決して命を粗末にしようなんて考えてはいません。むしろ、お店で加工された肉ばかりを買って食べているだけの人たちよりも命のことを感じていると思います。

命とは確かなもののようでいて、実際は全然確かなものではありません。常に死と背中合わせなんです。さっきまでメェメェ言っていたヒツジが、あっという間に食べ物になってしまったりするんです。それは自分自身でも同じことだと僕らは知っています。何かが起これば僕らの命なんてすぐに吹き飛んでしまうからです。

だからといって落ち込んでいるヒマはありません。僕らは僕らの命をしっかり生きていきたいんです。何でもいい、楽しいことを探して生きていきます。

そう考えたら頭と足の対決もおもしろいじゃないですか。



犬は食べたくないなぁ。

こいつおもしろいヤツだなぁ、と心から思いました。ヒツジの解体をしているとき、その隣にジャミンガル家の番犬であるアスァルが寄ってきてゴロンと横になっているんです。光景としては一緒に解体している姿になってしまいます。ギンちゃんも大喜びでアスァルの足を持っています。

こういうとき日本の犬だったらどうするんでしょう。時々、「俺はおまえらよりえらいんだぞ。エサよこせ！」ってなような顔をしている犬を見かけます。そんなモン知るか！と、蹴散らすわけですが、もし、そんな犬がこの光景を目にしたら「キャ～、残酷ぅ～」とか言いそうな気がしてしまいます。

人間にしても犬にしても日本で生きていると、どうもカッコよく生きていくことだけを優先しているように思えてなりません。ものすごくスマートな感じがするんです。清潔な環境だったりもするんです。

少しぐらい汚くたっていいんじゃないでしょうか。少しぐらいバイキンを口にしても、消化して全滅させるぐらい強くてもいいんじゃないでしょうか。別に自分の部屋の汚さを正当化させようとしているわけじゃないですけど、バイキンもありということで……。

あ、もちろんアスァルは食べていませんからね……。

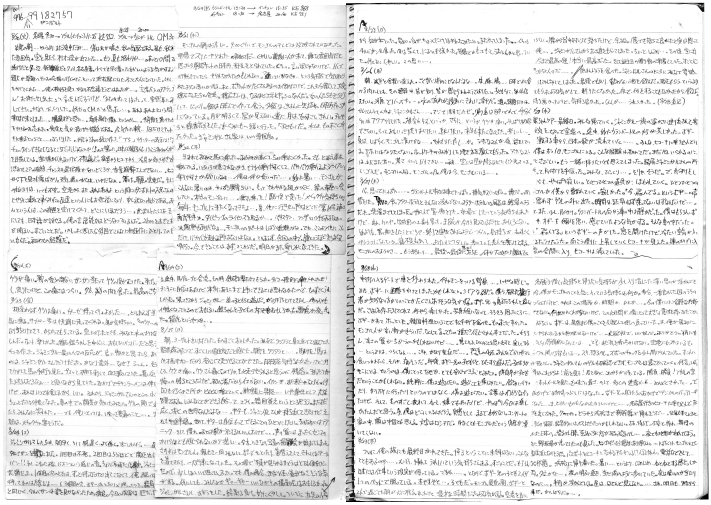
どうも、僕は犬に好かれるようなな気がします。近所で犬を飼っている人がいるんですが、その家へ行くと、そこの犬は大喜びして僕を迎えてくれます。ちぎれんばかりにしっぽを振り回し、ハフハフいいながらロープいっぱいの所まで飛び出して来るんです。一度は興奮のあまりおしっこをもらしていました。

モンゴルで出会ったのは賢いヤツでした。広い草原の中で生きているということは、それなりの役割を持っているということで、ジャミンガルさんたちの言うことをよく聞いていました。馬や羊を上手に追い回していたり、妙なことがあったら吠えてくれました。もちろん知らない人が来たら吠えます。

ある時、ヤツと目が合いました。ピンとくるものがお互いにあったような気もします。ほれ、グァシグァシ……てな具合に頭をなでてやりました。何とも幸せな表情をするんですよ。ああ、いいヤツ……と思いました。

一つ、やられたこと……、それは干しておいたシャツに、おしっこをかけられたこと……。そこらじゅう、どこにしたっていいはずなのに、僕のシャツに向かって放水しました。何ということでしょう……。ヤツにお返しをしようかとも思いましたが、さすがに人間としての威厳を保つために我慢しました。

仲良しがひとり増えました。



グシャグシャグシャ……何じゃこりゃ……という世界です。旅に出たとき、僕の日記はわけのわからん文字で埋め尽くされます。パッと見たとき、クラクラしてきそうです。

旅に出たとき、人は少し変わるような気がします。心の中が研ぎすまされて、今までだったら見えなかった物事が見えるように思うのです。新鮮な気持ちで周りのものを見て、感じて、接することができるからかもしれません。そんな時に心が反応したことを、僕はその場で走り書きします。だから、旅に出たときには、できるだけ出しやすい所に日記の書ける道具を忍ばせています。そして、サッ……コソコソ……、たぶん周りの人は怪しげな目で見ているでしょうが、気にならないフリをして書いています。

後から読み直したとき、ものすごく読みにくいこともたくさんあります。でも、それなりにその時やその場のことを思い出すことができ、自分の中にその光景が広がっていきます。読み直すことで、自分の行動をも見直していることになるんです。それで、こうすればよかった、ああすればよかった、とまた考えたら、自分のレベルアップにつながると思います。

自分の生活を文字にしてみるのは面倒なことですが、やってみると意外におもしろいものです。

泉の水はメチャクチャ冷たかった……。

「ギンちゃんツアー」のみんなで泉へ水を汲みに行きました。ペットボトルに水をしっかり汲みまして……と、思ったら、ウリャウリャと水かけ合戦の開始です。ギャーギャーと、みんなして大騒ぎです。この水が冷たいからまた大変なわけです。

ジャミンガルさんも一緒になって……いや、ジャミンガルさんが先頭に立って……ものすごいことになっていました。気を抜けないんです。「はっ！」と背後に気配を感じたと思ったらニヤリと笑ったジャミンガルさんが、服の中へ水をダァ～っと流し込んできます。ヒィ～……。

こんなことをできるのは、そこにいた人たちがみんな個性豊かで、しかも温かい人たちだったからだと思います。みんなそれぞれが自分の楽しみを感じながら「何か」をすることができる集まりでした。だからこそ、いきなり現地集合の僕も仲間にいれてもらえたわけだし、楽しむことができたんです。

よく「人間はみんな同じだ」などと言います。逆に「人間はみんな違うんだ」とも言います。どっちが正しいんでしょうか。当然、どっちも正しいんだと思います。だから難しいんです。僕はモンゴルに行って、同じ仲間として違う楽しみを感じて帰ってこれたのかもしれません。

……それにしても、水、汲んだ意味ないじゃん……。

アイラブユ〜！

世の中には必ず周りから愛されるヒトがいます。そのヒトは幸か不幸か周りからいろんな愛情表現を受けることになります。ちょっと歪んだ愛情表現もあるので気を付けなければいけないと思います。

たとえば、みんなが楽しそうに写真を撮っているときなど、かなりの興奮状態に入っていきます。そうするとわけもわからない行動に出ることも多いわけです。意味もなくヒトを抱きかかえちゃったりします。ほとんど誘拐に近いような感じもします。そして、意味もなくチュ〜チュ〜しちゃったりします。恐ろしい限りです。

かなり、力いっぱいの抵抗を受けました。なので、こちらもかなりの力で押さえ込みにいきました。さすがに二人がかりで立ち向かえば何とかなるモノです。動きを封じ込めることができていたような感じがします。為せば成る……教訓です。

アホなことをしながらも、何やかんやいって、仲がいいってのは大切だと思います。それは年がら年中べったりしているのとは違います。アホなことだけではない、本当に真剣に心の底からの本音を語れるような存在は貴重なわけです。男だ、女だ、関係なく、愛すべき人間というのはいいもんだなぁ、と感じました。

モソモソと絵を描いていると横から覗き込む人たちがいます。「うまいね」なんて言ってもらったら、もう鼻高々になってしまいます。普段、人からほめられることなんてほとんどないですから、たまにほめられると有頂天です。

この時も、やっぱり絵を描いていました。そしたら、ボギーが「スケッチブックを貸せ」と言うんです。「なんでぇ?」と聞くと「自分も描く」と言っています。「ほう、おもしろい。描いてもらおうじゃないか」……くらいに偉そうなことを思いながら、スケッチブックを貸してあげました。

しばらくすると、妙にリアルな馬が描きあがっていたんです。内心「やられた!」と思いました。だって、他のページに僕が描いた馬よりも馬チックだったら、そりゃ、悔しいでしょ……。

それはさすがにモンゴル人の絵です。馬のことをよく知っていることがわかります。体のつくりだとか筋肉の盛り上がり方だとか、パッと見ただけじゃわからないような特徴が漂っているんです。体で覚え、肌で感じることの影響がどれだけ大きいかを悟りました。馬と共に生きる人々の中に流れる熱い血が、その絵の中にも流れているんですよね……。

僕の体を流れる血には、どんなものが宿っているんでしょう。自分を見つめることでそれを感じ取っていきたいと思います。

いよいよ草原ともお別れする時が近づいてきました。この頃には、僕と夏の草原とは切っても切れない関係になっていたように思えます。それほど、僕にとってモンゴルの草原での経験は大きなものだったんです。第二の故郷、モンゴルよ……。

馬、そして、人……当たり前のことなんだけど、その存在の大きさを感じました。どこまでも走っていきたい、と思える馬の上、モンゴルの広い草原を駆け抜ける喜びはどう考えても日本の中では味わえません。尻の皮もむけました。パンツも血に染まりました。でも、まだまだ乗り足りない思いでした。

馬に乗って訪れたあちこちのゲル……そこでのもてなしは心を震わせました。日本人の口には合わない乾燥チーズ、塩味のミルクティー……、時にはのどが焼けるようなアルコールもいただきました。でも、どこへ行ってもその出迎えは僕を包み込んでくれるものでした。……人の温かさです。

人との出会いってすごいものだと思います。一種の奇跡ですよね。地球上のどこの誰と出会うのか……何億分の一の奇跡なんだから、この出会いは大切にしなくちゃいけないと感じます。これは別にモンゴルじゃなくても同じなんだけど、それを強く実感させてくれたモンゴルに感謝、感謝です。

ところで、……僕には第二の故郷がいくつあるんでしょねぇ……。

バスの骸骨。

草原にずっと気になっているモノがありました。僕は朝早く起きて一人でこっそりそこへ向かいました。そして、一人でこっそりそのモノと対話をしてきました。その対話の跡がスケッチブックに残りました。得も言われぬ姿でした。

バスは走っているとき、僕らの足として活躍します。それが走れなくなったら、その役目も終わります。残念だけれどそれは仕方がないことだと思います。でも、このとき僕の目に焼きついたのは、そのまま放っておかれた残骸でした。せめて、バラバラに解体して葬ってあげることはできないかと思ったんです。ただ単に放っておかれるということは、何の感慨もなく、何の思い出もなく、何の悲しさもないということです。そんなに無意味に生きたバスじゃなかったと思うんですが……。

人間も、いつか必ず最期を迎えます。今、殺しても死なないくらいに元気にぼ〜っとでも生きている僕でも、いつか、くたばる日がきます。旅の途中、道端で朽ち果てても構いません。むしろ、それは本望です。でも、そのまま放っておかれるのは悲しいように思います。誰でもいいです。……できればきれいなお姉さんがいいんですが……、花の一輪も供えてくれて、サヨナラをしてくれたらうれしいんです。

寂しがり屋ですよね。

どんな世界じゃ？

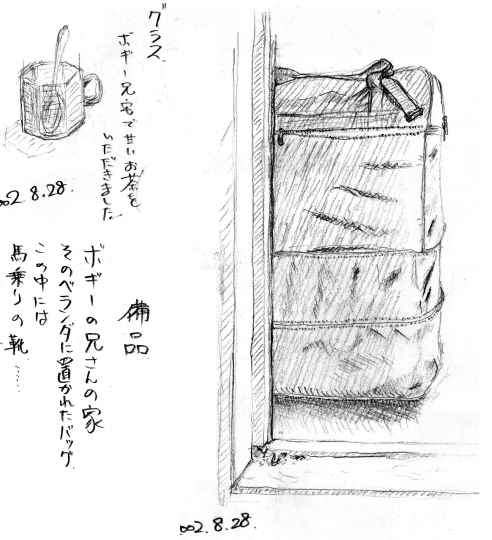
モンゴル初日にお世話になった、ボギーのお兄さんの家に、またやっかいになりました。「ギンちゃんツアー」の面々は僕を一人置いてさっさと日本へ帰ってしまったのです。……といっても、僕はもともと先に来て後から帰る予定で来ていたんだから、ギンちゃんたちには何の罪もありません。

この日のこの部屋は、初日のモノとは違う雰囲気がありました。出していただいたお茶をすすっていると、小さい影がスッと現れました。最初に現れたのは長男だったと思います。彼はクールに振る舞い、僕のことなんか眼中にないという態度でした。その次に現れたのが、次男です。彼にはまず、僕の顔芸を浴びせました。手始めに眉毛のウェーブをしてみました。なかなか好感触です。アントニオ猪木からアイィ～ンと連続顔技で攻めました。完全に僕の勝利といってよかったと思います。

打ち解けてくると、また、一人出てきました。四男でした。彼は何も考えず、ソーセージに食らいついたりしていました。その後、三男も登場し、兄弟勢揃いです。

四人そろうと、もうメチャクチャ……、何でもアリで、長男にはカメラを奪われ、撮られまくりました。

ハチャメチャな彼らでしたが、おかげで孤独の寂しさを忘れることができました……。



ボギーのお兄さんの家のベランダに、大きな荷物が置かれています。本来はギンちゃんの私物のはずなんですが……、彼曰く、「『雨の旅行社』の備品なり」と……。

毎年毎年、モンゴルを訪れるギンちゃんがうらやましく思えます。重たい荷物を担いでヒコーキに向かう必要がないから……、ではなくて、純粋にモンゴルで過ごす時間が多いことをうらやましく感じるんです。ギンちゃんは他の国へも旅をします。でも、それぞれの場所にそれぞれの意味があるみたいなんです。モンゴルという国も、もともとは中古自動車を輸出していたという経緯があるみたいでした。

そう考えると、僕の旅には深い意味はないのかなぁ……なんて思ったりもします。ただ単に行ってない国、行ってない場所へ行きたいという思いだけで旅をしていますから……。ホント単純な理由なんです。

でも、それって大切なんじゃないかと実は思っています。まだ自分が見たことのないモノは、この眼で見たいと感じるし、味わったことのないモノはこの舌で味わいたいと感じます。行かなきゃわからないことは多いですからね。

テレビの世界じゃ感じられない、肌で感じる何かを求めて僕は旅を続けていきます。

抜け殻。

ボギーのお兄さんの家から草原へ戻ることはなく、日本へと帰ってきました。僕にとってあまりに内容の濃いモンゴル旅行だったので、帰ってきてからも草原の薫りが体から抜け出ず、他のモノが受け入れられなくなっていました。名古屋に着陸し、新幹線で浜松へと帰ってくる途中、窓に映った自分の姿を見ても全然魂を感じられませんでした。

そんなときでもどこかで冷静に自分を見ているもう一人の自分がいて、「こいつ変だぜ……」と心の中でつぶやくんです。そして「おもしろいから写真に残しとけ！」と、勝手にシャッターを押すわけです。こっちの自分はかなり遊び心に富んでいて、いつでも他の人が撮らないような写真を撮るにはどうすればいいのか必死で考えています。

さて、彼が写真を撮ろうとして身構えると窓の中の自分も同時にカメラを構えています。いやいや、撮りたい写真はこんなモノではないんです。魂の抜けたモンゴル男を撮りたいんです。それで彼は工夫しました。セルフタイマーの勝利です。何とか窓の中の自分の姿を写真に収めることに成功しました。

窓の中の自分から抜け出した魂が、どこを飛んでいたのか知りません。でも、どうやらその魂がモンゴルの良さだけを集めて、今、心に戻っているようです。

街の光。

振り返るとそこにはビルの光が……。この光を見たとき、本当に日本へ戻ってきてしまったんだと感じました。ほんの何時間か前までは、裸電球一つの灯りがまぶしい世界にいたのに、もう、自分はその世界のことを過去の事としてとらえているんです。どうやら、僕はやっぱり日本人のようです。

日本の中にいると、僕は「どこの国の人？」という目で見られることがあります。……そんなに変ですかねぇ……。日本の外にいて、他の国の人と間違えられた事はないんですよ。真夜中のコンビニは便利だと思うし、カード式だけど携帯電話だって持っています。ま、こんなことを自慢げに主張すること自体、日本人離れしているように思われるのかもしれませんけどね……。

「夜」って何なのか……今の日本で端的にそれを言いきることはすごく難しいような気がします。日本だったら光り輝く夜もあり、二十四時間営業の店だってあるわけで、眠らない夜でもあるんです。でも、もしモンゴルの草原だったら「夜」とは闇であり、星降る空です。得体の知れない何かが支配する、人間の力が入り込む余地のない領域なんです。そして、僕が日本へ帰ってきていても、モンゴルの日常は淡々と流れているんです。

家への道のり、背後にたたずむ街の光を見て、今回の僕のモンゴル旅行が終わったな、と本当に実感しました。

あとがき

僕は自分が旅してきたことを、自分のクラスの学級通信（裏面）で紹介してきました。内容はくだらないことも多いですが、自分の心が揺れたことについて書き綴ったものです。自分にしか書けない、自分の感性を文章にしようと思って発行していました。

周囲の反応を見ていると、表面である正統派学級通信よりも裏面の方が感触が良く、複雑な心境になりつつも、密かに喜んでいました。その反応の中で「本にしてみたらどうか」という声があり、ちょっと調子に乗って「いいかもしれない」などと考えてみたわけです。

僕の旅のスタイルは今のところ三つのパターンがあります。自転車に乗ってふらふらする「チャリダー」スタイルが一つ目です。バイクに乗って走り回る「ライダー」スタイルが二つ目で、国外での「放浪」スタイルが三つ目となります。三つのスタイルそれぞれの感じ方があって、それぞれの視点があるというのが自分なりの分析です。

「チャリダー」は平均時速二〇キロの世界です。流れ去る景色もそのスピードなので、様々なモノが目に入ってきます。尻の痛さに負けて、おもしろいモノが目に留まらないこともありますが、モノとの出会いは自分次第、といったスタイルです。

「ライダー」はガンガンぶっ飛ばす世界です。なので、目に留まらないことも多く、よっぽどのモノでないと頭がそこに向かっていきません。ネタに助けられて自分の感覚が目覚めるスタイルなのかもしれません。

「放浪」するのは国外なので、目にするモノすべてが僕の好奇心をそそってくれます。その好奇心をいかに表現するのか、悩まされてしまうスタイルに思えます。

三つのスタイルの旅がありながら、主人公はすべて僕自身です。僕の感性を開けっぴろげにした文章を読んだ

とき、たぶん、全然受け入れられない人もいると思います。でも、逆にすごく納得してくれる人もいるんじゃないかと思うんです。自分勝手な僕としては、この、共感してくれる人に文章を読んでもらって「へぇ〜」と言ってもらいたいんです。ニヤリとしてもらいたいんです。

自分と同じような感覚でものを考える人と連帯感を持てたらステキだと思います。そんな、同じような感覚を発掘する人がいたとしたら、うれしくなってしまいます。寂しがり屋の僕は、仲間の輪が広がって幸せになることを夢見て、文章を世に出したいと思います。

筆者　じろちょう

学生時代に放浪癖が現れ、今に至る。普段は中学校という場所で「先生」と呼ばれる生活をしている。

放浪歴

チャリダーとしてつなぎつなぎで日本一周を達成。ライダー歴は浅く、台風とともに北海道へ渡り、知床半島で沈没していた。国外逃亡を試み、初の脱出はインド。２度目にはインドネシア。３度目の正直、フィンランド。３ヶ月半ほどの期間で、中国、ラオス、ベトナム、カンボジア、タイ、バングラデシュ、インド、ネパール、香港（返還前）をふらつく。その後、メキシコ、フィリピン、韓国、オーストラリア、ペルー、モンゴルへの脱出を試みた。

タビのキ

2004年6月24日発行

著　者 —— じろちょう
発行者 —— 桐生敏明
発行所 —— 株式会社 かんぽうサービス
大阪市西区江戸堀１丁目２番14号（〒550-0002）
電話　(06)6443-7611　　FAX　(06)6445-2470
発売元 —— 株式会社 かんぽう
大阪市西区江戸堀１丁目２番14号（〒550-0002）
電話　(06)6443-2171　　FAX　(06)6443-2175

印刷／製本……株式会社 淀川工技社

©2004 Printed in Japan
乱丁本・落丁本はお取替えいたします。